鋼鉄の指揮官（ハガネノシキカン）

黒縁眼鏡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
鋼鉄の指揮官（ハガネノシキカン）

【Ｎコード】
Ｎ４７６２Ｚ

【作者名】
黒縁眼鏡

【あらすじ】
若くしてとある空軍基地に司令として派遣された男のストーリー。
ＳＦロボットアクション物の定番であるパイロットが主人公では無く、指揮官として戦略・戦術を駆使して敵との戦闘を繰り広げていく。
エースパイロットでも無い彼を英雄と呼ぶ者はいないだろう。
彼より輝かしい功績を残した者は多くいる。
ただ、彼がいなければその功績は無かったかも知れない。
部隊の裏役者として戦っていく彼の知謀を楽しんでください。

＊他のサイトでも一部アップしています。

登場人物（前書き）

登場キャラの簡単な紹介です。
読み進めて誰だったかな？
と思ったら見直してみてください

登場人物

登場人物

キーナ基地のメンバー

坂本竜（サカモト リュウ）：階級大佐・年齢２８

　世界初の人型兵器マップス試験用特殊部隊出身。初期マップス適合者の中に士官学校出が彼一人だったため、異例の若さで基地指令に赴任する。

田口修造（タグチ シュウゾウ）：階級軍曹・年齢２５

　第二世代型マップスの元テストパイロット。現役パイロットを続けながら教官としてパイロット候補生の指導にあたっている。

整備のオヤジ：整備主任・年齢４３

　主人公のパイロット時代から整備を担当していた。ガレージのカリスマ。

ガンドック小隊

　近接攻撃と連携が得意な若い正規パイロットの集まった小隊。部隊内はいつも騒がしい。

ガンドック１：犬塚剣（イヌヅカ ケン）・階級中尉・年齢２５

　ガンドック小隊の隊長。騒がしい部隊を上手くまとめている。

ガンドック２：吉田理恵（ヨシダ リエ）・階級：少尉・年齢２２

　ガンドック小隊の副隊長。少し小言が多く理屈っぽい。同じ部隊の高井則良とはライバル関係。

ガンドック３：小山静（コヤマ シズカ）・階級准尉・年齢２０

いつも無表情で声に抑揚が少ないと言われている。

ガンドック４：高井則良（タカイ ノリヨシ）・階級准尉・年齢２０
お調子者だが、戦闘中の命令にはしっかりと従う。吉田との勝負は負けが多い。

ガンドック５：石山慎治（イシヤマ シンジ）・階級准尉・年齢２０
冷静なスナイパー。冷静過ぎて気付かないこともあるとか。

クロスボウ１：武田京子（タケダキョウコ）：階級准尉・年齢１９歳
男勝りな女性でたまに色っぽいギャップが素敵と噂されている。スナイパー担当。

ランス１：沖田修司（オキタシュウジ）：階級准尉・年齢１９歳
童顔の男性。男性受けまで良いことに本人は気付いていない。スナイパー担当。

ソード２：伊東公太郎（イトウコウタロウ）：階級准尉・年齢１９歳
反射神経が良い。近接重視のファイター担当

その他基地のメンバー

徳川大佐：オーカシス陸軍基地司令官・年齢４９
ほりの深い渋いダンディーなオジサマ。軍による首都警備の第一人者

毛利大佐：カシゴマ海軍基地司令官・年齢５０
老狐と称される強面なオジサマ。首都警備の応援に参加する。

宮野茂（ミヤノシゲル）：ヤポネ軍空軍大将・年齢６０
　坂本大佐のパイロット時代からの上官。眼鏡のおかげで極めて真面目に見える方だが、かなりの破天荒オヤジ。定年は６５なのだが、特別顧問として残るつもりでいるらしい。

陸軍大将と海軍大将：年齢５９と５８
　警備について確認をとるために空軍大将の宮野とともに打ち合わせに参加。空軍大将と合わせて軍の三大トップ。三人の仲は結構良い。

警察庁長官・年齢５６
　国際会議中は建築物、市民、首脳と守るものが多くて苦労する警察トップ。毎回警備が大変なので、そろそろ胃潰瘍にでもなるのではないかと心配中。

澄川早苗（スミカワ サナエ）：中央司令部情報解析班に所属・年齢２６
　坂本のパイロット時代の同僚。音にとても敏感で、声の調子から人の感情を予測することが出来る。

企業メンバー

松平（マツダイラ）：菱田重工技術顧問・年齢３３
　白衣とボサボサ頭に眼鏡がトレードマーク。ＭＡＰＳ開発者の一人。
機械に対して変態的な情熱を持つ。

メカニックおよび設定（前書き）

登場メカの設定

メカニックおよび設定

ＦＴＥ粒子
［Ｆｒｅｅ　Ｔｒａｎｓｆｅｒｒｉｎｇ　Ｅｎｅｒｇｙ］の略。技術の根幹を担っている特殊粒子。
あらゆるエネルギーを無駄なく変換出来る不思議な性質を持つ。

ＭＡＰＳ
［Ｍｕｌｃｈ　Ａｒｍｓ　Ｐｏｒｔａｂｌｅ　Ｓｙｓｔｅｍ］の略。
高さ４ｍほどの人型兵器。

第一世代ＭＡＰＳ
開発コード「ゴースト」
技術者達の「だって人型のほうがカッコいいじゃん」で開発がすすめられた新兵器。
外観は戦車を人型にしたような角ばった見た目。
最高の柔軟性と最高の攻撃性能を持つと称されるが、機体バランスの維持に難があった。
人の脳と機体をリンクさせバランスを取ることに成功するが、適性を持つ人物はわずか１０名しか発見出来なかった。

主なパイロット：坂本・松平他、試験用特殊部隊ゴーストのメンバー

第二世代ＭＡＰＳ
開発コード「ハガネ」
ゴーストパイロットたちの操縦データから機体制御機能を大幅に改善するＡＩが開発され、
誰でも扱えるようになった人型兵器ＭＡＰＳ。
隠ぺいすべきゴーストから一般化した鋼鉄の兵士という由来で開発

コードが「ハガネ」となった。
遠・中・近距離に合わせてカスタマイズが出来る。
カスタマイズによって細身からマッシヴな体型と見た目が変わる。

第二世代ＭＡＰＳ
コード「サビ」
ハガネの機体を解析した第三国が開発したＭＡＰＳ。
スペックとしてはハガネとほぼ遜色がない。
ヤポネ軍部からは鋼鉄にとって忌むべきものである赤錆から由来して「サビ」と呼ばれている。

第零章「始まりの戦場」

　上官の一言で隊員全員が巨大なモニターがあるブリーフィングルームに集められた。
「さて、ゴースト隊の諸君。国境に展開する警備隊が突破されそうなんだが、どうする？」
「どうするもこうするも、救援に向かわないとダメでしょう？！」
　やせ気味の眼鏡をかけた上官があまりにも適当な質問を投げかけたので、思わず全力でつっこんでしまった。
「正解だ。では状況を説明しよう。味方部隊の両翼に敵の大部隊があてられていて、中央が手薄だ。現在そこを攻められている。目的は言うまでも無く国境地帯の制圧だ」
　机に埋め込まれているモニターに敵味方の状況が描写されている。
「でだ、坂本お前ならどうする？」
　坂本と呼ばれた俺は迷わずに地図上にマーカーを入れていく。
「中央の部隊を叩きます。両翼に展開する敵部隊は、恐らく陽動です。本命は間違いなく中央の突破となるでしょう。更に増援が送られる可能性があります。逆に言えば、ここさえ押さえてしまえば敵の目的は阻止出来るかと」
「模範解答だ。ただ、こちらは試験段階中の人型兵器がたったの十機だぞ？　やれるか？」
　人型兵器開発者でパイロットの一人が無邪気な顔で笑っている。
「当たり前です。僕の子ですよ？　人型だからこそやれるんですよ」
　対照的に苦笑いをしながら上官は頭をかいた。
「よし。それじゃゴースト隊行ってこい！　がんばれよ」
「「了解！」」
　隊長である俺は隊員のみんなを連れて、戦車を人型に改造したような二つ目の全長４ｍの人型兵器に搭乗し、初めての戦場に赴いた。

「こちらゴースト1作戦区域に到達。敵戦車部隊を確認。数は二百」
「中央に展開する味方部隊は既に壊滅状態です。一台も突破させないでください」
現状、味方部隊は自分が指揮する新型十機による一中隊のみ。
「スカイアイより全機へ、人型兵器マップスの実力を世界に見せつけてこい」
「了解。ゴースト1、攻撃を開始します」
上空８００ｍを時速７００ｋｍで敵戦車部隊に近づき、私は装備された４０ｍｍ口径のアサルトライフルの射程内に入った敵戦車をロックオンする。
放たれた弾丸は戦車の装甲をいとも簡単に貫き、赤い炎をあげて爆散させた。
「まさかたったの五発で沈めるなんてねぇ……元戦車乗りとしてはぞっとするわ」
ゴースト４が呆れたような声で感想を述べる。
「驚くのはまだ早いんじゃないか？　一人のノルマは二十台だぞ？　俺様が四十台は落とすけどな！」
「その通りだ。全機攻撃開始！　気を抜くなよみんな！」
ゴースト3の宣言から私の合図で一斉攻撃が始まり、最初の戦車２０台に銃弾の雨を降らせて、わずか二分で片づけてしまった。
「ゴースト全機、敵戦闘ヘリと戦闘機がそちらに十機ずつ向かっています。迎撃してください」
「了解。全機迎え撃つぞ」
「「了解」」
敵航空戦力からミサイルが発射され合計六十発ほどがこちらに向けて飛んできた。こちらも前進しながらフレアを射出し、ミサイルの誘導を狂わせて回避する。
「このまま前進してヘリを叩き切る！　全機俺に続け！」
「お、熱いねぇ隊長！」
機体を回転させながらガトリングを回避して、ヘリの下に回り込

みダガーで機体を二つに切り裂く。
味方機と共にヘリを次々に落とし、続けてライフルで航空機を撃ち落していく。
「ふっ、さすがは僕の子。航空兵器も相手じゃないね」
自分の兵器を自慢していて警戒をといたせいか、開発者兼パイロットのゴースト5が歩兵からの携行ミサイルに気付いていなかった。
「ゴースト5！　油断するな！」
声をかけた頃には直撃を貰っていたが、煙が晴れると中からはほぼ無傷の状態でまるで何事も無かったかのようにたたずんでいた。
「だから言ったでしょ？　マップスは最高の兵器だよ。ほらほら早く敵を片づけよう」
撃墜スコア戦車三十四台、戦闘ヘリ十三機、戦闘機五機。
こんな信じられないような撃墜スコアが俺の初陣だった。

第零章「始まりの戦場」（後書き）

そのうちパイロット時代の外伝が作れたらなーと思って、走りで書いてみました。

序章：コーヒー&ワールドニュース

序章「コーヒー&ワールドニュース」

「起きて下さい。坂本さん起きて下さいよ」

ん？　しまった寝ていたのか。誰かから身体をゆすられている。

声の特徴から該当する人物を割り出してみる。

「ん？　澄川さん？」

「正解です」

同じ部隊に所属するオペレーターの澄川早苗がどうやら起こしてくれたらしい。

さっきまで何をしていたんだっけ？

寝ぼけた頭で周りを見渡すと書類の山が崩れて、そこら中に散らかっている。

そうだ、新兵器の最終報告書を書いていたら眠たくなったのか。

「あのぉ……連絡見てないですか？」

連絡？　何のことかさっぱり分からない。

とりあえず、個人用の端末をチェックすると上官から連絡が入っていた。

《１５００に司令室へ来い》

……へ？　今の時間は……げ、１５時３０分にしか見えない。

「えーっと、澄川さん……あなたが俺に会いに来た理由ってもしかして」

澄川はばつが悪そうにそっぽを向いて頭をかきだした。

ショートカットのはねている髪が指につられて踊っている。

「その焦っている様子を見ると、多分坂本さんが思っている通りです」

「ありがとう！　行ってきます！」

全速力で司令室に向かって走り出す。

また上官にどやされてしまう。
これでも一応小隊長として威厳を必死に維持しているんだ。こんなしょうもないミスで信頼を失ってしまうなんて悲しすぎるぞ。
切れた息を無理矢理抑えて、扉をノックする。
「坂本龍です。失礼します」
「坂本か。入れ」
扉を開けると司令官が両肘をつきながら手を組んで、その上に顎を乗せている。
少し機嫌が悪そうな顔をしながら、嫌みたっぷりの口調で遅れた理由を指摘された。
「どうだ？　書類を枕にゆっくり眠れたか？」
ばれていた……。言い訳をせずに素直に謝ろう。
「申し訳ありません。居眠りをしていて、連絡に気付きませんでした」
司令官が軽くため息をついている。
最近では戦闘訓練が減った代わりに、戦術や戦略等の指導が増えているので、今度の戦術レポートが倍増しそうだ。
通常の量でも、かなり厳しい指摘が返されて苦労するのに、倍増したらどうなるんだろう？　眠れるのかな……。
その状況を想像してうんざりする。
「あー……安心しろ。レポートは増やさないし、撃墜スコアを増やして来いとも言わんよ」
あれ？　心の中が読まれた？
驚いた顔をしていたのだろう。連続でまた指摘されてしまった。
「そんな驚くことは無いだろう。その癖が治らなかったら……いつか教えてやる」
一体何だって言うんだ？　超能力でも教えてくれるのか？　読心術に近い物を習い始めてはいるが、俺には到底理解出来ないレベルで言い当てられている。
とりあえず、これ以上ぼろを出さないように早く本題に入って貰

うしかない。
「ところで、用件は何でしょうか？」
「今からちょっとしたテストをする。私の質問の答えを言い当ててみろ」
突然どうしたのだろうか？　緊張であふれた唾を飲み込む。
「坂本龍中尉。新兵器適合者（ゴースト）の中に士官学校出は君しかいないな？
そして、現在その新兵器が一般化され量産体制に入った。つまり誰でも使えるようになる。そんな中でだ。誰も使ったことの無い新兵器の実戦訓練やら戦術研究やら指揮というのを誰がやる？」
最近自分に課せられた数多くの戦略・戦術レポートと新兵器の評価報告、そして今の思わせぶりな質問内容。該当する可能性に頭が真っ白になりかけながら答えを返す。
「もしかして、俺がやるんですか？」
自分を指している指が若干震えている。
「正解だ。おめでとう。最終試験合格だ。お前来月から大佐に昇進な。ちなみに言い忘れてたが、我が輩も昇進してるぞ」
「へ？」
「お前には隠してたからな。驚くのも無理は無いが、試験部隊ゴーストは解散だ。他の奴らも教官として各地に派遣するからな。お前は来月から最南端にあるキーナ空軍基地の司令として頑張ってこい」

この辞令から私の生活は一変する。
軍上層部から辞令を受け取るまで、私は２０歳から２６歳までパイロットとして国境付近や紛争地域での介入など各地を転戦してきたが、今はヤポネ南方キーナ空軍基地司令として転属して２年が過ぎた。
この２年でようやくパイロットではなく、管理者としての仕事にも慣れてきている。
顔を洗い、身なりをただす。鏡に映るのは身長１７０ｃｍで筋肉質のしまった身体をしている男性。髭は剃ってあり、髪型は清潔感

のある短髪で、眼はどちらかというと垂れ目だ。実年齢より若く見られることがそこそこある。
そのため一人称も私に変えて、しゃべり口調も丁寧な物に変えることにより威厳を無理矢理出している現状だ。
軽く朝食を済ませ、コーヒー片手に端末を立ち上げると、おはようございます。と機械音声が流れた。
カレンダーに記録されているスケジュールのチェックから、私の朝は始まるのだ。
「さて、今日の仕事は」
・パイロット候補生の模擬戦０９００
・国境資源会議警備の打ち合わせ１４００
・各種基地報告書の作成。
「今日も忙しそうだなぁ……」
場所と時刻を携帯端末の情報と一致したのを確認する。
「まだ余裕があるし、時間が来るまでニュースでも見るか」
特に大きな事件もないようで、経済では首都と郊外の地価が連続で上昇中とか、企業の設備投資が新記録や新製品発表だとか景気の良い話が掲載されていて、芸能やスポーツ関係の記事も多く掲載されている。
今日も当たり前の平和が続いているようだ。
芸能人のゴシップ話でコメント欄が盛り上がれるのは国民に余裕のある証拠だろう。
「さてと、パイロット候補生の模擬戦はまずガレージ集合だったな」
空いたコーヒーカップを洗い、乾燥棚において個室を後にする。

第一章「機械の身体」

第一章「機械の身体」

佐官用の個室からガレージに向かう途中で教官を務める田口軍曹を見つけた。身長は１８５ｃｍと高く、黒い髪のショートモヒカンがあるせいで、もう少し高く見える。

日に焼けた黒い肌と服越しにも分かる筋肉をしている彼はなかなかの威圧感かある。

こちらに気付くと敬礼とともに威勢の良い挨拶をしてきた。

「おはようございます大佐殿。お早いですね」

この少ししゃがれた声が怒鳴り声になるとたちまち訓練名物の鬼軍曹怒りの咆哮となる。場合によっては怒りと愛の鉄拳付きだ。

私も頭を上官仕様に入れ替えて挨拶を返す。

「おはよう田口軍曹。今年のルーキー達は使えそうか？」

「肯定です大佐殿。皆輝く物を持っています。それぞれの特性にあった配備をすれば悪くない戦力となるでしょう」

「なるほど。テストパイロットから乗りこなした現役の君がそういうなら、今日の模擬戦が楽しみだな」

この日の訓練は正式に配備されている小隊との模擬戦である。１対１の戦闘ではなく、基地防衛側と攻略側に分かれての実戦形式で戦闘を行う形式だ。

ちなみにこの基地では毎回こうした模擬戦で賭けが行われている。偉い人は怒りそうだが、戦闘の条件から勝利する方を選ぶのは戦術と戦略を学ぶ良い教材となるのだ。

教育にはムチと飴がなくてはならない。そのムチと飴にあたるのが賭けの結果ということだ。ちなみに模擬戦参加者にはハンデの条件が知らされていない。

「昨日の段階でレートは候補生が４倍でガンドッグが２倍です。ち

なみに私は候補生に賭けました。彼らならやってくれます」
鬼軍曹と候補生から恐れられる者の口から出る言葉とは思えず、笑ってしまった。普段しごかれている候補生達が聞いたら、さぞ驚くのではないだろうか。
「まったく。君が鬼軍曹と呼ばれているのが信じられない発言だな。今日の相手はガンドッグ小隊だろ。現役パイロットから見て候補生がガンドッグお得意の近接連携にかなうと思うか？」
田口軍曹はニヤリと笑い答えた。
「彼らが死なないためにだったら鬼でも悪魔でもなってやりますよ。もちろん個人の力は劣っているでしょうが、候補生にも連携と複数戦闘の捌き方は叩き込んでありますし、今回はハンデとして候補生を防衛側で指揮官あり、さらに数はガンドッグの2倍。指揮官も大佐殿と来れば勝てる見込みもあるでしょう」
候補生の実力を冷静に分析し、戦闘の条件も加味しての判断だった。単純に熱いだけではなく、冷静さも持っている彼ならこの先も教育を任せられそうだ。
候補生達は弱点や欠点を毎日のように突かれ怒鳴られて大変なのだが、戦場で生き残るために訓練をしているのでそこは我慢してもらおう。
ただ、そんな鬼軍曹の元で訓練している候補生達だ。ちょっとした褒美があっても良いだろう。一つ軍曹に提案をしてみよう。
「軍曹。そこまで言うなら、賭けに勝った時はあいつらに飯でもおごってやれ。きっと喜んでくれるぞ」
苦笑いをしながら軍曹は了解した。
彼の感情は分からないが表情と声の調子から推測すると、恥ずかしいから勘弁してくれ。と言ったところだろうか。
この後もガレージにつくまで候補生について語っていた彼の顔は実に良い顔をしていた。
私は小学校や中学校の頃、熱血教師の良さが分からなかった。
部活動はさんざんな目にあった記憶しかない。

ただ軍曹を見ていると、もしかしたら彼らもこの軍曹と同じように裏ではにこやかに笑っていたのかも知れないと思えてくる。
私が目指すべきリーダーとはどのような物かまだ正直分からない。
軍曹のような熱血教師風のリーダーも確かにありだとは思うが、多分それは６０００人を超える人間が集まる空軍基地トップの姿では無いような気がする。
まだまだ至らない所も多いが、精進していこう。
軍曹の話を聞きながらそう心に誓った。

ガレージ入り口にて田口軍曹と別れ、模擬戦用に整備されている人型兵器を見上げていた。高さは４ｍ一般的な２階建ての一軒家ほどで肩幅が３ｍの機械の身体だ。
「多武装携行システム」「Ｍｕｌｃｈ　Ａｒｍｓ　Ｐｏｒｔａｂｌｅ　Ｓｙｓｔｅｍ」または略して「マップス」と呼ばれる。
この人型兵器は、近年確率されたＦＴＥ粒子の制御技術を最大限に活用した兵器である。
ＦＴＥ粒子とは「Ｆｒｅｅ　Ｔｒａｎｓｆｅｒｒｉｎｇ　Ｅｎｅｒｇｙ」の略で、重力・光・電気・運動・位置・熱・質量などあらゆるエネルギーを目的にあわせて変換することにより動力を得ることが出来る。
従来のエンジンではガソリンの爆発を利用しての運動から車輪を回したり、燃料の燃焼と噴射による反作用から推進力を得ていたのだが、ＦＴＥ粒子の制御を行うと重力のベクトルを真下ではなく真横に運動エネルギーとして変換したり、移動により生じる摩擦を電気エネルギーに変換して機体に貯めることも理論上出来る。
このような各種エネルギーの自由変換により機体の機動性を始めとする各能力が各段に向上すると考えられた。
その理論の元、いくつかの試作機が作られたが、操作が当初想定していた物より煩雑となり、脳波によるサポートコントロールが必要となった。

そこで人が挙動をイメージしやすい人型として機体開発が行われた。
と教科書的には書かれているが、開発者の一人を知っている私は、技術者たちの趣味でこうなったように思える。
この国の技術者はどうにも変態が多いので、やりたいことをやりたいようにやった結果人型になったのではないか。
開発者の一人から
「人型の方がかっこいいでしょ？」
と言われた時は思わず吹き出したものだ。
ただこの選択は当初予定していた以上に効果的で、開発を進めていく中、人型兵器が持つ従来兵器とは違った特性が、兵器としての重要性を向上させ、秘密裏の開発ながら予算が潤沢に出たそうだ。
マップス最大の特徴は手があることだ。
手をつけることにより武装変更が持ち替えだけで済み、機体に搭乗したまま単独で出来る。さらに肩や脚部や腰部にハードポイントを設け多様な武装を携行可能になった上、武器格納用バックパック等の追加装備によりあらゆる状況に対処出来る能力の高さが従来兵器に比べ格段に向上していた。
ヤポネではそれまで経済的に多くの兵器を所持、維持するのは難しく、一機で複数の目的に使える兵器が非常に魅力的だったのだ。制空権の確保から地上の制圧まで幅広く運用が可能な兵器は喉から手が出るほどだった。
初めて実戦に投入された際に得られた機体評価は、飛行機より機動性が高く、ヘリコプターより小回りが効き、戦車よりも制圧力が高い。武器の変更による状況対処能力は歩兵並みで、武装さえ用意しているならあらゆる状況に対処が可能性である最強の現代兵器とうたわれた。
今では世界的に開発・販売メーカーが増加し、現在では大国に１メーカーは存在する勢いで広がっている。
「マップスも随分と種類が増えたな」

ヤポネの元祖マップスメーカー「菱田重工」の初代マップス「ゴースト」に乗っていた者からすると、この第二世代型は何度見ても感慨深く誇らしく感じる。
当初は脳波コントロールだったせいもあり、適合者が少なかったが、我々の操縦データをもとにＡＩが開発され、戦闘データから各能力に個性を待たせた第二世代のフレームの開発が行われたのだ。
ＡＩを触媒にしてパイロットとマップスの融合をコンセプトに開発された第二世代型は、更にパイロットに合わせた細かなカスタマイズまでも行えるようになった。
今一般に配備されているのがこの第二世代マップスで近距離、中距離、遠距離のどれかが得意なカスタマイズが出来る。
近距離型は装甲が少なめでスラッとしたシルエットをしていて、弱点となる関節部分にあたる所々に小型の追加装甲がつけられている。逆に遠距離型は全体の装甲が厚いためかガッチリしたシルエットをしている。
しばらく立って眺めていたら後ろから元気の良い声がかかった。
「よぉ、坊主！　あぁ、いや大将！　また乗りたくなったか？」
日に焼けた１７０ｃｍくらいの整備主任だ。
頭の髪の毛が最近減り気味で悩んでいて、少し小太りだががっちりしている。そして大声で喋る豪快な人だ。
このオヤジさんなかなかのカリスマ性を持っていて、多くのパイロット達からオヤッサンと慕われている。
昔からの知り合いとは言え、私は一応上官なのだが、特に喋り方は変えてこないらしい。
さすがに坊主は最近減ってきてはいる。その代わりに大将というのもいかがな物かと思う。
だが、若くしてこんな地位に抜擢されてしまったので、最初は信頼関係とか色々大変だったところを、オヤッサンの昔の戦友ということで隊員たちの信頼を得られた。
それに自分も前から世話になっているので、細かいことは大目に

見ることにしているし、こちらもある程度砕けて喋られるので良しとする。
　他の所から視察が入る時は気をつけてもらえば良いか。
「おはよう。オヤジさん。たまに懐かしさで乗りたくもなるけど、さすがにブランクがあるからね。現役には負けるよ。しかも、最近のマップスは脳波コントロールが減って、ＡＩによる補助で非常に操作性があがってるんだって？　それについていけるかわからんよ。それに残念ながら今は司令という立場だ。マップスに乗って前線で戦いながら全体指揮はとれないさ」
　まるで分かりきった冗談が通じなかったのを隠すように、オヤジさんは豪快に笑ってきた。
「まっ、それなら仕方ない。気が変わったらいつでも言えよ。あんたの一言があればあっという間に整備してやるからよ。なんと言ってもあんたは初代マップス中隊の隊長だ」
　それにしてもとオヤジさんが話題を変える合図をする。
「マップス乗りも随分増えたよな。十年前までは大将含めて１０人だったのが、今年はここだけで候補生が５０人か。すごいもんだな」
「さっきも言ったように操作性が向上して誰でも使えるようになったからな。まぁ、この基地が特別多いってのもあるんだが、上の連中かなりの数押し付けてきた」
「それだけ期待されてるんだろ。マップスの実戦経験がある佐官は大将だけなんだからよ」
「あの１０人に選ばれた上に士官学校出は私だけだったからな。ものすごい運だよ。おかげで白い眼で見られることもあるのがたまに傷だが、仕事の成果で見返せるように努力するしかない。私の成果にも繋がる新人を育成してくれる田口軍曹には感謝だな。私には基礎まで細かく教えられるほど暇がない。面倒な書類がこうも多いとは思わなかったよ。マップス乗りがする仕事じゃないね」
　やれやれと右手で頭を押さえて大げさに首を振る。
「心中察するぜ。ちなみにだ大将。そうやって書類で悩んでいると

ころ悪いが、今日の書類を追加しても構わないかい？　菱田重工の松平の坊主からマップスの第三世代フレームが完成すると報告があってな。採用出来るように申請書を頼むわ」

とんでもないことを凄く軽く頼んできた。

この基地に新兵器の実験部隊を擁するので、他の基地に比べれば申請しやすいとは言え、去年初めて新しいライフルを申請した時は、試験の許可が降りるまで色々あって一週間はかかった。

まぁ、私の不手際がその原因の大半を占めていた気がするのは内緒だ。

ただ、その後も、使用の手続きだの、搬入手続きだの、申請書類以外にも書く書類が多く、集めたデータを送る度に送信許可の書類を書かされたのだ。

しかもその後のライフル返却手続きも同様に面倒だった。

上層部がやった第二世代マップスの正式採用手続きに比べれば遥かにマシなのだろうが、新型機だととれくらいかかるのだろう。

考えるだけで頭が痛くなりそうだが、将来の兵士達のためなら仕方ない。

「分かった。後で資料をこちらに送ってくれ。松平もかんでいるなら良い機体だろうし」

松平というのは同じくゴースト隊にいた一人で、もともと菱田重工の開発者兼テストパイロットだったが、特殊部隊として徴収され共に戦った戦友だ。

彼によって戦場で得られたデータから数多くの兵器が作り出されている。

大事な仕事も頼めたし、残りの時間で最終チェックをしてくると言い残してオヤジさんは整備に戻っていった。

「そのうち久しぶりに乗るのも悪くないかもなぁ」

かの愛機と戦友のことを思い出し、思わず口から言葉が漏れてしまった。

オヤジさんが整備に戻って行ってくれて良かった。

第二章「ブリーフィング」

第二章「ブリーフィング」

そうこうしている間に候補生達が既にガレージ入り口に集合していた。
田口軍曹が点呼を取り模擬戦の心得を語っている。予定ではこの後各種機体のチェックを行いブリーフィングだ。その間に私は、相手をするガンドッグ小隊に簡易ブリーフィングを行うことになっている。
それぞれの機体の前に集まっているガンドック小隊の前に立ち説明を始める。
「今日の訓練は候補生だけではなく、諸君らの訓練でもある。シチュエーションは通信障害下で対空迎撃を低空飛行でかいくぐってからの敵地潜入だ。作戦目標は基地防衛部隊の制圧およびジャミング設備の破壊である。なお、今作戦は事前に敵部隊の武装・数の判断がつかなかった場合を想定している。武装は対マップス用を装備し、施設破壊は同武装をもって作戦にあたれ。バックアップ無しの状態での戦闘だ。敵の場所・目的施設は機体に搭載されている光学レーダー・熱源探知のみで索敵しなくてはならない。このような制限条件下の作戦だ。諸君らには言うまでも無いが、部隊内の連携を戦闘行動だけでなく情報においても上手くやれ。以上だ。何か質問は？」
隊長が手を挙げ質問をした。
「ジャミング施設の破壊を先に行った場合、バックアップは回復するのでしょうか？」
なるほど。さすがに隊長をやっているだけあって状況の悪さを認識し、打開策の検討も行っている。
「もちろんイエスだ。ジャミング施設破壊に成功した際は通信が回復し、衛星からの敵部隊分布図がレーダーに反映される。しかも、

喜べ。橘オペレーターからの激励付きだ。他に質問は？」
何処かから感嘆の声が漏れた。ガンドッグ４か。分かりやすい奴め。ガンドッグ隊から更なる質問は５秒待っても無かったので早速指定ポイントに向かってもらうことにした。
「よし、これ以上質問は無いようだな。ルーキーに負けるなよ！ガンドッグ小隊出撃」
「サー！　イエッサー！」
簡易ブリーフィングが済み、ガンドッグ隊は各々のマップスに乗り込み出撃準備を始めていた。私はそんな彼らの見送りをしながら整備班からガンドッグ隊の機体構成・武装構成の資料を貰い、その場を後にした。
「さてと、次は候補生か。正規パイロット相手とは言え、ハンデとして限られた情報量、数、地形、指揮の有無と来て負けたら敗因は私になってしまうな」
指揮官たるもの周りが不安にならぬよう構えておくべきなのだが、周りに人がいなかったので、ついつい苦笑いを浮かべてしまった。
一つ息を吐いて気持ちを入れ替え、候補生達の方に向かうと既に私が来るのを待機していた。どうやら軍曹から心得も機体チェックも終わったようだ。
ここからは私の仕事が始まる。彼等の前に立つと同時に候補生が揃って敬礼をした。少し表情が固いように見えるが、正規パイロット相手に模擬戦だから仕方ないか。
いや、それか指揮をとるのが私だからかもしれないな。私も士官候補生時代は上官が怖かった。少し懐かしさを覚えたが、思い出に浸る暇は無い。
敬礼を返し挨拶を始めるとしよう。
「候補生諸君、今日君達を指揮する坂本だ。今日まで君達が血も滲むような努力をしていることは知っている。今日の相手は確かに強い。１対１なら勝ち目は薄いだろう。だがしかし、君達は彼らに負けない絆を持っている。今まで訓練を共にしてきた時間は何よりも

強い経験だ。その絆をもって正規パイロットに勝利して見せろ。諸君らの健闘を祈る」
軍曹に目配せをすると次の指示を出してくれた。
「分かったかひよっこども。大佐殿の期待を裏切るなよ！　では、ブリーフィングルームに移動せよ！　ちんたらするな！」
軍曹の怒号と共に候補生達はブリーフィングルームに走って行った。廊下での会話を思い出してイタズラ心が芽生えた。
「こういうのを世間ではなんといったかな」
軍曹が不思議そうな顔をしてこちらの言葉の続きを待っている。
「そうだ。ツンデレというやつだ。これからは鬼軍曹ではなくツンデレ軍曹と呼ばれるのはいかがかな？」
私の冗談に軍曹が困ったようにひきつった笑いをしている。どうやらツンデレの意味はわかっているらしい。
「司令がそうおっしゃるなら。いささか教官としての威厳にかけるので遠慮したいのですが」
冗談が通じないほど真面目な男だ。しかも、まずは目上を肯定してから遠回しな否定を使いこちらをたてている。
やれといったら本当にやりそうなので、からかうのはこの辺で止めておこう。
「もちろん冗談だ。すまなかったな。後はモニターで観戦をしていてくれ」
軍曹は安堵の顔をして敬礼をした。
「イエッサー。ではあいつらを頼みます」
任せておけ。という意味を込めて敬礼を返す。
「君の教え子だ。負けるわけが無い」

軍曹と別れブリーフィングルームに向かうと、中で既に候補生が待機していた。中に入るとしっかり敬礼をしてくる良く出来た奴らだ。彼らのためにもしっかり仕事をしよう。
ブリーフィングのための大型モニターをつけて作戦を説明する。

「今回のシチュエーションは本隊が陽動にかかり、拠点兵力が少ない状態での奇襲をかけてくる敵迎撃だ。拠点施設にはレーダーのジャミング設備が設けられており、敵の索敵はカメラによる光学レーダーと熱源探知のみだ。しかし、ジャミングが破壊されると通信が回復し、こちらは丸見えとなる。いかに施設を守りながら敵を倒すかが鍵となる。具体的な数字は次に話すが、まずはここまでで、シチュエーションについて何か質問は？」

手を挙げる者はいないようなので、次に進める。

「敵はマップス一小隊のみ。数にするとマップス五機だ。敵作戦目標はジャミング施設の破壊、拠点制圧とそれに伴う防衛部隊の撃破と予想される。つまりこちら側は敵の全機撃破が脅威を取り除けるただ一つの勝利条件だ。なお、今回はジャミング施設の破壊を防げなくてもよい。が、防げたらちょっとしたボーナスを進呈しよう。勝利条件について何か質問は？」

後列に位置していた一人が手を挙げたので質問を促した。

「サー、敵の撃破判定はどのように行われるのでしょうか？」

「今回実弾兵器にはペイント弾を利用して命中箇所、命中時弾速をもとにダメージ判断を行う。また、粒子ブレードや粒子ライフルのようなエネルギー兵器は命中時の熱変化によりダメージを判定する。なお、訓練用に粒子密度を大幅に下げ被弾による損傷は起きないように設定してあるため安心してくれ。最後に武器によって係数がある。同じ当たり箇所でも発射武器によりダメージは変化するので被弾が少ないからダメージが少ないと思って油断するな。ＨＵＤにダメージの蓄積は表示されるので、機体のダメージチェックを常に怠るな。他に質問は？」

「ありません。ありがとうございます」

「よし、では次だ。これからは敵部隊迎撃のための作戦を説明する。まずは、敵部隊の編成を見て貰おう」

ガレージで整備班から貰ったガンドッグ部隊の資料を展開させていく。

「近距離格闘戦に特化したファイタータイプが一機、近中距離が得意なアタッカータイプが三機、そして遠距離に特化したスナイパータイプが一機の編成だ。各機体スタイルに合わせた武装は勿論サブウェポンとして、苦手距離を埋める装備も携行している。正面から戦えばこちらの数が二倍とは言え苦戦するのは目に見えている。そこで、諸君らには正攻法ではなく策を持って敵を打ち破る必要がある。今回の戦闘区域マップを見て貰おう。」

画面に基地周り５０ｋｍ程度の地図を表示した。この基地は南には森と山と海、北は山に囲まれた所に位置している。

「敵は南の海上から飛行してくる。待機ポイントは基地から南方３０ｋｍの海岸、基地から南方２７ｋｍ海岸付近の山の基地側、基地南方２４ｋｍの上空、そして基地南方２０ｋｍの森林地帯だ」

まずは待機場所の説明をしてから言葉を一旦区切る。皆の様子を見ると食い入るようにモニターを見ていて、大変真面目だ。

「次にそれぞれの動きだが、まずは海岸に足の速いファイターで三機待機してもらう。敵部隊が５０ｋｍ圏内に入ったら、海上に移動し敵と交戦。近中距離戦闘が可能な距離になったら即転身し、後退。牽制射撃をしながら山を抜けろ。抜けたタイミングでスモークグレネードを炸裂させる」

ここまでが第一の陽動。次に敵部隊を分断するための作戦を説明する。

「山を敵も抜けたら、上空に待機してもらうアタッカー一機とスナイパー一機により敵を上から攻撃。散開したタイミングを狙って山に待機しているアタッカー三機で背面から敵スナイパーを攻撃し他の機体に割って入りながら敵を分断する」

そして次が本命による攻撃で敵を撃破するところだ。

「分断した機体に同じく山に待機しているファイター一機が近接攻撃をしかけ、可能な限り早く撃破。さらに援護に向かう敵には基地南方の森林地帯よりスナイパー一機で牽制射撃をしかけ敵の合流を遅らせる。スナイパー撃破後はアタッカー三機ファイター三機によ

り敵ファイター一機を撃破する。同時に、スナイパー二機による砲撃とファイター・アタッカーで敵アタッカー三機を近接戦闘に持ち込み、援護を阻止する。ファイター撃破後は残存戦力全てで、残りの三機を叩くのみだ。まとめると不意打ちを連続で行い分断と包囲による個別撃破作戦だ。質問は？」

童顔で一部の男にまで人気の沖田が沈黙をやぶる。

「サー。それぞれの配置はどうなっているのでしょうか？」

丁度次に説明する内容だったので先に進めることを兼ねて答える。

「各自携帯端末を取り出せ。それぞれのコールネームおよび配置、機体と武器構成のデータを送信してある」

コールネームは最初の陽動がソード、上空待機班がクロスボウ、山に伏し分断をはかるのがアックス、分断した敵を落としにいくのがランスだ。それに各々の番号をつけている。

「本日は諸君らの部隊をアームズとよばせてもらう。他に質問はないか？」それぞれの役割が判明して皆の緊張感が表れている良い顔だ。後は各々の奮闘に期待する。

「よし、質問は無いようだな。各員健闘を祈るアームズ出撃せよ！」

「サー！　イエッサー！」

候補生が部屋を駆け足で出て行ったのを見送り、こちらも司令塔に移動する。既にオペレーターも司令塔にいるはずだ。

候補生の資料に書かれている能力が新人パイロットにしては意外に高く、彼らの成長ぶりに口元が思わずニヤケてしまった。

「軍曹の言う通り1対1ならガンドッグが勝つだろうが、複数相手なら危ないかもな。ガンドッグの対応が楽しみだ」

一つ深呼吸をして頭を落ち着かせて司令塔に向かった。

第三章「陽動」

第三章「陽動」

司令塔に着くと既にオペレーターが模擬戦の準備を完了していた。

作戦区域の地図を映し出した大型モニターを確認すると両部隊とも位置についていた。準備の最終確認をとろう。

長い艶やかな黒髪を縛ってポニーテールにしているオペレーターの橘に連絡を入れてもらう。

「本部よりガンドッグ全機へ。こちらオペレーターの橘です。みなさん準備は良いです？」

「ガンドッグ１レディ。いつでもいける」

「ガンドッグ２レディ。待ちくたびれましたよ」

「ガンドッグ３レディ。余裕です」

「ガンドッグ４レディ。良いとこ見せちゃうぜ？」

「ガンドッグ５レディ。問題無い」

それぞれ個性の出る応答だ。この組合せで良くうまくできているのが面白い。次は候補生の確認をとってもらう。

「本部よりアームズ全機。こちらオペレーターの橘です。整備班より全員マップスに搭乗済みと連絡が来ています。間違いないですか？」

「「アフマーティブ」」

候補生全機から通信が入った。こちらも準備完了だ。後は私が模擬戦開始の号令をかければ始まりだ。指揮官用の机のマイクをオンにして、声をはる。

「ガンドッグ全機。アームズ全機。これより、実戦型模擬戦を開始する。各員の健闘を祈る。ミッションスタート！」

「「イエッサー！」」
全機からいい返事が返ってきた。やる気があって実に頼もしい。
モニターを見るとそれぞれが動き出していたので、橘にガンドッグに課したハンデの連絡と実行をしてもらう。
「本部よりガンドッグ全機へ。これから先はジャミング地帯です。こちらからのレーダーを始めとする通信バックアップが行えません。注意してください」
「ガンドッグ1。ラジャー」
「橘ちゃーん、ジャミング施設なんかとっととぶっ壊すから待ってねー。あ、でも先に頑張ってとか言ってほしいな」
ガンドッグ4の軽口に橘は表情一つ変えないで受け流した。
「ガンドッグ4。作戦中です。私語はつつしんでください」
かわいい顔して実にクールな対応だ。
ガンドッグ4はお構いなしにそんなとこが素敵とまだ減らず口を叩いていた。
「通信を遮断します。頑張って下さい。応援してます」
橘の操作により、こちら側からの通信は入らず、向こう側からの通信は入っている状態になっているので、歓喜の声がこちらにダダ漏れになっていた。
「くぅぅ、橘ちゃん可愛い！　マジ可愛い！」
ガンドック4の興奮ぶりにおのおの突っ込みを入れてるのが聞こえて思わず苦笑いをする。
「作戦中ですよ。まったくどうしてあなたはこうも頭の中が空っぽなのか。そもそもですね。あなた一人に向けて言った訳ではないでしょう」
とやたら理屈ぽくつっこむ女性の声はガンドッグ2。
「バカ。本部には通信丸聞こえ。今頃笑われてる」
と抑揚のない女性の声でつっこむのがガンドッグ3。
「問題無い。いつものことだ」
と冷静で低い男性の声はガンドッグ5。

「お前ら仲が良いのは結構だが、そろそろ真面目にやれ」
と渋い男性の声を発する隊長のガンドッグ1が最後に締めるのが彼らの様式美だ。そんなつっこみの嵐の中ガンドック4がどれだけ橘が自分に親切にしてくれるかと抗議の声をあげている。
「君も苦労してそうだな。橘君」
きょとんとした顔でこちらに振り向いている。思わず言ってしまったがしまった作戦中だった。
「いえ、それほどでもありませんよ。彼一人だけじゃないので慣れてますし。それにこの程度でやる気を出してもらえるなら安いものですよ。案外男ってちょろいですよ？」
ニッコリ笑いながらとんでもないことを言い出した。今のを勘違いしている連中が聞いていたら大変かわいそうなことになりそうだ。
今はこれ以上余計なことは言わないように仕事に戻ってもらおう。というか計算でやっていたのか、誰が結ばれるかはしらないが頑張れ。
「そうか。その人心の扱い方については非常に興味深い話題だが、お喋りはここまでにしておこう。アームズの方はどうなっている？」
橘は自分の端末に向き直って報告する。
「ソードが残り三十秒で待機地点に到着。他のチームは既に目的地で待機、迷彩起動中です。ガンドッグが海岸に到着するのは大体五分後かと」
作戦地図をこちらも確認する。思ったより早いな。アームズ各機のレーダーにも情報は転送してあるが、注意を促す。
「ビッグハットよりアームズ全機。敵部隊が接近中。レーダーで確認出来ているか？」
「「アフマーティブ」」
よし、全員レーダーを見ている。次に最初に交戦するソード三機の様子を確認しよう。
「ビッグハットよりソード全機へ、敵部隊との推定交戦時間まで三分を切った。指定ポイントにダミーバルーンを射出し敵との交戦を

始めろ」
「ソード1了解」「ソード2了解」「ソード3了解」
山と山の間を挟んで東西にダミーを二機ずつ設置したことをモニターでこちらも確認をする。
「ソード1よりビッグハット。ダミーの設置が完了しました。これより敵陽動にあたります。」
「こちらビッグハット。ダミーの設置を確認した。陽動で撃破されるなよ。気をつけろ」
「「了解」」
そして一分後、ついに海上１０ｍ、彼我の距離が６ｋｍで双方が敵を補足した。「ガンドッグ」
「アームズ」
「「交戦開始（エンゲージ）！」」
交戦開始の合図とともに、最初に発砲したのはアームズ側だった。距離は６ｋｍ。通常アサルトライフルで当てられる距離ではないが、弾は当たらなくても良い。ただ注意をひきつけるための、射程外からの射撃だ。
それに対して、ガンドッグの方も通信を聞く限りこの射撃に戸惑っている。
「この距離でアサルトライフル撃ってくるなんて、候補生達よっぽど緊張してんのか？　この距離はロングレンジライフルでも割ときついぞ」
背中のブーストを使って真っすぐ飛んでいた機動から、肩と腰と脚部についているサイドブーストを噴射し、大きく横に一回転する回避行動を取りながら曲芸飛行でガンドッグ４が少し小馬鹿にした口調で疑問を口にすると。
「油断するな。常識を無視した行動には裏があるかもしれん。全機周りに気をつけ、回避行動をとりながら前進。真っ直ぐ飛ぶなよ。距離による減衰があるとは言え当たると面倒だ。ガンドッグ５は、ロングレンジライフルで応戦しろ」

「ガンドッグ５ラジャー。スコープモードで狙撃する。視界が狭まるので何か情報があれば通信を頼む」
隊長であるガンドッグ１は緊張がゆるまないようしっかり部隊の気を締めて反撃にうつってきた。
距離がまだあいている状態とは言え、真っ直ぐ飛んだら当たる可能性があるのと、本命の攻撃がいつどこから来るか分からない状況だ。いきなり距離を詰めず回避を優先する彼の判断は正しい。
こちらもソードに通信を入れる。
「ビッグハットよりソード全機へ。交戦開始を確認した。敵スナイパーの射程圏に入っている直撃を防ぐためにシールドを展開。シールドの隙間から牽制射撃を続けろ」
「「了解」」
ガンドッグ５が狙いを定める間に、ソード三機は肩と腰についていた縦３ｍ横２ｍの実体装甲をアサルトライフルの先端が隙間から出るように浮かして展開する。そしてその装甲の隙間から牽制射撃を続けた。
装甲を展開していたおかげでガンドッグ５が最初に撃った弾三発は防ぐことが出来た。
ソードが防御体勢をとり、弾が防がれたことをガンドッグ５が早速報告する。
「ガンドッグ５よりガンドッグ１へ。敵、浮遊型装甲を展開し防御姿勢をとっている。距離は現在５ｋｍ。射撃は当てられるが、防がれている」
「ガンドッグ１から各機。牽制射撃を加えながら距離を一気に詰める。フォーメーション（ハント）が可能な距離まで他方面から攻撃が無ければ、そのまま仕留めるぞ。全機高度を一旦上げるぞ」
「「了解」」
ガンドッグ全機が上昇のために脚部・背部ブーストの出力を上げ一気に高度を１００ｍほど上げた。
防御体勢に入った相手を切り崩すには近距離からの多方面攻撃が

有効と判断し接近を選択。さらに、恐らく近づいたタイミングで伏兵から攻撃があると考え、敵の位置がわかりやすい上空に高度を上げだのだろう。
　このタイミングで伏兵に気をつけているなら、そのまま利用させてもらうか。
「ビッグハットよりソード全機。浮遊装甲を展開しながら後退。敵との距離が２ｋｍを切ったらシールドを解除し、全速力でダミー設置ポイントまで後退せよ」
「「ラジャー」」
　距離が４ｋｍを切り、アタッカーであるガンドッグ２、３、４からのマップス専用に開発されたレールガン、通称レールライフルの射撃が始まった。
　今の所、ソード三機は機体を左右にふって回避行動をとりながら後退し、浮遊装甲で直撃を防いでいる。
　ガンドッグの方は全機が華麗にブーストを噴射し、縦横無尽に回避しながら、レールライフルを撃ち続ける。数発をぶつけながら、なかなか敵の撃墜が出来ないことにガンドック４がぼやき始めた。
「自分も乗ってて言うのはなんだけど、相手をするのが面倒というか、マップスってホント頑丈だな。戦車やらヘリならとっくに壊れてるだろ」
　ガンドッグ２が話題に乗っかり応答する。
「さすが、最高の現代兵器と言われているだけあって、簡単には落とせないですよ。ただでさえ、機動力が高くて捉えにくい上に装甲も堅い。しかもその装甲より頑丈な浮遊装甲を展開中ですし、そもそも浮遊装甲も頑丈じゃなかったらわざわざ武装として登録されていませんよ。それにですね」
　いつもの長話をされると面倒だと思ったのかガンドッグ３が制止をかけた。
「先輩長話はストップ。距離が３ｋｍを切りました。残り１ｋｍでハントの距離です」

相変わらず戦闘中でも声に抑揚がない。しかし、回避行動と射撃をしながら余裕で会話するとは良くやるよ。
対照的にソードは攻撃を受け続け余裕が無くなって来ている。
「橘。今のままのスピードだと何秒後に目標距離になる？」
三秒ほどで答えを出してもらえた。
「三十秒後です」
何とか持つだろう。続けざまの攻撃で混乱に陥らないように声をかける。
「ビッグハットよりソード全機へ。残り三十秒で敵との目標距離だ。もう少し耐えろ。浮遊装甲はそう簡単には破壊されない。今のまま上手く防ぎながら後退だ」
「「ラジャー」」
まだ大丈夫。パニックにはなっていない田口軍曹は良い教育をしてくれている。徐々に距離が詰まり３ｋｍを切ったところでガンドッグが速度を更に上げた。
「ガンドッグ１より、ガンドッグ全機へ。フォーメーション（ハント）」
「ガンドッグ２、お任せあれ」
「ガンドッグ３、仕掛けます」
「ガンドッグ４、待ってました！」
「ガンドッグ５、いつでもいける」
ファイターのガンドッグ１を先頭に左右にアタッカーのガンドッグ２と３がつき、その後ろにガンドッグ４、そしてスナイパーのガンドッグ５が続く。
ソードの三機は横一列に並んでいたが、ガンドッグ５がソード２に右手のロングレンジライフルをソード３には左手の粒子砲を連続で撃ち始めた。
ソード２と３の意識を防御に集中させ、ソード１には残りの四機で集中攻撃を始める。
「今までのは手加減してたのか？！」

「ソード1ドジふむなよ！」
「後退まで後何秒？！」
距離を見るとまだ2．5kmだが、通信から聞こえる候補生の緊迫した声と状況から、さすがにこれ以上近づかれると被弾する可能性があると判断した。
「ビッグハットよりソード全機へ。敵が本気になった。予定より早いが状況が悪い。こちらでポイントを指定する。全速で後退しろ」
「ソード1ラジャー。ロックアラート鳴りっぱなしで、生きた心地がしなかったですよ……」
ソード三機は機体を反転させ、展開中の浮遊装甲を全て背面に取り付け背中、腰、脚部につけられている全てのブーストを噴射し、後退を始める。転身した際に多少の被弾があったようだが、浮遊装甲を全て背面に取り付けた結果直撃は免れた。
後はうまく後ろからの射撃を避けるだけだ。
ただ、ガンドッグも簡単には逃すつもりは無いらしい。自らは真っ直ぐ飛行しながら相手には執拗な射撃で回避行動をとらせ、距離を詰めようとしている。同じ距離を進むにも真っ直ぐとジグザグや回転の回避行動が混じった進み方では明らかに真っ直ぐが早い。
だが、ソードは足の早いファイターのみの編成に対し、ガンドッグは足の遅いスナイパーも混じっている。敵を追いかけるのに必死になるあまり味方を孤立させ、伏兵に奇襲される危険は犯せない。その結果、足の遅い機体にあわせた速度となったので、徐々に両者の距離が開いていく。ガンドッグ4が呆れて通信で叫んでいる。
「おいおいおい、突っ込んできたと思って、本気で攻撃し始めたら、本気で逃げだしたよ？！　どういうことよ？　やる気あんの？」
ガンドッグ2がその発言に呆れて通信を返した。
「やる気がないのはあなたの頭よ。私達より少ない数で仕掛けて、距離が縮まったら後退ってどう考えても陽動でしょう。待ち伏せか後ろに既につかれているかのどちらかね」
「あぁ？　俺は常にやる気に満ちあふれてるよ！　それにレーダー

には敵影は映って無いぞ。熱源反応も今の所あの三機しか無いし挟まれてはいないだろ。大体、ルーキーにそんな小賢しいこと出来んのか？」
　ガンドッグ５が更に通信を割り込む。
「ガンドッグ４落ち着け。相手を過小評価しない方が良い。だが、今スコープでも後ろを確認しているが、確かに敵影は見えない。まだ挟まれてはいないようだ」
　そして、ガンドッグ３が続いた。
「となると、考えられるのは待ち伏せですか？」
　ガンドック３の発した確認に、最初に待ち伏せの可能性を提案したガンドッグ２が返事をする。
「いきなり海の下から飛び出して来るとか考えられるけど、陸地で待ち伏せというのも考えられるわね。何にせよバックアップが無いのは厄介よ。出来ることは良く周りを観察するのと突然敵が出てくることに対する心の準備くらいかしら」
　やれやれとため息混じりに説明を終えると、隊長のガンドッグ１がメンバーに指示を出した。
「ガンドッグ２の言う通り待ち伏せの可能性が非常に高い。敵が反転した瞬間には気をつけろ」
　とまず部隊に注意を促し、話を続ける。
「ただし、注意のし過ぎで速度が落ち、捕捉済みの敵を見失い、不意打ちでも受けようものなら話にならない。基本このままの速度で飛行し、補足可能距離を維持するために適宜速度を上げるぞ」
「「ラジャー」」
　良く敵を見て警戒してくる。良いチームだ。これは私の策略が見破られるかもしれないな。
　モニターに映るレーダーを見ていると、何とかレールライフルの射程圏から抜け出したソードは後少しでダミーのある海岸線に着くところであった。少し緊張感が切れたのか私語が聞こえる。
「おい、伊東。佐藤。さっきのすごかったな。ロックアラート鳴り

っぱなしで、浮遊装甲が銃弾を受ける音がガンガン鳴ってさ。実弾だったら危なかった……」
ソード1がコールネームではなく名前で呼んでいる。
伊東と呼ばれたソード2が返事をする。
「コールネームじゃなくなってるぞ斎藤。ってこっちもか。俺もロックアラート鳴りっぱで、粒子砲撃たれてたから目の前が緑でいっぱいになってたよ。装甲間に隙間を作ったらやばかった」
ソード3が会話に乗っかる。
「後退が早まって良かったね。もう少しあのままだったらやばかったよ。って、うわ！？ソード1の浮遊装甲がペイント弾の色で真っ赤になってる！　って私のもか」
「あんだけ撃たれればなぁ……」
「私達、良く撃墜判定にならなかったよねぇ」
ソード1が大きくため息をついたようだ。海岸線がもう目の前に迫って来ている。海岸線付近でもう一度敵を引きつけなければならないと思うとため息の一つでもしたくなったのだろうか。
私は彼らの気を落ち着かせるために、お喋りを聞かなかった振りをしていたが、そろそろポイントなので、気をもう一度引き締めて貰うために指示を出す。
「ビッグハットよりソード全機へ。まだ誰も落ちていないな。ポイントは目の前だ。ここでもう一度敵を引きつける。気を引き締めろよ」
了解と三人から応答が返ってきた。ここからが正念場だ。
ソード三機がポイントに到達し機体を反転させ、浮遊装甲を再度展開し敵を迎えた。
「ガンドッグ1より各機。敵が足を止め、こちらを向いている。恐らく罠だ。牽制射撃を加えながら左右に分かれて挟み込み、待ち伏せより早く敵を撃破するぞ。フォーメーション（クロー）」
ガンドッグ1の合図でまとまって飛んでいた部隊が左右に分かれた。

左にガンドッグ1と4、右に残りのガンドック2と3と5からの二方向から挟み撃ちをするようだ。
このフォーメーションは左右どちらかに注意を逸らせ浮遊装甲をずらし、ずらした隙間に弾を打ち込む戦術に用いる物だ。
この戦術は部隊の息が合えば合うほど防御を切り崩しやすくなる。ソード3機が防御で敵を引きつける予定だったのだが、非常に相性が悪い戦術だ。
しかし、次の仕掛けのために今回はギリギリまで近づいて貰わなくては意味が無い。動きの速い回避起動では潜伏中の部隊が捕捉される危険や仕掛けの先に行かれてしまう恐れがある。
そのためにもソード三機にはゆっくりと下がって貰わなければならない。
「ビッグハットよりソード全機へ。フォーメーション（タートル）、防御面に隙間を作るな」
横一列の並びから、ソード一機を前面に残りの二機を三角形になるように背中合わせで密着させ、浮遊装甲を各機の前面に展開することによって前方１８０度を防ぐ陣形だ。
距離が空いている間はミサイルと銃弾の雨をフレアと浮遊装甲で何とか防げていたが、距離が１ｋｍを切った時、ガンドッグ3が他の隊員に通信を入れた。
「先輩、ガンドック5。ナイスアシスト」
ソード2が初めてダメージ判定を伴う被弾をする。
どうやら、ガンドック5から撃たれたロングレンジライフルを防いだのは良かったが、同時に撃たれていた垂直ミサイルに気付かず対応が遅れ、フレアではなく浮遊装甲を上に向けて防いだところ、空いてしまった隙間を撃たれたようだ。
「こちらソード2、左脚部に被弾した。損傷は軽微。って、あぶねっ！？」
「ソード2！　ミサイル！　また上からの垂直ミサイルだ！　気をつけろ！」

「右からもミサイルが来るよ！　私がなんとかする！」
ソード３が装備していたフレアを射出し、ミサイルをそらしたのは良かったが、防戦一方だったせいもあり、フレアの残弾数が少ない。
しかも、激しい弾幕を防ぐのに精一杯でなかなか反撃が出来ずにいるため、ガンドッグの攻撃を止めることも出来ない状態だ。
しかし、両者の距離は１ｋｍを切った。目標の５００ｍまで後少しだ。
５００ｍまで近づけばガンドック小隊がソードの防御陣形をめくるため、更に接近して後ろに回りこもうとするはずだ。
「橘。ソードに後退のカウントダウンを頼む」
了解です。橘が距離のカウントを始める。
９００……「後少しか。ソード２ソード３何とか持たせるぞ！」
８００……「ソード２フレア残数０！　ミサイルはそっちに任せた！」
７００……「ソード３こちらもフレア残数０！　こっちのフレア全部切れたんじゃないの？！」
６００……「ビッグハットよりソード全機！　後退用意！」
５００……「ソード全機後退してください」
「「ラジャー！」」
合図とともにフラッシュグレネードを射出する。
強烈な閃光で一時的に機体のカメラ機能を麻痺させる。
その一瞬の隙をついてソード三機が全速で後退をする。
「二度も逃がすかよ！」
ガンドッグ４が更に速度を上げて真っすぐソードを追いかけようとするが、
「ガンドック４！　先走り過ぎよ！　止まりなさい。隊長どうしますか？」
ガンドッグ２がガンドック４の制止をかけながら、隊長の判断を待つ。

ガンドック2の命令に対してガンドック4は文句を言いながらも制止している。良い判断だガンドック4。
「仕方ない。罠の可能性もあるが、追いかけるしかあるまい。後方に注意しながら行くぞ」
隊長の判断が下され、ガンドック小隊は前進しながら左右に分かれていた部隊を合流させた。
ガンドック小隊が合流した後、ガンドック5が数発狙撃を放ったが、ギリギリでソード三機が回避した。
そして遂に策を仕込みに仕込んだポイントにガンドック小隊が到達する。

第四章「反撃」

第四章「反撃」

仕掛けが仕込まれている山をソード三機が抜け、ガンドック小隊が山間に突入した。

「ビッグハットよりソード。ダミーに熱を入れ、五秒後に全スモークグレネードを後方に炸裂させろ」

「「了解」」

待機しているチームの出番が迫っているのでそちらにも確認をとる。

「ビッグハットよりクロスボウ。スモークが行動開始の合図だ」

「クロスボウ1了解」

「クロスボウ2了解」

よし、準備は大丈夫そうだ。

後はガンドッグがこちらの思惑通り動けば勝てるはずだ。

ソードの遠隔操作により、ダミーが熱を持ちガンドッグのレーダーに表示される。

いち早く気付いたガンドッグ2が通信で報告を入れた。

「隊長！　八時と十六時の方向に敵熱源反応を確認！」

「3・4は機体を回転！　後ろの警戒をしながらついてこい！」

「分かりました」

「まかせとけって」

前傾姿勢で正面を向いて飛んでいたガンドッグ3と4は、胸部にあるバックブーストを片側だけ噴射し一気に機体の向きを反転させ、バックブーストに加え脚部を前に突き出しブーストを噴射することによって、速度を維持しながら前進を始めた。

うまく引っかかってくれた。

そして、予定通りスモークがソード3機によってまかれ、ガンド

ッグ小隊がスモーク内に突っ込んだ。
「レーダーロスト。ジャマースモークのようです」
ガンドック3が報告を入れる。
「隊列このまま。前方・後方からの攻撃に注意しろ」
そのまま突破することを選んだようだ。
五秒後スモークを突破したところで、ソードとクロスボウからの攻撃が始まった。
ガンドック小隊は前方のソード三機からの射撃を回避することは出来たが、上空のクロスボウ二機から降り注ぐライフル弾、ミサイル、炸裂弾に反応出来ず、後ろを向いていたガンドッグ3と4にダメージを受けた。
「こちらクロスボウ1。ソードのみなさんお待たせ！」
上からの攻撃を想定していなかったため、ガンドック小隊に動揺が広がる。
「おいおい！？　上かよ！　レーダーには映ってなかったぜ？」
ガンドック4が想定外の攻撃に驚いて叫んでいる。
「ジャマー圏内の上に、ジャマースモークまでまかれたんじゃ気付かないよ」
やられたとガンドック3も抑揚の無い声で悔しがっている。
「全機散開（ブレイク）！」
そんな中でガンドック1は爆発半径の広い炸裂弾に密集は危険と即判断し、すぐに散開号令で部隊を前方に散開させる。一瞬にして動揺をしずめて適切な回避行動をとられる。
だが、ここまでは想定通り。
現在ガンドック小隊のレーダーにはソード3機とクロスボウの2機、そしてダミーの3機が映っている。
ガンドック小隊は隊列を維持しながら前進してきたので、前を突破してその包囲から抜けるつもりのようだったが、ガンドッグ5がダミーに気付いた。
「隊長、先程後方に現れた敵影ですが、この状況で全く動いていま

せん。こちらの注意を後ろにそらせるダミーです」
よく気付いたが遅い。それにむしろ気付かれた方が好都合だ。
「よし、5は後方に下がり敵の遠距離砲撃を黙らせろ。残りで前方の敵を落とすぞ」
ガンドック1の指示通りガンドッグ5は山側に後退し、残りが前進した。
どうやらアックスを出す前に分断に成功したようだ。作戦を少し変更する。
クロスボウ1はロングレンジライフルでガンドッグ5と撃ち合い、距離を敵部隊から離していき、ソード三機とクロスボウ2が残りの敵四機の対処を始めた。
分断に成功した今ここで一気にガンドッグ5を落とすか。
「ビッグハットよりアックス全機！　予定とは違うが、目の前にいるスナイパー型を落とせ！」
「アックス1了解。撃墜スコアは俺の物」
「アックス2了解。逆に落とされないでよ？」
「アックス3了解。なんとかなるっしょー」
応答とともに射撃を開始し、前方上空のクロスボウ1と撃ち合っているガンドッグ5の背部にレールライフルが直撃する。
「ダミーは伏兵を隠すための物でもあったか……隊長、後方の伏兵三機より攻撃を受けています。援護頼めますか？　ある程度までは浮遊装甲を展開し、耐えます」
直撃は五発。
損傷判定は腕部と脚部にそれぞれ小ダメージ。
不意打ちに対して浮遊装甲五枚を非常に早く展開された結果、大したダメージは与えられなかったようだ。
ガンドック5の通信通り続く後方からの攻撃は浮遊装甲で防ぎつつ、前方からの狙撃の二発を回避機動で避けていたが。
「動きが読めたよ。いただき！」
クロスボウ1の狙撃が更に避けようとするガンドッグ5を捉えた。

撃たれたロングレンジライフルの弾丸はガンドッグ５が動いた先に置かれるように放たれていたのだ。
「む、左腕に直撃か。損傷判定は中程度。もう一発今のを貰えば破壊判定か。こちらの回避を予測して置き撃ちとは良い腕だルーキー」
こんな時にも落ち着いた声で冷静に分析している。さすがスナイパーをやっているだけはある。
「５まだやれる？　今からそちらに向かい援護するわ」
ガンドッグ２が背部への不意打ちを避けるために、ソードとクロスボウに対して　機体を前に向けたままバックブーストで後退し、ガンドッグ５の方に離れていく。
予定とは少し違ったが、これで敵五機を三つに分断することが出来た。
「ビッグハットよりランス！　ショータイムだ！」
「ランス１ラジャー。援護に向かう敵を狙撃します」
「ランス２ラジャー。敵スナイパーを落とします！」
これで落とせればかなり楽になるはずだ。
失敗した場合に備えての包囲戦術も準備してはいるが、敵よりも技量が低い部隊では、数が二倍でも不安なので確実に決めて欲しい。
さてどうなる？　息を呑んでモニターを見るとランス１が撃った弾はガンドッグ２の右腰前面に直撃した。
ガンドック２はロックオン無しのスコープ射撃により警告音が鳴らず、反応が出来なかったようだ。
損傷判定は中程度だったが、当たりどころが良く、戦闘に大きな支障が出るダメージではなかった。
しかし、足止めには十分だ。
「今のは一体どこから？　被弾状況からして上からではなく正面か下といったところかしら？　まだ敵がいるの？」
索敵が済む前に、続けざまにランス２からロングライフルが撃たれるが、ダメージは全く与えられていなかった。弾丸が機体に届く前に威力を無くして落ちていくのだ。

「ん？　直撃のはずだったんだけど。しまった粒子シールド展開してたのか」
この粒子シールドも浮遊装甲と並んでマップスが持つ防御兵装だ。ＦＴＥ粒子によって弾丸の持つ運動エネルギーや熱といったダメージを与える物を別のエネルギーに変換して防御する装備だ。
「下からね。２から全機へ十一時の方向に敵スナイパー！こちらで捕捉したのでレーダーに表示するわ」
「マジかよ？！何体敵がいるんだっての！」
分断されて３機で候補生４機を相手にしているガンドッグ４がうんざりしたように叫ぶ。
一方その頃ガンドッグ５は器用に多方面の攻撃を防いでいた。
一番ダメージの大きいスナイパー方面に常に装甲を三枚展開し、ミサイルにはフレアを射出してそらし、レールライフルやマシンガンには二枚の浮遊装甲をピンポイントで当てて防いでいる。
だが、この攻撃の雨に近接戦闘の得意な機体が参加したことによりガンドッグ５の防御にほころびが生じた。
「いただく！」
ブーストで急接近しながら、ランス２がショットガンを連射し、浮遊装甲３枚を一点に集めたところに、背部ブーストを噴射し粒子ブレードを構えて突っ込んだ。
ランス２は初撃の横切りで浮遊装甲をまとめて払い、空いたところにショットガンをつきつけ至近距離で発射しようとするが、寸でのところでガンドッグ５が右手のロングレンジライフルをショットガンに払うようにぶつけて射線を変え回避し、左手に粒子ダガーを取り、突きの反撃を繰り出すが、ランス２がバックブーストで突きを回避し、ショットガンを発射する。
ガンドッグ５はバックブーストが噴かれた瞬間にナイフを右腰にマウントしてそのまま左腕を盾にして、本体のダメージを減らす。
同時に右手のライフルを肩に取り付け、空いた手でマウントされたダガーを投擲する。

ランス２は投擲されたダガーをショットガンにぶつけ直撃を防いだ。
「ちっ、ショットガンが１本お釈迦になったか！　それでも！」
そのままショットガンに弾かれたダガーを掴み、そのまま投げ返した。
突然の反撃だったが、ガンドック５はダガーの投げ返しに反応し、払われなかった浮遊装甲を一枚ランス２に向け展開した。
しかし、そこから生じた隙をアックス３機によって左右から狙われ、ライフルとミサイルを連続で撃ち込まれてしまう。
左腕大破、脚部中破、右腕中破、コア損傷軽微、搭載されたＡＩから損害報告とアラート音が出ている。
ギリギリのところでロングレンジライフルと右腕を盾にしコアである胴体を守ったため撃破判定はまだ出ていなかった。
「次で落とすぞ！　頼むぞクロスボウ１」
ランス２は上からガンドック５の後ろに回り込み、クロスボウ１の狙撃に向けられていた浮遊装甲を右に弾き、追撃をせずにそのまま右にそれた。ガンドック５がカウンターの蹴りを入れようとしたがそのまま空を切った。
「ナイスアシスト！　ランス２！」
クロスボウ１の声とともに発射された弾丸はガンドッグ５の背部に直撃し、更にランス２によるだめ押しの粒子ブレードの突きがコアに入った。オペレーターの橘から撃墜報告が入る。
「敵機撃墜。次の目標に移ってください」
これでまずは一機。攻撃力の高い厄介な敵が減り、遠距離が大分楽になった。
「こちらガンドック５、すまん。やられた。侮っていると痛い目をみる」
ガンドッグ小隊に衝撃が走る。気付いたら敵が二倍の数になり、包囲されたあげく、味方機の撃墜により、戦力的にも精神的にも受けたダメージは大きい。

「了解。後は任せておけ。2はこっちの援護に戻れ！　片側の敵を早く片づけなければまずい！」
「やれやれ。後ろに5を戻したのは失策だったかしら」
「今更です先輩。それよりも後ろから撃たれるのが、1機だけで逆に良かったかも知れませんよ。全機一片にスクラップは勘弁です」
「仇はとってやるよ！　まずは目の前のやつらをぶっ潰す！」
ガンドッグ5はうまく機体の損傷無しで撃破出来たが、前線の方は数が一機多いと言え戦況は互角で、候補生達の機体に損傷が出ていた。
「ビッグハットよりアームズ全機！　損傷のある機体は集中攻撃で落とされる可能性がある。損傷の少ないアックスとランスは速やかに援護に向かえ！」
「「了解」」
後ろに向けられる全ブーストを噴射し、全速で援護に向かう。
「橘、彼らが援護に入れるまでどれくらいだ？」
「後、三十秒ほどです」
ガンドッグ2が十秒ほどで合流すると、中近距離の数は一対一になる。
タイマンで勝てる見込みは少ない上に数が減らされたら勝率はかなり落ちてしまう。そうなってしまえば、ここまでの作戦が全て水泡に帰す。
「ビッグハットよりソードおよびクロスボウ。アックスとランスが援護に入るまで約三十秒。援護が来るまで回避・防御主体で良い。絶対に落とされるな」
「「了解」」
海上や海岸の時とは違い、遠距離からの狙撃を含めて候補生達の数が増えて攻撃が激しくなったので、ガンドッグ小隊の攻撃頻度が落ちるかと思ったが、頻度が落ちた分、三機の攻撃が集中し、回避と防御に失敗した瞬間に撃墜判定もしくは損傷大判定が下されそうな勢いで攻撃されている。

そしてガンドッグ2が合流して更に攻撃は激しさを増した。
アタッカー3機によるレールライフルとマシンガンで激しい弾幕をはりながら、ガンドッグ1による高速攪乱機動で上下左右前後と空間を最大に活かしてショットガンとアサルトライフルを候補生の機体に集中して撃ち込んでいく。
この連携攻撃に対して候補生側も、狙われた機体に一機援護が入り浮遊装甲を展開し、避け漏らした攻撃を防いでいる。
そして残りの二機で違う方向から、撃墜を狙うと共に注意をそらして攻撃を一時的に緩めようと射撃をいれる。
大ダメージを狙えるスナイパー二機の狙撃は、レーダーから弾道の予測がつけられていたため、射線に対し機体の大部分が隠れるように浮遊装甲のマウント場所を変えて防がれていた。
スナイパー二人がそれぞれ驚きと共に打開策を相談する。
「どんなけシールドの扱い上手いのよ！　さっきから何発も当ててるのに全部シールドじゃないの！」
クロスボウ1にランス1が返事を返す。
「さすが正規パイロットですね。恐らくレーダーで僕達の場所を見て、そこから弾道を割り出してるのでは？」
「だったらどうすれば良いのかしら？」
「さっきの撃墜と同じで、隙を作ってもらって確実につくってのは？」
「今の状況を見ると難しそうね。近接攻撃しようと近づいたら蜂の巣にされて厳しいわよ。ってちょっと待って！　さっき弾道予測で防いでるって言ったわね？」
クロスボウ1がどうやら何か思いついたらしい。
「そうだけど。それがどうかした？」
「ちょっと試したいことがあるの。今からロックオン無しのスコープ射撃は止めて全てロックオン有りで射撃するわよ。こちらのロック状況を送るからリンクして、同時に時計回りでロングレンジライフルを連射しなさい！」

なるほど。悪くない戦術だ。試す価値は十分にある。ここは静観しておこう。
クロスボウ１は上空からガンドッグ小隊の裏に回り込んでから、ガンドッグ４をロックオンし、ロック情報をランス１とリンクさせた。
「射撃開始！」
ロックオンアラートが鳴り、狙撃を事前に察知したガンドッグ４はほくそ笑んだ。
「馬鹿め！　回り込んでの同時攻撃とはいえ、弾道予測が出来ている相手にロックオンとは当てる気があるのか？　まっ、ノーロックでも当たらんがな！」
自信満々の言葉通りマウントされた浮遊装甲で初撃は防ぎ、続く射線を変えながら撃たれる射撃には浮遊装甲を展開し、装甲を動かしながら弾を防いだ。
ランス１がクロスボウ１の戦術に気付いたようだ。
「なるほどね。でもこれ多分確実に決まるのは一回切りだよ？」
「一機確実に減らせるだけでも十分よ」
自信満々にクロスボウ１が答えた。
「それもそうか。タイミングは援護が到着した瞬間だね」
クロスボウ１がアックス三機とランス２に通信を入れる。
それも何故か色気たっぷりの声で。
「敵を一機減らす賭けにつきあって」

第五章「包囲」

第五章「包囲」

援護が到着した頃、ソードとクロスボウ2は機体の損傷が中程度でまだ保っていた。機体の性能もあるだろうが、訓練の結果でここまで出きるようになっているはのは間違いない。素人や練度が不足している者が正規パイロット相手にここまで持ちこたえられる訳がないのだ。

そして、到着と同時にクロスボウ1より戦術が告げられた。

「クロスボウ1より全機！　私のロックオン情報を送るからリンクして。今から私とランス1が狙撃で敵の浮遊装甲を時計回りに動かすよ。空いた隙間に全弾丸を撃ち込んで！」

全機のＦＣＳにロックオン情報を送信し、準備が整ったのを通信で確認する。

「よし、全機私に続けー！」

アームズ全機がクロスボウ1の戦術に参加する。

まずはスナイパー二機が時計回りに狙撃を始めた。

ガンドッグ4は浮遊装甲を展開し、射線に応じて装甲を時計回りに動かす。

「だから何度やっても無駄だっての！」

何回か同じ動きをして慣れさせたせいもあり、ガンドッグ4は完全に戦線に参加した四機のことを忘れていた。

右後ろと左前に隙間が生まれたのをクロスボウ1は見逃さなかった。

「撃ち方始め！」

敵機に狙われていた一機と援護に入っていた一機をのぞいた全八機からの集中砲火が始まる。

「ちっ！　しまっ……」

ガンドッグ４が撃墜を覚悟したところに新たな装甲が周りに展開
され攻撃を防いだ。
「４油断しすぎ。レーダーをしっかり見て」
ガンドッグ３が自らの浮遊装甲をガンドッグ２に飛ばしていたの
だ。
装甲のやりとりが出来る浮遊装甲の長所を活かしている。
「助かったぜ。今のはちぃっとひやっとした」
だが、浮遊装甲を味方に飛ばすということは自分の盾が無くなる
ことと同じだ。それをクロスボウ１は見逃さなかった。
「浮遊装甲を飛ばした！？　ランス１、丸裸のやつを落とすよ！」
ロックオン機能をオフにし、スコープ射撃でガンドッグ３に連続
で弾丸を放つ。
初撃は右肩に、続く射撃で胴体に連続で入った。コア損傷による
撃墜判定だ。
橘からの撃墜判定が報告される。
「油断したのはボクだったか。みなさん後は頼みます」
やはり抑揚のない平坦な声音で報告をする。
二機を撃墜したことによって勝利に近づいているが、ここで油断
してはならない。
私の方も敵の動きを見落とさないように注意深くモニターを見つ
める。
「やるなルーキー。だが、ここまでだ！　フォーメーション（ファ
ング）！」
ガンドッグ１がソード１を見据えて、ブーストの出力を上げ一気
に肉薄し、右腕の粒子ブレードを上から振り下ろした。ソード１は
その攻撃に左手の粒子ブレードで何とか受け止める。
一瞬のつばぜり合いの間にソード１がカウンターとして、右腕の
ショットガンで狙いをつけるが、ガンドッグ１はショットガンの構
えを見た瞬間に射撃が来ることを察知し、下に回り込んで回し蹴り
をソード１の背中に入れる。

バランスを崩したソード1は体勢を立て直すため上空に離れて距離をとろうとするが、予測されていたかのようにガンドッグ2と4が背面にいた。
「さすが隊長。最高の攻撃ポイントです」
マシンガンが二機から斉射される。
「ちっ、させるか！」
二機からの攻撃に対しギリギリで浮遊装甲を展開し、数発の被弾で済ますことは出来た。
しかし、正面からの攻撃はまだ続いていたので、ソード1はブレードを構え直し、接近して来るガンドッグ1を迎える。
ソード1が初撃の袈裟切りをまたブレードで受け止めると、ガンドッグ1が左手にダガーを持ち、突きを繰り出した。
ソード1は繰り出された突きを防ぐため、背面からの射撃に被弾覚悟で浮遊装甲を前面に移動させたが、突きはフェイントで、つばぜり合いをしているブレードを下げる変わりにダガーでソード1のブレードを抑える。
「なっ！？　突きじゃない？」
そしてその一瞬に、下げたブレードで下からの切り上げをソード1の左腕に直撃させた。
「おいおいおい！　なんだそれ？！」
完全な直撃を受け、左腕の破壊判定が出されたため、ソード1の粒子ブレードの刃が消えてしまった。
「おいおい、まじかよ？！」
空いた左側からブレードの突きによる連撃が繰り出されたが、機体を右にひねり、まだ破壊判定の出ていなかった左肩に当てる。
「ほぉ、今のを防ぐか」
ガンドッグ1は少し嬉しそうにつぶやき、既にショットガンに持ち替えられていた左腕武器のトリガーを押した。放たれた散弾が浮遊装甲にあたるが、この一連の攻撃でソード1は後ろの警戒がおろそかになってしまった。

「ソード1！　後ろだ！」
誰かからの通信が入ったころにはガンドッグ2と4が格闘距離に入りダガーで突きを放っていた。
「2、4、よくやった」
「隊長！　次もたのんますよ！」
コアにダガーの直撃判定が下り、だめ押しの零距離射撃まで加えられたソード1に撃墜判定が出る。
「すまん。やられた」
「大丈夫だ。後は任せろ」
初めての撃墜に動揺するかと思ったが、ソード2の応答をはじめ、皆落ち着いていた。
これは私も負けてはいられないな。落ち着いてレーダーを見るとあることに気がついた。ソード1、どうやら君の粘りは無駄ではなかったようだ。
ソード1の奮戦により敵の配置がアームズの丁度真ん中に位置していたのだ。
ここが決め所と判断し全機に通信を入れる。
「ビックハットよりアームズ全機。敵は一カ所に固まっている。このまま包囲して一機に攻撃を集中させろ。こちらでガイドを出す」
「「了解」」
アームズの応答を確認して、橘にガンドッグ1にマークを入れてもらった。
全機のレーダーにターゲットとしてガンドック1に重要ターゲットのマークが映し出される。
更に近接攻撃をしかけるファイターの映像を小窓でスナイパー二機表示させた。
クロスボウ2とアックス三機による援護射撃の中、残ったファイターのソード2と3、そしてランス2が牽制射撃を入れながら接近し、スナイパー二機はガンドッグ2と4の注意を引きつけるための射撃を始め、少しずつガンドッグ1を他の機体から引きなした。

数秒後、接近戦が推奨される距離にまで近づきそれぞれが粒子ブレードを展開する。
「三機相手か。さて……」
ガンドック1が急加速で近づいてきた候補生たちによる、左右と後ろからのブレード攻撃を浮遊装甲それぞれ一枚で受け止め、払うようにブレードを横に一回転しながら反撃する。
候補生達は脚部のブーストの出力を上げて上昇し切り払いを回避すると、再度三機同時にブレードで切りかかるが、振り下ろした腕に浮遊装甲がぶつけられ体勢が崩される。
よくもそこまで上手く装甲のコントロールが出来るものだ。
「まずは一機」
ガンドッグ1のブレードによる突きがソード2に向けて放たれる。
「まずった！」
腕が後ろに反り返っていたためコアである胴体ががら空きだった。
そこを確実に狙われている。
しかし、アームズのスナイパー二機に前衛のモニターを表示させておいたのが功を奏した。
「ソード2！　貸し一よ！　今度ごはんおごってね？」
ガンドッグ1が浮遊装甲を相手の体勢を崩すのに使っていたため、防御力がダウンしていた事に気づき、モニターから危険を察知して、とっさにガンドック1の右腕を狙って狙撃したのだ。見事に右腕に直撃し破壊判定が下された。
「ほぉ、やってくれる」
ガンドック1の感想通り、本当によくやったと言わざるを得ない。判断力、射撃能力が高くなければ出来ない芸当だ。
ガンドッグ1はブレードが使えない状況で接近戦は出来ないと判断したのかバックブーストで距離を離しながら、浮遊装甲を引き戻そうとする。
「ここで逃すわけにいかないわよ！」
前衛三機が再度突撃をかける。

一方ガンドッグ2と4はアタッカー4機によって足止めをされていた。
「隊長！　ちっ、こいつらうっとうしいぞ！　2どうにかしろ！」
「こっちがどうにかして欲しいくらいよ。さすがに一対四は厄介」
「おい、俺を数から外すな！　仕方ねぇ。被弾覚悟で近接攻撃をしかけて突破するしかないか！」
「本当に仕方ないわね。あなたの頭の悪い作戦につきあいましょう」
「だから、誰の頭が悪いってんだよ！？　いくぞ！」
ガンドッグ1がいる方角には現在アックス2とアックス3が応戦していて、この二人が少しでもガンドック2とガンドック4を抑えられれば、反対側から残りのアックス1とクロスボウ2で挟むことが出来る。そうなれば、また体勢を立て直すために距離をとるはずなので、とりあえずは静観だ。
一方ガンドッグ1の方は左腕一本で上手く対処しているが、いくら正規パイロットとは言え片腕だけで三機を相手にするのは大変難しいようで徐々に押され始めていた。
「スナイパー！　浮遊装甲はこちらでぶっ飛ばす！　空いたところを撃ち抜け！」
ガンドッグ5を撃墜した戦術をランス2が提案する。
「「了解」」
展開されている浮遊装甲は六枚。それを敵の方面に合わせて展開しながら、一人人一枚プラスαで各方面からの攻撃をしのがれていた。
この状況で浮遊装甲の無力化は大きなチャンスになる。良い判断だ。
「さすがに、厳しいな」
ガンドッグ1は味方の援護がレーダーを見る限り、足止めされていて期待出来ないと分かっていたのだろうが通信を入れて確認をとる。
「2、4。少し状況が悪い。援護に来られるか？」

「今何とかします！　待ってて下さい」
「了解」
ガンドッグ1はロックアラートが鳴り響くコックピットの中で一度深呼吸をして敵の攻撃に再度集中したようだ。
次で決まるか？　と私にも緊張が走る。
三方向からの斬撃を浮遊装甲で防いだが、これは候補生達の予定通り。
そのまま防いでいる装甲を横に弾き飛ばし、残っている三枚の装甲にそれぞれがもう一度攻撃をしかける。
「ちっ、まずいな」
ガンドッグ1は浮遊装甲のコントロールを捨てて高度を一気に落とした。
装甲をはじかれた時に狙撃が来る事を予測し、ガンドッグ5の二の舞は回避する事ができたようだ。
「さすがに警戒されてますね。でも、丸裸な状態でいつまで逃げ切れますか？」
ガンドック1は一発二発と何発もの狙撃をかわしながら、ゆっくりと落下している浮遊装甲の近くに飛び、コントロールを復活させるつもりでいるようだが、コントロール距離に近づくと激しい射撃にさらされ、体勢を立て直せないでいた。
「しぶとい。しぶと過ぎるわ。どんな腕してるのよ……」
呆れるようにソード3が呟いている。
「ほんとよね。足さえ止まれば当てられるんだけど。なんなのあれ？　動き過ぎよ」
先ほどから何発もの攻撃をブーストの出力を調整しながら自由自在に上下左右に動き回り、攻撃を避けられているクロスボウ1も困惑していた。
既にお互いの姿を見せ合っている状態の戦闘に関して、指揮官がしてやれることは少ない。
有利な状況は作れるが、そこから先は個人とチームの能力が決め

手となる。元パイロットとしては非常にもどかしい。
彼らはこの状況を打開する能力があるだろうか。
「ちょいと賭けをやるか。さっきの借りを返すぞ。そんでもって、おごりは無しだ。」
ソード2が何やら思いついたようだ。
「何するつもりよ？」
「敵の浮遊装甲をハックしてぶつけるからその隙を狙い撃て」
ランス2がその提案に疑問を呈する。
「おい、その機体でハッキング出来たか？」
ランス2が言った通り、今回機体に電子戦用の装備はついていない。
一体何を考えているのか私にも予想がつかない。
「だから分の悪い賭けなんだよ。ってことで頼むわ」
「何だがわかんないけど、その賭け乗ったわ」
ソード3はガンドッグ1が浮遊装甲近くに行けるようわざと射撃を外した。
ガンドック1が浮遊装甲のコントロール距離間近になった時、少し離れた場所からソード2が急接近し、浮遊装甲を左手で掴み装甲に沿うようにブレードを持った右手を添え、更にブーストの出力を上げた。
「浮遊装甲は返すぜ！　ただし、ブレードのオマケ付きだ！」
「それハッキングじゃねぇ！」
ランス2が大声でつっこみを入れた。
面白いことを考える奴だよ。私にはまったく思いつかなかった戦法だ。
コントロール距離に入ったせいか、吸い寄せられるような形でガンドッグ1にソード2が突撃する。
「面白い！」
ソード2の突撃に対し、ダガーによるカウンターを入れるため、ガンドッグ1が一瞬止まった。

「あら残念。ご飯楽しみだったんだけど、これでチャラかしらね？」
一瞬の隙をクロスボウ1がつき、狙撃がガンドッグ1の背部に直撃した。
更に残りの二機も急加速でブレードによる攻撃を狙ってつっこんできていた。
ダメージを受け、敵の策にはまったことを理解したガンドック1が舌打ちをする。
「本命はそちらだったか。なるほど、良いチームワークだ。だが、タダで落とされてはやらん」
右肩をソード2の突きに自ら当てに行き、左手に持っていたダガーを落として左足で蹴り上げた。蹴飛ばされたダガーがソード2の右足に命中する。
同時に三機の粒子ブレードがコアに届き狙撃とブレードのダメージによるコア損傷の撃墜判定が下された。
「やれやれ最後のを脚部を使ってコアを防ぐとは。思った以上に反射神経が良いじゃないか」
大きなため息を一つつき、味方に連絡を入れる。
「こちらガンドッグ1。すまんな。落とされた」
近距離戦闘に持ち込んでも、なかなか突破出来ないでいた最中に、隊長機から落とされた報告を入れられて二人は衝撃を受けた。
「すみません。こちらが手間取ったばかりに」
「隊長落とされたってマジっすか？！」
「マジだから困る。2も今は気にするな敵に集中しろ」
ガンドッグ1を失って現在の戦力差は二対九。
圧倒的に候補生達が有利な状況になった。だが、ここで油断してはならない。
少しの気のゆるみが実戦では死につながる。
「ビックハットからアームズ全機。残敵は二機だが、決して油断するな。こちらからターゲットマーカーを出す。集中して撃破しろ」
橘にターゲットマーカーをガンドッグ2につけるよう指示し、全

機に送って貰う。
「みなさんにターゲットマーカーを転送しました。確認してください」
全機の攻撃がガンドッグ2に集中し、接近戦をしかけられているアックス二機から引き離して囲んで攻撃をする。
「私に攻撃を集中させるか。まずいわね……何か手は」
ガンドック2が粒子シールドを全方面に最大出力で展開し射撃を防ぎながら手を考える。
射撃を防げてはいるが、足を止めてしまっているので、チャンスと思ったソード2がブレードを構えて突撃する。
「やっぱ、突っ込んで来るか」
ガンドック2がダガーを右手に構えて袈裟切りを受け止める。
粒子シールドは銃撃戦には強いが格闘武器にそこまで強くないのだ。
あくまで、粒子によって運動エネルギーの置換をしているだけなので、力が加えられ続けたり、粒子が放出され続けるような攻撃は防ぎきれない。
その短所をよく理解してのダガーによる防御だ。
ただ、一機は防げたものの続く二機目は防ぐ手段が無い。
それを見越してソード3が切りかかる。
「トドメは任せてよ」
しかし、ブレードが当たる直前にソード3がガンドッグ4に体当たりをもらい押し戻された。
「よう、無事か？」
「おかげさまで何とか」
ガンドック2は返答をしながら、つばぜり合いをしているソード2に蹴りを入れ吹き飛ばし銃撃で距離をとらせた。
ガンドッグ小隊の二機が背中合わせで候補生と向き合う。
「そう思うなら今度から俺の扱いを良くしてくれよ？」
「あなたがここにいる敵全機を落としたら考えてあげるわ」

「お前それ微塵も改善させるつもり無いだろう……」
両者ともに鼻でふっと笑い合い操縦桿を握りなおした。
「私が半分以上落とすからね。残念ながらあなたは私以下よ」
「ハッ！　言ってくれるぜ。俺に負けて悔しがるが良いさ！」
言うと同時に二人が散開する。
友というよりライバルなのだろう。そういう仲の良さも張り合いがあって楽しそうだ。
緊張感や絶望感を紛らわせる良いコミュニケーションになる。
どうやら隊長機が落とされた精神ダメージからは回復しているようだ。だが、ここで分散するとは失策以外の何でもない。
候補生が再度包囲と近接攻撃をしかける。
「今度こそ落とすよ！」
最接近したソード3が射撃を回避しながら、最初にガンドック2に横切りをしかける。
ガンドック2はバックブーストでそれを回避し、後ろから近付いてきたソード2に振り向きながら左手のレールライフルをぶつけ、上から強襲するランス2の斬撃をダガーで防いだ。
「っ！　ライフルは鈍器かよ！？」
ソード2が面食らいながらも体勢を立て直し、避けられたソード3と共に再度切りかかるために接近する。
ガンドッグ2はこれに対し、高度を一気に下げることで相打ちを狙うが、三機とも反撃に備えながら接近していたので、反応して射撃による追撃を入れることが出来た。
三機からのショットガンとアサルトライフルによる銃撃が連続で近距離から当たり、コア損傷による撃墜判定が下された。
「やれやれ、私もまだまだでしたか。ガンドック4良いとこ見せてくださいよ？」
「あー……何だ？　わりとマジに言うが、これ詰んでないか？」
戦力差を考えれば普通勝てる見込みが無い状況だ。
援軍が期待出来ない中での一対九で勝てたら教科書に載せられる。

「主人公なら主人公補正で何とかなるよ？」
ガンドッグ２が悪戯っぽく笑いながら言うと。
「俺この戦いが終わったら告白するんだ。花束も用意してあるんだよ」
「それ、死亡フラグよ」
ため息をつきながらガンドッグ２がつっこみをいれた。
「頑張ってくださいよ。ひっくり返したらほめてあげます」
ガンドック２はそれだけ伝えると通信を切って、もう一つ溜め息をついて観戦モードに入る。
「みなさん敵は残り一機です。油断せず攻撃してください」
橘の通信が入り、残ったガンドッグ４を九機で包囲し、一斉射撃を続ける。
ガンドッグ４は九機が相手とは思えないほど、攻撃を防いでいたが、次第に被弾が増えていった。
そして、何百発目かの撃ち込まれた弾丸を防ぎきれなかったところで、機体に搭載されているＡＩが警告を発する。
「げ、サブブースター被弾で出力ダウンだって！？　勘弁しろっての！」
機体の動きが鈍り、更に攻撃が畳みかけられた。
「あー、くそっ！やられた！」
レールライフルによる反撃で、アームズの機体にダメージは与えられたが。撃破には至らずガンドッグ４に撃墜判定が下された。
これで、戦闘は終了だ。
「橘。アームズ、ガンドッグ全機に訓練終了の連絡を入れてくれ」
「了解。訓練参加の全機へ。訓練終了です。繰り返します。訓練終了です。基地に帰還してください」
撃墜判定が下され待機していた機体も含めて全機が返答を返した。
「「了解」」

第六章「警備打ち合せ」

第六章「警備打ち合せ」

基地に全機が帰還し、評定を下すためにブリーフィングルームに集合してもらった。

「皆揃ったようだな。訓練ご苦労だった。双方ともに良く動いていたが、今回の結果に満足せず、次はより高みを目指せ」

「「イエッサー！」」

さて、まずはガンドッグの方から総括しよう。

「さて、気付いているとは思うが今回は色々とハンデをつけてもらった。どのようなハンデだったかガンドッグ1分かるか？」

ガンドッグ1が期待通りの答えを返す。

「はっ！　まず一つに数です。次にジャミングによるレーダー障害とバックアップが無かったこと。最後に恐らくですが、作戦指揮がとられていたことです」

「よく三つ目が分かったな」

これは戦闘中に相手の動きを見ていなければ分からない要素のはずだ。しっかり見抜けていたかと感心する。

「指揮官がいない状態で、戦闘に参加している人数が多くなればなるほど統率は乱れやすくなります。しかし、統率がとれた動きでこちらを追い詰めてきたので、恐らく指揮官がいると考えました」

「なるほど。部隊長として良く観察しているな。だが、ハンデはもう一つあるぞ」

そう通常の作戦行動ではまず起こりえないハンデがある。

「何でしょうか？」

「君達の作戦も通信も全て候補生側に漏れていたのだ。指揮官にとって部隊を下げるタイミングと攻めるタイミングが見極めやすい状態になっていた」

ガンドッグ一同がなるほど。と頷いた。
ガンドッグ1が続けて疑問の解消を進めようとする。
「では今回の作戦指揮をとったのはどなたでしょうか？」
知ったら文句の一つでも言われそうだな。と心の中で苦笑いをしながら答える。
「今回の指揮官は私だ」
「大佐？！　ってそれ筒抜けどころの話じゃないっすよ！　こっちの作戦出したの大佐ですよ！？」
ガンドッグ4が驚きのあまり大声でつっこみを入れるがガンドッグ1が制止する。
「落ち着け。しかし、大佐が指揮官なら納得です。となると前半の陽動も大佐の作戦ですか？」
通信を聞いていたので、彼等が陽動に気づいていたことを知っているし、警戒していたことも知っている。
もし、正しい対応をとられていたら候補生が負けていただろう。
「その通りだ。君達の分断と不意打ちは私が提案した作戦だ。陽動だとは君達も気付いていたようだがな」
「なるほど。見事な采配でした。正しい対処が選べなかった我々もまだまだ未熟ですね」
ちらっとガンドッグ4を見ると拗ねたような顔をしていて、他のメンバーも少し悔しそうな顔をしていた。少しフォローを入れておいてやろう。さすがにハンデ有りとは言えルーキーに破られたのはショックだろう。
「単騎の能力なら君達の方が上なんだがな。複数相手は苦戦しただろう？」
「そうですね。なかなかの腕でした。将来が楽しみです。」
ガンドッグ1から評価されたというとはボーナスも出して良さそうだ。
「では、訓練の録画データを各員の端末に送信しておく。レポートを今日中にまとめてこちらに送るように」

「「了解」」
次に候補生の総括だ。
「候補生諸君良くやってくれた。先程の話にもあったが、君達は圧倒的に有利な状況で戦った。今回の結果で浮かれず、対等もしくは劣勢な状況でも勝てるように、いっそう訓練に励んで欲しい」
「「イエッサー！」」
そして次にブリーフィング時に言ったボーナスについて伝えなければならない。
「さて、ジャマー施設防衛ボーナスに関してだが」
わざと言葉を切ると皆そわそわし出した。やっぱ気になるんだな。
候補生がこちらに熱い視線を送ってきている。
「君たちの今回の戦績を加味し、正規パイロットの内定を出そう」
候補生達は一瞬ポカンとし、数秒後に状況を理解したのかガッツポーズをとったり抱き合ったりし出した。
「あー、諸君静かに。続きがある」
とりあえず、彼等を落ち着かせる。
そして、ざわめきが収まりじっとこちらを見つめている。
「ただしだ。正式配属までに訓練をおこたり成績を下げた瞬間に内定を取り下げる。分かったか！」
「「イエッサー」」
結局のところ正規課程は全て受けて貰うが、実技審査はこれで実質パスだ。
残り一ヶ月も候補生として訓練に頑張って貰う。
しかし、内定が決まっているからといって、これから手を抜いて腕を落とすような奴なら、そんなのは戦場に出せない。
「では候補生諸君も今回の訓練について、レポートを今日中に提出したまえ。田口軍曹後は任せたぞ。では解散！」
全員が敬礼をし、ブリーフィングルームから退出していった。
これで午前の主な仕事が片付いた。
時計を見ると１１時近くになっていたので、一度リフレッシュル

ームに行って少し休憩をとろうと考えたが、第三世代マップスの申請書が送られてくることを思い出し、携帯端末からメールをチェックした。
なんと既にオヤジさんから送信されていた。ただありがたいことに、既にある程度申請書が埋められている状態だった。
「そこまで量が無さそうだし今のうちにやっておくか」
後々書類の山に埋もれるのは変わらないだろうが、山は小さい方が楽なのでやれるうちにやっておきたいとは思う。
ただそれでも……。
周囲を見渡し周りに誰もいないことを確認して溜め息をついたら、つい口に出してしまった。
「やはり面倒くさい……」
携帯端末をしまい佐官用の個室に戻り申請書の空欄を埋めていく。
最初は面倒だと思っていたが、記載されていた第三世代のスペックが思った以上にハイスペックで実物を見るのが楽しみになり、やる気が多少湧いてきた。
第二世代になった時も驚いた物だが、今度のはまたすごかった。
パイロットとして乗れないのが少し残念だ。
ちなみに海外の同盟国マップスメーカーは第二世代型の基礎フレームを菱田重工から輸入し、それぞれの国に合わせたカスタマイズを行っている。
独自にフレームを作ろうとする動きもあるようだが、菱田重工のフレームに劣っていたり既存パーツとの互換性の問題やコストの問題で実用化されてない。
一方で、輸出が禁じられている敵対国でも近年マップスが生産されているが、設計はろ獲した機体からのデッドコピーで、基本的に第二世代型と同じようなフレーム構造となっている。
将来どうなるかは分からないが、現在はそのような状況なので、基礎フレームの開発が出来るのは菱田重工だけなのだ。
その菱田重工の最新機を模擬戦による性能試験とデータ収集のた

めだけとは言え、どこよりも早く使えるのはここだけなのだ。
楽しみにならない訳がない。
２０分程で一次申請の書類を完成させ本部に送信する。
更に開発者である菱田重工技術顧問の松平にもメールを送信しておく。
第三世代フレームの視察日時についてと詳細を開発者から聞きたかったのだ。
メールを送信して時計を確認する。
「昼休憩まで後３０分か。時間まで、午後の会議資料を見直しておくか」
机の隅に置いてある国境資源会議の警備資料を手にとりめくっていく。
場所は首都ミヤトの国際会議場。
時間は１０００から１５００までの予定。
会場と都市圏は警察が担当し、郊外３０ｋｍ地点を軍が警備。
軍で警備にあたるのは首都から一番近い位置にあるオーカシス陸軍基地の部隊。
国境近くの基地はレトリア連邦警戒のために部隊を展開しながら待機。
南方の空軍と海軍は緊急出動が出来るように待機しつつ、数部隊それぞれから派遣するように通達が来ていた。
ある程度派遣する部隊数は決まっているが、今日の会議で最終決定する予定となっている。
そして次に書かれている一文が、わざわざ警察だけでなく軍まで警備に回している原因なのだろう。
「テロリストによる破壊工作の可能性あり」
毎度毎度のことなのだが、ＦＴＥ技術の普及とともに様々な既得権益を破壊してきた。
その過程で、レトリア連邦の資源所有権主張もその一つになるのだが、主に化石燃料を輸出していた旧資源輸出国で、反ヤポネ団体

や反ＦＴＥ団体が生まれ、紛争やテロ行為が幾度か行われてきた。
おかげでこういった国際会議の場で気が抜けたためしがない。
そのままページをめくっていき続きを見ていたら、突然携帯端末の着信音がなった。
番号と名前を見ると菱田重工の松平からだった。
警備資料を机の上に置き電話に出る。
「もっさん久しぶり！」
やたら元気の良い声だ。
自分より年上の３３才で、菱田重工マップス部門技術顧問でマップスの機体から武器まで様々な分野で開発をしている変態技術者だ。
「元気そうだな松平。どうした突然？」
確かにメールは出したが電話で来るとは何かあったかと思ったが。
「もっさんが新しい子の紹介してって言うから電話の方が早いかなって」
そういうことか。メールの方が見返せてありがたいのだが、また送って貰うことにしよう。
ちなみに彼は自分が開発に関わったマップスの事を人扱いしている。
「そうか。ならいくつか聞くが、カタログスペックを見たところ大分第二世代型から大きく変化しているな。互換性はあるのか？」
「一応あるけど、ほとんど意味が無いよ。彼女の全力が見たいなら彼女用にカスタマイズされた第三世代用のパーツと服じゃないと。ライフルとかのアクセサリーに関しては互換性が余裕であるけどね」
さらに言うと女の子扱いで各種装甲は衣装。武装や各種パーツはアクセサリー扱いで、これが変態扱いされる原因だ。
「後この予定されている各種追加装備の超高速強襲装備ってなんだ？」
「それはすごいよー。新しい子専用の新衣装！　最速のおてんば娘って感じ！」
説明をしたくてたまらないと言っているような声だ。少し長くな

ることを覚悟する。
「どういうことだ？」
かいつまんで説明すると背部に大型の追加ブースターユニットを取り付けて超高速で移動できるものらしい。
しかも、オプションで武器コンテナ・ミサイルポット・ロケットランチャー・爆撃コンテナ等が追加出来るようになっており、超高速で接近し最大火力で敵施設を制圧する運用が出来るとのことだ。
また攻撃性能だけでなく、高速移動中の防御性能も向上させており、補助アームを使用してのシールド操作により高速移動中でも浮遊装甲の操作が可能となっている。
正直相手にしたくない。
「で、こいつに弱点はあるのか？」
「近距離戦は苦手だね。さすがに機動性まで確保は難しかったよ。脱げば良いんだけど、ちゃんと回収しないと大変でしょ？だから基本的に脱げないんじゃないかな」
生産コストを考えると確かに簡単にパージ出来るものではない。
それに敵に新装備をろ獲されるとまずい。
なるほど、確かに近距離が弱点だ。
「これ戦闘中に付け外しを自由に出来ないか？」
「やっぱそれ聞くよね。只今研究中の課題で、まっ、そのうち出来るようになるよ。ちなみに簡易版の追加ブースターだけならアクセサリーとして第二世代型でも使えるから良かったら使ってね」
仕事が増えるが戦闘において足の速さは最重要の要素だ。
採用する価値は十分にある。
そして何かを思い出したように松平があっと声をあげた。
「後そうだ。ずっと前にもっさんの所で試験してもらったダガーとブレードのオプションパーツのことなんだけど、無事申請が通ったみたいで発注が来たよ。初回生産分は北の国境行きだけど、来月末の会議前には余裕で君達の所にも行くはずだよ」
「ほぉ、あれはうちの連中からも評判が良かったからな。楽しみに

待っていよう」
良くダガーやブレードは投げたり弾かれたりして手から離れるので、回収用のワイヤーを付ける試験をしたのだ。
武器ではないので簡単に申請が通ったから良かった。
「あれはなかなか良いアクセサリーだよね。ポイ捨てなんてはしたないことを、うちの子にはしてほしくないからね。まっ、今はそれよりもっと凄いもの作ってるけど。ってことで試験用のを一緒に送るからまた頼むよ」
これでまた仕事が一つ追加。思わず頭をかいてしまった。
この話で性能試験をしたライフルをふと思い出したので、ついでに聞くことにした。
「それは楽しみだが、あのライフルといって良いのかも分からんあれはどうなった？」
「ふふふ、勿論データを貰ってから更にすごくなって完成してるよ。そろそろ採用の通知が来るかな？　今度おまけで正式版を一緒に搬入させるよ」
自信満々の声でライフルの出来を保証している。あの化け物ライフルが正式採用されるのか。送ってもらえるのは確かに助かるが、一体どう使えば良いんだ？　あのロマン武器……。
その後も新装備や新機体の情報をもらい長いこと話しをしてしまった。
そろそろ食事に行ってくると松平が話を終えようとした時に気になることを言い残した。
「そういえば技術者仲間から聞いたことなんだけど、どっかで最近大型のＦＴＥ兵器が出来たとかなんとか。まぁ、うちの子たちが負けるとは思わないけどね。んじゃまた」
「あぁ、またな。メール頼む」
時計を見ると１２時半を過ぎていた。
こちらも昼食を取りに食堂に向かおう。
多分、賭けの結果が公開されて賑わっているのも終わる頃だろう。

と思ったが、食堂につくとまだ混雑していた。
モニターの前では賭けの配当金が配られていたが、そろそろ行き渡ったためかその周辺に人は少なかった。
食堂の所々から賭けについての議論が聞こえる。
レーダーが死んでいる状態での待ち伏せの対処などを議論しあっているようで、今回もこの賭が良い教材になったようだ。
カウンターまで行くと食堂のおばちゃんに声をかけられた。
「お、もっちゃん来たねー。今日の話題は全部あんたがかっさらってるよ。で、今日は何にする？」
おばちゃんに階級は関係無いのだ。
特別扱いされないのは基地内では珍しいので悪くない。
何にしようかとメニューを見ていたら、金曜日のカレーフェアをやっていた。
「そうだな。カレー辛口とミネストローネのセットを頂こう」
「はいよー。ちょっと待っててね」
盆にカレーとスープそしてサラダが置かれ手渡された。
香辛料の香りが鼻腔をくすぐり、スープの鮮やかさも食欲をそそる。
サラダにドレッシングをかけて空いている席を探すと、田口軍曹の隣がたまたま空いていたので隣を失礼することにした。
「田口軍曹、隣は空いているかな？」
声をかけると田口軍曹が体ごとすごい勢いでこちらに振り向いてきた。
「大佐殿？！　もちろん空いております」
お盆を置き席につく。
「しかし、佐官がこのような所でお食事とは。自室の方が快適ではないのですか？」
「こういう賑やかな場所は昔を思い出して好きなのだよ。いただきます」
手を合わせてから食事を始める。

「大佐殿がそうおっしゃるなら、ただ佐官としてやはりここにいるのは少しふさわしく無い気がしますよ」
相変わらず真面目な男だ。
それにしても今日の食事も美味い。
甘さ酸味塩味が良いバランスで成り立っており、そこに溶け込んだ具材の味がより深みを持たしている。
そして鼻に抜ける香辛料の香りと舌への刺激が次の一口を勧める。
一緒についてきたミネストローネも野菜の甘みがよく溶け込んでおり、辛口のカレーと実に相性が良い。
うん、今日も食事が美味い。
食事は士気を維持する上で最重視される一つの要素だ。
不味い食事はそれだけで士気が削がれる。美味い食事はそれだけで心が踊る。栄養価の方も不足しがちな野菜類を細かく砕き料理に混ぜ込んであるので、身体にも良い。
おばちゃんの旦那であるシェフの腕には感謝してもしたりないくらいだ。
舌鼓をうっていると田口軍曹から模擬戦について話題を振られた。
「今日の模擬戦さすがでした。おかげで儲かりましたよ」
ハンデありとは言え、正規組に勝てたのは私の力ではなく、軍曹の訓練のおかげである。指導の礼を伝えねばなるまい。
「いや、私は何もしていないよ。君が候補生達を鍛え上げてくれたおかげだ。ありがとう」
軍曹は椅子から立ち上がり深々と頭を下げた。
「光栄です。残り一ヶ月で更なる力をつけられるよう鍛え上げてみせます」
食事時くらい気楽にしていて欲しいと苦笑して、座るように促して話を続ける。
「他の基地に配属になるやつも多いだろうが、残って貰いたい候補が何人かいるな」
候補生から無事正規パイロットになれば各基地に異動する。

その中で何人かはこのまま残るのだが、ある程度こちらの希望が通るらしい。
ガンドックの3から5のメンバーはそれでこの基地に残せた。
「今日の訓練だとクロスボウ1の武田ですか？」
さすが指導しているだけあってよく分かっている。
「正解だ。あの狙撃の腕はなかなか良い。それにソード2の伊東。ブレードの戦術は面白かった」
今日の模擬戦の戦いっぷりを思い出しながら伝える。
「確かに。ですが、今日の模擬戦に参加していない者も良い腕を持っています。決定にはいささか早計かと。」
それもそうかと思い、他の候補生の話を詳しく聞きながら昼食を食べた。
話を聞いていると、どうやら候補生５０人の特性を全て把握しているらしい。
本当に教官が向いている男である。これは現役パイロットを引退させて教官職につかせるべきなのではないかと真剣に悩んでしまう。
今度の候補生が卒業するころにでも意向を聞いてみよう。
食事を済ませて個室に戻り、会議の最終準備に入る。

資料をまとめてファイルに詰め、ノートパソコンとお茶の入ったペットボトルを会議室に持って行く。
書記の係りが、モニターを起動し、こちらのカメラも起動させる。
時間の2時になると一斉に参加者の顔が映った。
警察・陸軍・海軍・空軍のトップに警備に参加する基地のトップが揃い踏みだ。
特例で大佐に昇進した身にとってはここにいるのが何度やっても場違いであるように感じる。
丸顔に無数のしわが刻まれた顔の人が警察庁長官で、今回の打合せの議長を務めている。彼の低く重い威厳のある声により打ち合わせが始まる。

「諸君全員揃ったようだね。では今から国境資源会議の警備打ち合わせを始める」
手元のモニターに首都の地図が表示された。
碁盤目上に区画が整理されている都市でその中央付近に国際会議場がある。
「事前に配付した資料通りの編成で警備にあたる。国際会議場付近は我々警察の特殊機甲部隊が警備にあたる。警察仕様にカスタマイズされたマップスを東西南北５００ｍに２機ずつ、会議場正面に３機、背面に３機、左右側面に３機ずつ。計２０機を配置する。また場内にもテロ対策部隊を５０名配置する。これで会議場付近は万全でしょう。また市内には検問所や私服警官を配置し、不振人物を発見し次第確認していく。市内の方はこのような形で依存無いかな？」
警察庁長官が確認を要請する。
とりあえず、今まで通りの布陣で文句のつけようがない。
他の参加者も頷いている。
「では次に郊外の警備について頼む」
オーカシス陸軍基地の徳川大佐が説明のバトンを受け取った。
白髪混じりのグレーヘアでほりが深いダンディーな方だ。年齢は確か５０前後だったはず。
「郊外警備は首都から東西南北に四つの拠点を用意する。それぞれの拠点にマップスを２０機ずつ。計８０機を配備する予定だ。これで首都に接近する車両や航空機の監視を行う」
モニターに映る地図の倍率が下がり、より広い範囲が映し出され、拠点に赤いマークが打ってある。
これも前回と基本的に同じ配置となっている。
「基本防衛網はこのようになっている。今回もこれに加えて遊撃部隊としてキーナ空軍基地の部隊、そしてカシゴマ海軍基地の部隊を１０機ずつ応援に出して貰いたい」
マップス１０機で確定か。
南側から攻められても何とかなる数字だと思う。

「了解した。ところで応援で派遣される部隊の配置はどうなっている？」
事前の資料には無かったので確認をとる。下手すれば戦場になるのだ。
自分の部下がどういう扱いを受けるのかを知らなくてはならない。
徳川大佐がこちらの質問に答える。
「空軍と海軍には首都の上空を旋回してもらう予定だ。我々が敵を見逃したときのために準備してもらいたい。旋回範囲を地図に出す」
手元の地図が拡大されて赤い枠が現れる。
「これが君達の警備範囲だ。高度についても続けて説明しよう」
都市の形が立体的になり、視点が上から見下ろす俯瞰図から、横から見た図に変わった。
「空軍には都市上空５ｋｍの警備を、海軍には都市上空２ｋｍの警備を頼みたい」
なるほど、首都の地上は警察、郊外は陸軍の大部隊、低空は海軍、雲の上からは空軍か。これなら敵の侵入はどこかでキャッチ出来るだろう。それにこの高度なら見通しが効くので、奇襲は受け難いはずだ。
派遣しても一瞬で全滅は無いだろう。
「了解した。では要求通りこちらからマップス１０機編成の一個中隊を派遣する」
続けて海軍の方も派遣を決定する。
「感謝する。空軍の方に追加注文があるのだがよろしいかな？」
大体予想がついた。おそらく広域レーダーを積んだ偵察機のＡＷＡＣＳを出せと言うことだろう。
「ＡＷＡＣＳを追加で派遣してもらいたい。地上にも防空レーダーを設置する予定だが、念には念を入れておきたいのだよ」
やはりか。ただ、至極真っ当な提案だ。乗らないわけにはいかない。
「分かりました。ではＡＷＡＣＳも同時に派遣します」

これが終わったら偵察部隊にも通達しておかないとな。
ノートパソコンにメモを今のをメモしていく。
「助かるよ。他に何か聞きたいことや提案は無いかな？」
応援が取り付けられたことに安堵して、少し顔が緩んだ徳川大佐が上機嫌で質問を促した。
海軍の毛利大佐が組んでいた手を解いて、右手を軽く挙げる。
眉間に深いシワがいくつも刻まれた眼光鋭い人だ。まるで老狐のようである。
「派遣した部隊の指揮は誰がとるのかな？」
大事な自分の部下たちだ。出来れば自ら指揮を取りたいのだろうか。と思案していると、徳川大佐がにっと笑顔になった。
「安心して貰いたい。警察、陸海空軍はそれぞれ独立で指揮してもらう。その代わり指揮官の間は通信をつなげて連携する」
毛利大佐がふむ。と頷きながら腕を組み直してその意図を確かめる。
「指揮系統を一つにまとめた方が楽ではないか？」
徳川大佐は笑顔を崩さぬまま答える。
「確かにそうかもしれないが、いかんせん私はこの広く展開している部隊の指揮で手一杯でな。それに所属は君達の部隊だ。直属の上官が指揮した方が動かしやすいだろ？」
「ふむ、了解した」
どうやら毛利大佐は回答に納得したようだ。
というか、これってへまをしたら責任を負わせるための口実じゃないよな？
陸上は陸軍が大部隊を展開するので、数の暴力で多分抑えられる。
海軍の警備は低空なのだが低空侵入は陸軍の防空網に確実にひっかかる。
つまり上空からの侵入があれば丸々空軍の、そして私の責任となる。
そうなれば色々と喜びそうな連中がいるのだが。いや、ただの考

え過ぎか。
それにそれを防ぐためにＡＷＡＣＳの派遣を要求されている。
恐らくこの件に関しては味方も敵もいない。
邪推を捨てて、一口お茶を飲んでから、今のやりとりで生まれた疑問を聞いてみる。
「今の話に関連して、質問よろしいですか？」
徳川大佐がこちらに手のひらを向けた。
「どうぞ」
「指揮官の所在はどこになるのでしょうか？」
派遣した中隊の指揮をとるために私も首都に向かう必要があるのかどうかを確認したかったのだ。
「所属基地から指揮をとってもらう。この説明は陸軍大将からして頂きたい」
陸軍大将が咳払いをして声を出す。
「理由は簡単だ。毎回のごとくレトリアが軍を展開する可能性がある。その中で北の防衛だけに気を捕らわれていると、南や東西からの侵攻を防げない。そのため、諸君の基地でも地域の警戒に当たって貰うため、基地からの指揮をしてもらう」
なるほど。これは最悪二方面指揮をする必要があるのか。
願わくは何も起きないことだ。
「了解しました。では、最悪の事態として首都と所属地域の二方面指揮を想定して用意すれば、よろしいでしょうか？」
陸軍大将が大きく頷いた。
「うむ、それで良い。国外からの侵攻があれば軍本部から指令が下る。いつでも動けるように用意しておきたまえ」
海軍大将と空軍大将も同調して頷く。やはりトップとの会議は緊張する。
なんだこの緊張感は？
私は一昨年まで中尉だった人間で、この場に参加している者から見ればひよっこも同然だ。

モニター越しのはずなのに、不思議な圧力を感じてしまう。
質問で話しかける時にこちらの緊張や焦りを表面に出さないだけで精一杯だ。
不思議な喉の渇きを感じてもう一度ペットボトルに口をつけ、お茶を飲む。
徳川大佐は話が終わったと判断し、次の質問を促すが、誰からも質問は出なかった。
「よろしいようだね」
議長の警察庁長官が話を区切る。
「では、次に当日の両首脳の動きについてだが、このようになっている」
首相は公用車で首相官邸から国際会議場へ。レトリア大統領は空港から公用車で国際会議場に向かうルートが矢印となって地図上に表示される。
基本的に大通りを通る最短ルートだ。
「両首相の護衛は我々警察のみで行う。公用車と併走しながらパトカーを走らせる予定だ。また移動する時間帯はこの移動ルート近くの道路を全て封鎖することになっている」
日曜日だから良いものの、平日でやったら一般市民は大混乱だろうな。
会社への遅刻が普段の何倍になるのだろう？
きっと地下鉄乗車率と一緒にレコード記録になる。
ちょっとその光景を想像して顔に出さないように苦笑いをしていたら、海軍大将が何故マップスを配置しないのかと問いただした。
「政治的に色々あるのだよ。大統領に銃をつきつけながら連行している。けしからん！　と見る輩もいるそうでね。政治家は火種を下手に増やしたくないそうだよ。外交的には悪くない判断とは思わないかね？」
過激派の刺激は出来るだけしたくないってことか？
確かに今の大統領は会議に参加して話し合いで解決しようとする

穏健派と言えば穏健派の人間だ。
過激派にとって、そんな穏健派の人間を銃で脅している国は蛮族国家である。即刻打倒すべし。と捉えられてしまうかもしれない。
だが、彼がいなくなれば過激派が押さえられなくなる。
それを考慮すると、過激派に襲われる可能性がある人なのだから、軍隊のマップスによる護衛が必要だと思ったのだが、政治的な言いがかりを考えると納得がいった。
そうか、それで警察の護衛で、パトカーなのか。これなら過激派も言いがかりが出来ず、襲われても最低限の対処が出来るという作戦だろう。我が国の首相の方にもマップスが配置されないのは、威嚇だと過激派にとらわれないようにするためだろうか。
海軍大将もすんなり納得したようだ。
「なるほど。最低限で最大限の護衛……ということですか。そちらも苦労しますな」
どうやら私の考察はあっていたようだ。
「お互いさまですよ。万が一の際は是非お力をお借りしたい」
私以外の参加者が皆笑い合っている。
今まで全員が同じような経験をして、あるあるネタが通じたのを楽しんでいるようだ。
「お偉い様方はいつも無茶をおっしゃる」
「なに、それでもやりとげるのが我々の仕事だ。それを誇りに思おうじゃないか」
私にはとても笑える状況じゃないと思うのだが、愛想笑いでこの雰囲気を乗り切ることにしよう。
これが年期と経験の差というやつなのだろうか。
「話がそれてしまったな。本題に戻すとしよう」
警察庁長官が咳払いをして、脱線した流れを元に戻した。
皆の切り替えもとても早く、あっという間にぴりっとした空気に戻った。
「移動に関しては先ほどの通りだ。そして考えられる最も狙われや

すいタイミングとして、会議後の記者会見が考えられる。わざわざ国際会議場の広場にステージを作って、大勢の記者の前で話すのでな。入場整理をかけているとは言え、どうしても紛れ込まれやすい。これに対しては私服警官の大量動員と壇上のＳＰに任せるしかあるまい」

郊外に展開される陸軍にはどうすることも出来ないし、上空を旋回している海軍にも空軍にも、群衆の中からテロリストを捕捉することは難しい。

確かに人間による奇襲であれば記者会見のタイミングがベストであろう。

まったくひどい無茶をしてくれるものである。

「これに関して軍の方からは何も出来ませぬな」

眼鏡をかけた少しやせ気味な初老の空軍大将が確認をとる。

「残念ながらそうですね」

特に何もすることが出来ないので、警察庁長官が次の議題に進める。

「そして次に帰路の護衛だ」

モニターの地図を見ると行きと同じように矢印が描かれている。

両首脳の帰りの経路は行きと同じルートのようだ。

「基本的に行きと同じルートを通ってお帰りいただくことになっている。警備方法も行きと同じで、パトカーによる護衛だ」

となると帰りも緊急時以外では、軍の方で何か特別な事はないか。

「今までのは、平和にことが進んだ場合のルートになる」

失礼と。断りを入れて、警察庁長官はコップに入った水を飲み、喉に潤いを与えて再度説明を始めた。

「襲撃があった場合の避難経路についてだが、地図で説明しよう」

地図の上に８つのポイントに赤い点がうたれた。

「基本的に、襲撃犯とは反対方向の待避ポイントに裏道を使いながら避難してもらうつもりだ」

特にこのポイントには頑丈な施設やシェルターといったものは無

かったと記憶しているので質問をした。
「この待避ポイントはどういう施設でしょうか？」
警察庁長官が不思議そうな顔をしていたが、秘書の耳打ちにより納得したようだ。
「そうか、君は今回首都の警備は初めてだったね。これは緊急事態専用の地下通路だ。他の主要都市に直行するリニア車両が用意されている」
噂には聞いていたが、こんなところにあったのか。
ということはそのリニアを使って安全なところまで避難すると言うことだな。
念のために確認をとる。
「では、その待避ポイントに到着次第、両首脳はリニアで安全な都市に待避するという認識で正しいでしょうか？」
警察庁長官がその通りだと頷いた。
なるほど。普通の都市地下間にも地下高速鉄道があるのだが、まさか首相専用の緊急経路まであるとは恐れ入った。
「質問はもうよろしいかな？　話を戻すぞ。両首脳が乗っている公用車はもちろんＦＴＥ粒子制御による防弾仕様だが、さすがに大火力の攻撃を受ければ簡単に破壊される。公用車の位置はＧＰＳで常に把握しいる。軍の方にも位置情報を常に提供するので、我々と協力して、一機たりとも敵を近づけさせないで欲しい」
なるほど、その時は海軍と空軍の遊軍が援護に入る訳か。徳川大佐が話に続く。
「都市圏で襲撃を受けた場合、陸軍からの援護はどうしても遅れてしまう。君達海軍と空軍が頼みの綱となる。よろしく頼むよ」
私の想定通りか。毛利大佐も分かりきっている様子で腕を組みながら頷いている。寝ているようには見えないので本当に分かっているのだろう。
会議の両首脳の移動について、一通りの説明が終わったので、質問は無いかと聞きながら、警察庁長官が参加者に確認をとる。

すると海軍大将が緊急事態における大事な質問を聞いた。
「市街戦が起きた場合、市民の避難は警察でやってもらえるのか？」
国際会議場はオフィス街にある。日曜日と言えども人は多少いるし、避難経路の中には商業区など人が集まる場所もある。
確かに戦闘が始まったら巻き込まれる人が出てもおかしくない。
警察庁長官が非常に重いため息をする。どうやらあまり良い話は聞けそうに無い。
「いつものことながら、避難誘導は潜伏させている私服警官に取り仕切ってもらう予定だ。だが、全ての地区で避難誘導が完了するまで、少なくとも１０分はかかるだろう。避難が完了していない区域では出来るだけ攻撃を自重して欲しい」
空軍大将が困った様子で頭をかいている。
「やはり、そうなるか。１０分攻撃をせずに注意を引き付けているだけ。というのは毎回言っているが、なかなか骨が折れるぞ？　最低限の自衛は認めて欲しいものだが」
恐らく、敵部隊の攻撃が建物に当たったり、こちらの攻撃が市民を巻き込むリスクを考えての判断だろう。
何か手はないかと思案していると、ちょっとした思いつきが生まれた。
お茶を勢いよく飲み気合いを入れる。
「一つ提案があるのですが、よろしいですか？」
参加者が一斉に反応し、「ほぅ」とか「む？」と漏らしながらこちらに注目する。うっ、緊張する。
「まず、確認になりますが。避難が完了していない区域での戦闘は、流れ弾が市民に当たる危険性があるので自重するのですよね？」
警察庁長官が頷く。
よし、一つ目のハードルはクリア。
「そうなると、敵の射線上に建物を入れさせないように、更に建物に隠れられない。そして、こちらの射線上にも建物が当たらない位置からの攻撃というのはいかがでしょうか？」

警察庁長官が頭をかきながら私の提案の真意を問いだした。
「そんな都合の良い場所があるのかね？　基本的に碁盤目上で見通しの良いところがあるとはいえ、建物の陰には簡単に隠れられるぞ」
その通りだ。街中や低空ではそんな都合のいい場所は無い。
空軍所属でマップスによる戦闘を多く経験した者だから見える位置がある。
「あります。その都合のいい場所。敵の真上です。高高度からのマップスによる狙撃ならピンポイントで敵のみにダメージを与えられます。戦闘機と違い上空での空中待機が可能なので、安定した狙撃が可能となっています」
警察庁長官は顎に手をあてながら考える素振りをしながら続けて聞いてきた。
「なるほど。敵が旧兵器の車両タイプならそれで何とかなるだろう。ではマップスだったらどうする？　空中戦に持ち込まれたら、やはり流れ弾が市外に落ちるぞ？」
そこがこの提案の最大の問題だ。だが、それでも地上で注意をひきつけるだけより遙かにマシだ。
「その通りです。なので、空中戦に持ち込まれたら、こちらは常に敵の上空に位置するよう動き、こちらからの射撃は止めて近接格闘戦をしかけます。これなら都市部に流れ弾が当たりにくくなります」
警察庁長官はなるほどと頷いた。
どうやら2つめのハードルもクリア。
「それなら確かに注意を引きつけるだけよりは良さそうだ」
警察庁長官は納得したようだが、同じく空の上に配備される海軍の毛利大佐から質問が来た。
「なるほど。坂本大佐。お若いながらも良い戦術を思いつく。しかし、そうなると我々海軍の低空部隊はどうすれば良い？」
多少気の引ける提案だが、これには乗ってもらわなければならない。
「海軍には敵部隊の注意をひきつけて、上空に上がられないように

して頂きたい。それも基本的に防御のみで、です。敵は建物を盾にすることが迷い無く出来るので、低空と地上で海軍と警察の部隊が展開していれば、わざわざ弾が当たりやすくなるような空の上に上がることは無いはずです」

毛利大佐は大笑いしてから、こちらを睨み付けてきた。

「君には冗談のセンスもあるようだ。この私の部隊におとりになれと？」

言葉に怒気が含まれているように聞こえる。部下をおとりにさせてくれと言っているのだ。やっぱりそうなるよな。しかし、ここで引き下がるわけにはいかない。

「毛利大佐。申し訳ありませんがこれは冗談ではありません。確実に敵を撃破するための戦略です。毛利大佐が擁する精鋭の海軍部隊が敵をひきつけて、敵を地面にはりつけられれば、狙撃による敵部隊の撃破が容易となるのです。貴官の部隊が機能すれば、私達空軍側もより力を発揮出来るのです」

相手のプライドをくすぐりながら交渉を推し進める。

「だが、それでも基本防御のみというのは厳しい」

やはり簡単に崩れてはくれないか。警察庁長官から待ったをかけられそうだが、譲歩案を出してみる。

「ならば、敵に当たらなくても道路に当たるように射撃、真上から接近しての格闘攻撃といった都市の被害が少ない戦法を徹底していただけないでしょうか？」

右まゆげをぴくっと動かし、こちらをにらみ続けてくる。

くっ、胃が痛くなってくるな。

「なるほど、牽制まではさせてもらえると？」

先ほどと変わらない怒気の含まれた低い声だ。

「その通りです。貴官の部隊ならば、その牽制で敵部隊を撃破することも可能だと思います」

毛利大佐が軽く吹き出し、大笑いをし始めた。

あれ？　さっきまで凄い迫力だったはずだ。何が彼を笑わせたの

だろうか？
　不思議そうな顔をしていた私に毛利大佐が真面目な顔をして向き直った。
「いやー、すまんすまん。君との問答があまりにも愉快でな。その歳でなかなか弁が立つでは無いか。戦術の方もなかなかのものだ。派遣された数々の実戦で訓練されたのかな？　そして何よりもその度胸！　なるほど、特例とはいえ、その歳で大佐に任命されただけはあるな」
　なっ、こっちが試されていたってことか。この老狐なかなかやってくれる。
　思わずポカンとしてしまったが、これで警察庁長官から許可が出れば、この方法でいけるはずだ。
「いかがでしょうか？　長官殿」
　腕を組んでうなり始めた。どうなる？
　沈黙が場を包んだ。実際には、ほんの５秒程度だったのだろうが、その数倍に感じられた。自分の部下の生死が左右されるのだ。出来るだけ危険が少ない方が良いに決まっている。
　短くて長い沈黙が破られる。
「分かった。それで行こう。ただし、必ず建物には当ててはならない。それと出来るだけ弾を外して流れ弾を作らないでくれ。こちらも部下を死なせる訳にはいかない」
　良かった。提案が通った。たまっていた唾を飲み込む。
　徳川大佐が追加の提案をする。
「おそらく避難が終わる頃合いに陸軍が到着するだろう。それまで持たせてくれれば、こちらで必ず鎮圧する。あまり無理をしなくては良いからな」
　その通りだ。住民の避難が完了するまでの１０分。この間の目標は住民が安全な場所に退避するまでの時間稼ぎで、私がした提案は時間稼ぎの方法だ。敵を完全に撃破するための方法では無い
「ありがとうございます」

これで、参加するメンバーが集中砲火を浴び続けて反撃も出来ずに撃墜されることはなくなるだろう。
陸軍大将が今の問答をまとめてもう一つの確認をとる。
「ということは、基本的にどのタイミングでの襲撃も、この方法で避難と時間稼ぎを行うということでよろしいかな？」
全会一致で合意する。
これで警備の大体の方針が最終決定されたようだ。
やれやれ、終わったら手洗いに行こう。
警察庁長官が話をまとめて、終了の挨拶を始めた。
「これにて国境資源会議警備打合せを終了する。参加して頂いた皆様。ごくろうさまでした」
席を立って皆で一斉に礼をして打合せが終わった。
書記官がモニターと通信を切り、並んでいたそうそうたるメンバーの顔がモニターから消えた。
気が抜けたせいで、部屋にまだ書記官がいるのに思わず大きなため息をついてしまった。
「はぁ～……疲れた……」
書記官がこちらのため息に気づき、苦笑いを返してくる。
「おつかれさまです大佐。さすがに緊張しましたか？」
「当たり前だ。あのメンバーで緊張しない同世代はいないと思うが」
書記官は何故かほっとしたような笑顔になった。
「何か変なことを言ったか？」
「いえ、大佐も人間だと思って安心したのです。その歳で佐官なので、一時期、一部の間でＡＩを積んだ精巧なアンドロイドなのではないかと噂が流れていましたから。ちなみに以前ここにいた大佐もこういった会議は緊張して、始まる前と終わった後には大体トイレにいましたよ。では今回の議事録をまとめてくるので失礼します」
書記官はこちらに敬礼をして部屋を出て行った。
いや、確かにめいっぱい背伸びをしながら仕事をしているのだが、アンドロイド扱いとは……。

もうちょっと素を出した方が良いのか？
椅子の背もたれに全体重を預けてノビをして身体をほぐす。
腕時計を見ると１５時を回っていた。
「後は書類仕事と派遣部隊についてか」
だが、その前に……
「予想以上に疲れたか……」
そのまま部屋に戻ること無く軽く居眠りをしてしまった。
目が覚めて時計を見ると既に１６時だ。
この会議室に人が入ることはあまり無いのだが、今日は誰も来なくて本当に良かった。居眠り姿を見られたらどうなっていたことか。
ちょっとしたサボり行為に反省する。
次からはしっかり部屋でしよう。
あれ？　それも違うか……
そんな仕方の無いことを考えて、少しボーッとした頭で手洗いに寄ってから執務室に戻った。

第七章「それぞれの絆」

第七章「それぞれの絆」

　執務室に戻った後は、とにかく書類と格闘するつもりでいたが、端末を立ち上げると、先ほど打合せに参加していた眼鏡の空軍大将から極秘回線で連絡するように。とメールが入っていた。
　背筋が凍るような寒気に襲われ、眠気が吹き飛んだ。
「うっ、さっきの居眠り中に来てたか」
　気が進まないが、連絡するしかない。
　部屋に設置してある通信機を極秘回線専用モードに設定する。
　機械音の案内が流れ、指示された通りに行動する。
　指紋確認……ＯＫ。網膜チェック……ＯＫ。声帯認証……ＯＫ。
「キーナ空軍基地、坂本龍大佐と認識。どちらにお繋げしましょう？」
「空軍総司令部、宮野茂（ミヤノシゲル）空軍大将につないでくれ」
　３０秒間の呼び出し音後、空軍大将が通信に出た。
「遅かったじゃないか坂本。喋り方はいつもの気楽なやつで良いぞ。で、遅くなった理由だが君のことだ。また居眠りでもしていたのではないか？」
　バレていた。何を隠そう、この人がマップス特殊部隊を編成した男で、私の直属の上官だった人だ。パイロット時代の時もサボリを色々と見抜かれていた。
「相変わらず、エスパーのような方ですね。私に監視カメラでもつけているのですか？　……正解です」
　滅茶苦茶笑われた。
「おい、どうしてくれる？　笑い過ぎて腹が痛いぞ。ハハハハ」
　どうやってこれを止めようか……。
「そこまで面白いこと言いましたか？」

「そりゃぁ、まぁな。さっきの会議のクソ真面目な態度を見て、立派に成長したと思ったら、大して中身は変わってないようだな。疲れたら即居眠りしていた癖もそのままか。書類の山の中でよく眠ってないか？　さっきの会議ガチガチに緊張してちびらなかったか？」
「少なくとも今まで漏らしたことは無いですよ！　それに書類の中で居眠りもここ数年してないです。宮野大将こそ、会議の時だけは真面目なんですね」
　精一杯の皮肉を返す。そう、この人は会議とか公式の場では真面目振るのだが、根本的に破天荒な人なのだ。
　ほとんど新兵しか乗っていない実験兵器のマップスを戦場に出したり、私を大佐に推薦したのも彼だ。
「おう、我が輩はいつでも真面目だぜ？　お前もあのメンツの中で緊張しないくらいに早く成長して欲しいもんだ。ひよっこ大佐君」
　それも見抜いていたのか、段々頭が痛くなってきた。早く本題に入ってもらわなければからかい続けられそうだ。
「で、今回は私をからかうためにわざわざ極秘回線を使えと指示したんですか？」
「久しぶりの二人きりの通信なのにつれないねぇ……まぁ良い。本題に入るか」
　最後で宮野大将の声音が変わった。どうやら本気モードのようだ。
「坂本。お前今回の警備体制についてどう思う？」
　先程の会議で決定したばかりなのにどうしたと言うのだろう？
「どう思うと言われても、両首脳を狙うテロリストに対しては有効な布陣かと」
「そうだ。恐らく両首脳を狙った攻撃にはこれで良い。ただ、目的が他の物にあったらどうなる？」
　どういうことだ？　彼には一体何が見えている？　ただ、すぐには思いつかなかったので諦めて聞くことにした。
「どういうことでしょうか？」
「いや、例えばだ。我が輩がテロリストではなく、レトリアの軍人

や過激派の政治家だったら会議のタイミングに首都を襲う際、首脳を襲うのは陽動にすると思ったのさ」
首脳襲撃が陽動？　そう仮定すると、何か別の目的があることになってしまう。
「となると、別に本命があると言うことですよね？　でも一体何が？」
「多分我が輩よりも君の方が詳しい物だよ」
私が宮野大将よりも詳しい物……
「なるほど。菱田重工のマップス関連ですね。それも噂の第三世代がですか？」
「そうだ。敵はヤポネの同盟国が持つ第二世代型マップス強奪作戦を実施してでもマップスを手に入れた。となると、さらに発展した第三世代型はどうやって手に入れる？」
あの時は確か、秘匿されていた各種パーツを生産する工場と、パーツを集めて機体を完成させる組み立て工場、そして更に基地に至るまでの全ルートが漏れていて、組み立てが完了した機体の搬出中に強奪された。と聞いている。
「なるほど。首都に警察や軍の注意を最大まで引き付けられるイベントが首脳襲撃。ということですね。で、その間に首都にある菱田重工の本社と工業地区にある工場で、第三世代型のろ獲、もしくはデータの収集を行うと？」
「そんなところだ。勘の良さはさすがだな。我が輩が鍛えただけはある」
素晴らしい自画自賛っぷりだが、ある意味誘導尋問的にこの答えを導き出したので、否定はせずに皮肉だけ返しておこう。
「その最後の一言は本来私が言うべきことなのでは？」
「なに、君の心境を代弁したまでだ。で、勘の良い君はここでどうするのだ？」
あっさりかわされた。しかもカウンターのおまけつきで。
恐らくこの口振りだと既に答えは持っているのだろう。

こちらが試されている。
「そうですね……まずは菱田重工の方に警戒するよう連絡を入れる。そして、ＰＭＣを雇ってもらうよう進言する。次に元特殊部隊にいた松平に、いつでもマップスで出撃出来るように武装とメンテナンスをするように伝える。といったところですかね？」
基本的な模範解答だろう。ＰＭＣも使えばある程度の時間稼ぎは出来るはず。
「まぁ６０点の及第点だな。普通に考えればその案なのだが、その案だと襲撃があった時は大きな被害を受ける。日曜とはいえ出勤者がいるはずだ。最悪の場合、貴重な技術者から死者が出かねん。戦闘が起きてもＰＭＣ含めて民間人から一切の犠牲者が出ない方法を考えろ」
襲撃の際に機体やデータが強奪されず、技術者を始めとする民間人も現場にいなくてよく、敵を撃退する方法か。
頭をフル回転させて、策を考える。すぐ答えが出せず沈黙が１０秒ほど間続いてから、宮野大将が口を開いた。
「確認するぞ？　敵の目的は機体とデータの強奪。ついでに技術者を拉致する可能性もあるな？　ということはだ。建物を破壊することはまずしない。泥棒が金銀財宝の入った木製の宝箱を、持っている爆弾使ってあける事はないだろ？　空っぽだと分かれば、八つ当たりでぶっ壊す気にもなるかもしれんがな」
宮野大将が軽く笑っている。どうやら自分の例えがうまく言えたことに対して御満悦のようだ。
ただ、おかげで私も何が言いたいか分かった。
「なるほど。会議前に中身を引っ越せ。ってことですか」
「ほほぉ？　それで？」
すごく楽しそうに相槌をうってきた。
まったくこの人は本当に良い性格をしている。
「試験用の第三世代型は、来月の資源会議前までにこちらの基地に一機送られてきます。そのタイミングで第三世代型に関する部品と

データをキーナ空軍基地に全て移動させて、首都の方は空にさせます。これなら出勤する人間もいないでしょう」
昔読んだ本にこんな作戦があったな。確か名前は空城の計。それは確か、敵が攻めてきているのに、あえて部隊を展開しないまま城門をあけて、何事も無かったかのように振る舞い、罠があると思わせる計略だ。今回はその名の通り中身が空っぽになっているのだが。
「良いねぇ。素晴らしい案だ。ただ、宝箱も吹っ飛ばされちゃ困るんだよねぇ？」
言いたいことは分かる。設備だって貴重な物だ。破壊されて良いことなど一つもない。もちろん対処方法は考えてある。
「宮野さん。ミミックってご存知ですか？」
言いたいことはきっと伝わっているのだろう。
相づちを打つ声音は相変わらず楽しそうだ。
「真似する。とか擬態。とかその辺の言葉だな。で、それがどうした？」
分かっている癖になぁ……。それがどうしたの？　声が踊っているじゃないか。顔が見られたら確実にニヤニヤしてるぞ。
「昔やったゲームの話ですが、宝箱があって喜んで開けようとすると、実はかなり強いモンスターで、下手をするとゲームオーバーになるようなトラップがあるんですよ。今回はそれを真似します」
「ほぉ？　それをどのように真似る？」
さて、ここからは割と無茶な要求だ。心してかかろう。
一つ深呼吸をして気持ちを落ち着ける。
「菱田重工の地上倉庫に、第二世代型マップスに第三世代型の装甲を貼り付けたのと、完全に装甲だけのハリボテを設置します。それも敵から見えやすいように。敵がマップスや車両で襲撃をしかけるなら、偽装マップスで対処出来ます。そして、本社の方は、データ採集のために歩兵が投入されることが想定されるので、施設内に社員の格好をした陸軍部隊に待機してもらい、歩兵を迎撃するのはいかがでしょう？」

拍手の音が聞こえる。どうやら正解のようだ。
「フフ、これはヒント無しでいけたか。まっ、これが何だかんだで普通に警備するより、被害が少なくて済む方法だろ？　で、誰が菱田重工と陸軍に今の話を頼むんだ？」
ハハッ、やっぱりそれが一番の問題ですよね？
ただ、ここまでこちらを誘導してきたということならば。
「もちろん、宮野さんですよ？」
通信越しなので、相手には伝わらないだろうが満面の笑みで伝える。
「良い笑顔だねぇ。まっ、愛弟子がここまで頑張ったんだ。ご褒美で菱田重工への通達と陸軍への応援要請は我が輩の方からやっておこう」
って通信越しだから分からないはずなんだが、どうして分かったんだ？
ま……まぁ良いか。それにしても連絡を空軍大将である宮野さんが担当してくれて良かった。組織がでかいだけあって、トップの声が物事を早く進める上で大事なのだ。私がやったら時間がかかりすぎる。
「助かります。というか本当にこっちの様子は見えていませんよね？」
通信越しで吹き出した音が聞こえた。どうやらまた大笑いされている。
「2年前の答えを教えようか。坂本、お前ちょっとカマかけにひっかかりやすいぞ」
いや、あなたが相手じゃなきゃ……ってこれは言い訳か。どうにも苦手意識というか高い壁を感じるというか。自分の師匠に対してはこんなもんだろう？　いつか超えられるよう精進しよう。
というかまさか昔からこうやってカマかけされてただけ？
いや、今はそんなことは置いておいて、今できる最大限の反撃を繰り出そう。

「宮野さんもさっき私の話を聞いている最中、ずっとニヤニヤしてましたよね？」
「フフ、何のことかな？　我が輩は愛弟子の提言を孫の作文を聞いてやっている時と同じくらい真剣に聞いていたぞ？」
　どんな例えだ……ただ、声の方は浮かれている様子だ。
「それはニヤニヤどころじゃ済まないですね。というか相変わらず例えが分かりづらいですよ……。でも、楽しんでいらっしゃるようで何よりです。楽しみ方は少し変わっていると思いますけどね」
「何、君もうちの孫と大して変わらないからな？　そんな変な例えでもないさ。それに君をからかうのは頭を使ってなかなか面白いのだよ。張り合いがあって、とても良い」
　思いっきりため息をつきたいところだが、ぐっとこらえる。
「やれやれ、こんなのと一緒にされたらお孫さん泣きますよ？」
　どっちかっていうと泣きたいのはこっちの方なんだが、こんな冗談を受け入れたらこっちの負けだ。
「大丈夫さ。我が輩の自慢の孫だからな」
　宮野さんは言いたい放題言った後、大きく咳払いをして、
「話がそれたが、話したいことは既に全て話した。また何かあったら連絡しろ。内容にもよるが何とかしてやる」
　どんなにおちゃらけていても最後にビシッと決めるから憎めない。
　これがこの人がここまでの地位に上がった理由の一つなのかもしれない。
「了解です。その際はよろしくお願いします」
「おう！　んじゃ通信終了だ。またな」
「失礼します」
　向こうの音が完全に聞こえなくなった。どうやら通信が切れたようだ。
　師匠との問答が終わり、緊張がとけたからか、また少し眠たくなってきたので、リフレッシュルームに行ってコーヒーを飲みながら談笑でもして眠気を払おうと決意し、部屋を出た。

リフレッシュルームにつくと休憩中のガンドック一同に遭遇した。
敬礼から軽く挨拶をする。
「ガンドックじゃないか。休憩中か？」
こちらに3人が振り返って敬礼を返してから、ガンドック1の犬塚剣が状況の説明をする。
「はっ、今朝の訓練レポートを書き終えて、シミュレーターで戦闘訓練を行った後の休憩であります」
「で、向こうで何か二人が騒いでいたようだが、何をしてるんだ？」
ガンドック3の小山静が少しめんどくさそうな顔をしている。
「何というか、いつもの先輩と高田です」
あぁ、なるほど。いつものね。妙に納得する。
そう、いつも通り、離れた場所でガンドック2の吉川理恵とガンドック4の高井則良が互いに腕を組みながら言い争いをしている。
喧嘩するほど仲が良いとは言うが、ここまでになると漫画とか小説では何か裏がある勢いだな。こう実は好きなんだけど素直になれないといった類いの……いや、どうだろう。
とりあえず、それを置いておいて、普段の疑問をぶつけてみる。
「何というか、お前等は仲が良いのか悪いのかわからんな。戦闘中のチームワークは目を見張る物があるんだが」
そんな私の疑問に、ガンドック5の石山慎治が応えてくれた。
「隊長がまとめあげてくれるおかげです。ただ、あぁ見えて彼らは仲が良いのですよ。今のも姉弟がじゃれあっているようなものです。たまに見ていて羨ましくなることもあります」
そんなもんなのか。今度ちょっと互いの気持ちを確かめてみたいなと思っていたら。横から殺気のようなものを感じた。
殺気の方に視線を変えると、いつも大体半目の小山だが、その半眼に何か激情がこもった視線で石山を睨みつけるようにを見ていた。
ただ、その視線に気付いた石山の方は、極めて冷静な顔をして小山を見つめ返している。

彼ポーカー強そうだな。おっと、思考が変なところに飛んだ。
さすがに睨まれ続けられているのを疑問に思ったのか石山が口を動かした。
ただ発せられたのは言葉の爆弾だ。
「どうした？　そんな怖い顔をして。皆、君の表情や声に可愛げが無いと言うが、そんな表情ではかわいい顔が台無しだ」
そんなことを言いながら小山の頭に手をおいて、優しくなで始める。
「え……えっと、ちょ……ちょっとお手洗いにいってきますっ！」
小山は俯いて顔を見せないように部屋を走って出て行ったが、声は上擦っていたし、顔が随分と赤かったな。
……いや、何だこの状況は？
「あー、石山准尉？　今のは何だ？」
私の質問に対して不思議そうな顔をしてこちらを見ている。
「いや、特に何でもないのですが、強いて言うなら客観的事実を述べただけです。それに彼女は頭を撫でると機嫌が良くなる傾向があるので。つい」
つい。じゃない。彼は天然たらしなのだろうか？
犬塚にアイコンタクトをとって、こいつらはいつもこんなんなのか？　と確認する。
私の意図を察したのか察してないのかは分からないが、両肩を軽くすくめて、困ったような苦笑いを浮かべている。
仕方ない。今後のことを含めて話が出来たので、耳打ちのために手招きをした。
「まぁ、部隊内のメンバーが引かれ合うのは仕方ないんだが、色々と大変だぞ？」
「分かってはいるんですが、これでまとまっていますし。下手に禁止して目の届かないところで問題起こされても困るので、多目に見てください」
思わずため息を吐いた。これが妻帯者の余裕というやつかな？

肩に手をおきながらとりあえず適当な応援の声をかけておく。
「まぁ、何だ。苦労しそうだな」
「苦労というよりも、もどかしい感じが続くだけですけどね」
「それだけで、済むと良いな。上手く立ち回れよ」
冗談じゃなく、もどかしさだけで済むなら良い。下手にこじれないように頑張って貰おう。
石山が何の話か分からないようで、首を捻ってこっちを見ている。
「まぁ、何だ。君もあまり人を刺激しすぎないことだな」
「はぁ、了解しました」
腑に落ちないような困り顔で、気の抜けた返事をされた。
ガンドック小隊の人間関係が私の中で更新された。もどかしくも微笑ましい話が終わっても、ガンドック2とガンドック4の言い争いは未だに続いていた。
「で、そろそろ言い合っているあの2人は止めないのか？」
犬塚の代わりに石山が答えた。
「そろそろ終わる頃かと。二人揃ってシミュレータールームに行くんじゃないでしょうか」
マップスの訓練や模擬戦が出来るシミュレータールームに？
さっきまでそこにいたとは言っていたがどういうことだろう。
「模擬戦後シミュレータールームで訓練をしていたのですが、撃墜数の勝負を始めだしたのです。現在の結果は引き分けなんですよ。決着をつけてやる！　と息巻いていたのですが、一旦落ち着けさせるために隊長が休憩に無理矢理引き摺り出したんです。それで、そろそろ提示した勝負を再開する時間になるのですよ」
あー、それでか。普通の喧嘩とは違ってマップス関連の言葉が出ているのは。
「ただいま。何だ、まだやってるんだ」
大分落ち着いたのか小山が戻ってきた。赤かった顔色は元に戻ってはいるが、声音はいつもよりほんの少し柔らかかったし、微妙に口が緩んでいる。

なるほど、確かに機嫌が良さそうだ。ただ、君が惚れた相手はどうやら恋愛という戦いおいては、戦場の時ほど勘が良くないようだよ。
「何かボクに憐れみの目が向けられている気がするのですが、気のせいですよね大佐？　何か一時期、隊長が見せたような目です」
ちらっと犬塚を見るとそっぽを向かれた。
なるほど、全く同じことを考えて表情に出してしまった時期があるみたいだ。
それにしても小山は意外と勘が良いな。何とかごまかせるか？
「気のせいだ。君も周りに振り回されて大変そうだと思っただけだよ」
先ほどの目が高井と吉川の言い合いが原因だと勘違いしてくれたようで、あぁ。といって納得してくれた。嘘でごまかす時には真実を混ぜると効果的だ。
しかしこの先、あの二人より君をもっと振り回す奴が目の前にいるのだが、分かっているのだろうか？
そして、チームの予想通り、大いに白熱した2人は時間だからシミュレーションルームに行くと宣言し、リフレッシュルームを出て行った。
「で、君達も行くのかね？」
「放っておいたら、いつまででも続くので」
犬塚が良い笑顔で返してくれた。どうやら今のチームが本当に好きらしい。完全に部下たちをまとめられている訳では無いけれど、良い隊長だ。
彼ならこの複雑な人間関係も何とか出来るだろう。応援の言葉とともに送り出そう。
「行ってこい。がんばれよ隊長」
「イエッサー」
3人は敬礼をして部屋を出て行った。
さて、どっちが勝つのかな？　今度結果でも教えてもらおう。

今のお喋りが丁度良い息抜きになったようで眠気もなくなった。
執務室に戻って、気合いを入れ直してデスクワークにあたる。
何とか本日の分の書類仕事を片付けて、模擬戦のデータを松平に送信する。
訓練や模擬戦のデータから新しいアイデアが沸くそうで、わざわざ国と菱田重工間で特別協定を結んで、データのやりとりが行われているのだ。
これも立派な仕事の一つである。

仕事が終わり、時計を見ると１８時を過ぎていた。
お腹も空いてきたので私は執務室を出て食堂に向かっていた。
すると、また廊下で田口軍曹に遭遇した。が、行ったり来たりしてその場をうろうろしている。何か様子がおかしい。
「田口軍曹、どうした？」
びくっと肩が震えてこちらに振り向いた。いつも以上に反応が大きかったが、何よりもいつもと違ったのは背中に何かを隠すような動きをしたことだ。
しかもそれなりに大きな物らしく手は後ろに回したままだ。
「何を隠している？」
額に汗が滲んでいるのが目に見えるほど焦っている。
宮野大将の真似でカマをかけてみるか。
「恋をした女性へのプレゼントかな？」
田口軍曹の顔色が一瞬で紅潮すると、一転して青ざめた。忙しいやつだな。
分かりやすすぎて思わずくすっと笑ってしまう。
「大佐殿はエスパーですか？」
私が宮野大将にした反応と全く同じだったので、吹き出してしまった。
「確かに私のガラでは無いですが、そこまで笑わなくとも……」

かなり落ち込んでいるようだ。がっくりと身体全体でうなだれてしまった。
しまったな。今の笑いで誤解を与えてしまった。早くこの勘違いを払拭せねば。宮野大将とのカマかけについてのやりとりを簡単に説明する。
「なるほど。そんなことがあったのですか。さすが空軍大将殿ですね」
どうやら誤解はとけたらしい。
ただ残念ながら、どうやら宮野大将の悪戯好きが私にも受け継がれているようだ。ちらっと見えた手紙に相手の名前がかいてあったのだ。それを見てまた悪戯心がくすぐられてしまった。
「相手はそうだな。食堂のおばちゃんの一人娘で名前は佳奈(カナ)だったか。夜の食堂にバイトで入ってきている子だよな？　絶世の美女とは言えないが、綺麗な長い黒髪で、清楚な印象がある真面目な良い子だ。あの垢抜けて無い感じに惚れ込んだのか？」
また軍曹の顔が赤くなった。反応がとても早くてわかりやすい。
「なぜ分かったのですか？　今のもカマかけというやつですか？」
思わずひるんでしまうほど声が大きかった。少し静かにと伝えるとシュンとしてしまったので、ネタばらしをする。
「いや、今のは違う。その手紙の宛名が見えたのでな。というか、プレゼントに花束と手紙とは。いや、メッセージカードというのかな。なかなか良い趣味をしているではないか」
田口軍曹がクワッと顔をこちらに向けて、大きく目を見開いてこちらをジッと見つめてくる。困った……正直顔が近い。しかも体格が良いのですごい迫力だ。
「あー……素敵な贈り物だと思うぞ？　君のような者が贈るというのもギャップがあって良いと思う」
軍曹がこちらの手をとって握ってきた。ゴツゴツした男らしい手だ。指の皮は堅く、マメのようなタコが何個か出来ている。数年に渡る訓練の積み重ねの結果だろうか。何故か私は手の分析をしてい

る。その理由は、この光景が周りから見ると相当不思議な光景に見えてしまうと思ったからだろう。
体格の大きな男性がバラの花束を持ちながら、普通の体格をしている男性の手を取っていて、その両者の距離がとても近い。見られたら何か酷い勘違いされそうだ。
「ほ……本当にそう思われますか？！　花束とメッセージカードで喜ばれますか？！」
とても興奮した声だ。緊張のあまり声が震えているし、とても大きくなっている。どうやって彼を落ちつかせよう。何か近い話題をふって気を散らしてみるか。
「ところでだ軍曹。どうしてまたプレゼントを？」
私の疑問で手を離して、身体の距離もあけてくれた。どうやら周りの誤解を受ける危険からは助かったようだ。
「実は、今日が誕生日だと聞いているのでお祝いを。と思いまして」
なるほど。意外とがんばっているじゃないか軍曹。しかし、この緊張ぶりでちゃんと渡せるのか？
「なるほど。それはまた素晴らしい話だ。君の恋が成就することを祈っているよ」
何とかその場から逃げだそうとするが、軍曹に呼び止められる。
「大佐殿、折り入って頼みがあります」
何かいやな予感がするなぁ……。
「プレゼントを渡すときに、その……人払いをして欲しいのですが……」
消え入りそうな声で頼んできた。予想は出来ていたが、意外とこういうところでは気が弱いようだ。鬼軍曹の意外な一面を見た気がする。
軍曹には日頃新人の教育で世話になっているので、協力は喜んで乗ってあげるとしよう。今日の模擬戦で正規パイロットに勝てるような新人を育成してくれたボーナスだ。
「人払いか。どうせならそうだな。彼女を呼び出して、二人きりに

させようか？」
軍曹に彼女と二人きりになれるチャンスを作る提案をする。
「大佐殿……あなたが私達の上官で本当に、本当に良かった！　私はなんと幸せな男なのでしょうか！」
……あのぉ田口さん、涙が流れているように見えるのは気のせいでしょうか？　そこまで緊張していたんですか。そんなあなたに協力出来て私はとても嬉しいです。予想外の展開に私の思考が少しおかしくなりそうだ。
何故か声まで出にくくなっている気がする。
「と……とりあえず、行こうか軍曹」
精一杯の笑顔を作って食堂に向かうよう促す。
「了解です。大佐殿」
花束片手に敬礼というのも不思議な光景だ。
軍曹の名誉のために周りに人がいなくて本当に良かった。
とりあえず、急遽作戦を考えることになり、歩きながら作戦概要を軍曹に伝えていった。
「では軍曹。作戦コード：ドリーム・シアター開始だ」
少し外連味が聞いた名前をつけて軍曹の恥ずかしさをごまかすのと、やる気を引き出す。
大層な名前をつけているが実際大した作戦ではない。
佐官は食事を部屋まで運んでもらえるサービスがあるのだが、そのサービスをおばちゃんの娘である佳奈に頼むのだ。
ただ、今から頼んでもすぐ仕事に戻ってしまうので、それではあまり意味がない。仕事が終わるか終わらないかのギリギリの時間に配達するようにお願いし、配達が終わったら仕事を上がるようにおばちゃんから言ってもらう算段だ。
これならゆっくりと軍曹が彼女と話す時間が設けられる。
まぁ、うまくやれば食事くらいには一緒にいけるんじゃないかな？
確か8時半頃に食堂が閉まるので、その時間から食堂のスタッフは食事をとるはずだから望みはあるだろう。

さっきの挙動不審っぷりを考慮すると多分起こりえないイベントなんだろうと思ってしまうのが残念な話だ。
ちなみに、この作戦の最大の問題は何かというと……
私の夕食がとても遅くなると言うことだ。
しかし、これも軍曹のため。空腹の1時間や2時間くらいは我慢しよう。
そういえば、執務室の机の中にチョコレートぐらい入っていたと思うからそれを食べてしのぐか。
そんな風に自分の空腹をしのぐためにどうすれば良いか考えていたら、軍曹がいったん花束を置きに部屋に戻った。そういえば、この作戦では彼も空腹に耐えるのだ。ただ、緊張で食事どころでは無いようなので大丈夫だろう。
さてと、まずは敵情視察か。マップスをはじめとする兵器による戦争でも、恋愛という名の戦争でも、まずは彼我の情報収集が第一だ。
確か意外と人気があったような気がするが、さて、どうなることやら？

食堂につくと、さすが夕食時とあって大変混雑していた。
佐官用の特別ルートを使って（ただ単にスタッフ用の入り口なのだが）中に入り込み、おばちゃんに声をかけた。
「おーい、おばちゃん。ちょっとこっち来て」
後ろから声がかけられて食堂のおばちゃんが振り返ってこちらを確認する。
そして、手を振りながらこっちにやってきた。
「あれま？　もっちゃん何でそんなところから来てるの？」
「いや、すごい混雑ぶりだね。仕事が忙しくてね。ちょっと気分転換がてら配達サービスを頼みに来たのだが、真面目に列に並ぶと恐ろしく時間がかかりそうだったので。つい裏から」
我ながらヒドイ言い訳だ。

ただ、さすがおばちゃん。特につっこまれずに了承してくれた。
「電話で良いじゃないかい？　まぁいいわ。大体何時くらいだい？」
よし、これで第一段階クリア。
「そうだな。８時半あたりで頼めるか？」
「またギリギリだねぇ……まぁ、もっちゃんの頼みなら仕方ないわね」
そして次がまた難関だ。最大限の演技をしなくてはならない。
「ありがとう。助かるよ、おばちゃん。って、おっとしまった。もう一つ頼みがあるのだが、配達の方は佳奈さんに頼めるかな？　確か今日は彼女の誕生日と聞いたのでな。普段多くの隊員が世話になっているお礼として、ちょっとした贈り物があったのだが、忘れてきてしまった」
「さすが、もっちゃん良い所あるわねぇ。分かった。その時間に佳奈をそっちに送るわ。プレゼントのことは内緒にしておいてあげる。それと、これは私の誕生日も期待していいのかしら？　ちなみに私のは来月の４月２日よ」
おばちゃんが嬉しそうに了解してくれた。何とか第二段階もクリアした。
ただ、どうやら来月の出費がこれで確定したらしい。さすがおばちゃんやるな！
さて、後はどれだけ彼女が人気かを探るだけだが、スタッフ専用休憩室の机の上を見ると結構な数のプレゼントが置いてあった。
箱の数からすると、プレゼントの数は１５程度か。
包装で包まれていて中身はよく分からないが、大きさからするとそこまで大きくは無い。女の子に受ける小物とかアクセサリーとかそういう類いの物だろうか？
田口軍曹が用意しているような花束と手紙は……どうやらないようだな。
良かったな田口軍曹。君のそのチョイスはやはり間違っていなかったかも知れない。

敵情視察も出来たのでおばちゃんにもう一度礼を言ってから食堂を出た。
「さて、私もでまかせとはいえプレゼントを贈ると言ってしまったな。何を贈ろうか」
歩きながら何が良いかを考える。少なくとも軍曹のプレゼントのインパクトを潰してはならないし、彼をアシスト出来るような物が良いだろう。
娘の佳奈の事は実はあまりよく知らないのだが、おばちゃんは酒飲みだと聞いたことがある。惚気話で旦那と良く飲み比べをしたと語っていたことがあった。
なら、娘の方もある程度は飲めるだろう。メンデル遺伝の法則から考えると両親ともにお酒が飲める体質であるならば、子供は最低でも75%の確率でアルコールの代謝が出来る。
そう考えると、ワインならば家族で楽しめるし、うまくいけば田口軍曹も誘われるかもしれない。我ながらなかなか良い選択だ。
「よし。ちょっと、ワインでも買ってくるか」
田口軍曹に8時30分くらいに執務室から食堂の間の廊下で待機するよう伝えて、車でワインを買いに急いで町へ向かった。
ただ、店について気付いた事だが、私はあまりワインに詳しくなかった。
しまった。この私としたことが……。
どういった物が良いのか悩んでいても仕方ないので、ダメ元でソムリエに誕生日に家族で楽しめるワインは無いか？　と注文したら、あっという間にワインを選んで出してくれた。意外と言ってみる物だ。
ワインを買って基地に戻ると時間は既に8時をまわっていて、私もいつ佳奈さんが来ても良いように部屋で仕事をしている振りをしながら待機を始める。
さて、田口軍曹は気が気じゃ無いだろうなぁ。様子を見てみたいが離れる訳にはいかないので、想像してニヤニヤすることくらいし

か出来ない。
そして、約束の時間がやってくる。
部屋の扉をノックする音が聞こえた。
「坂本さん夕食をお持ちしました」
確かに佳奈さんの声のようだ。
「どうぞ、入ってくれ」
「失礼します」
軽く頭を下げて佳奈さんが部屋に入ってくる。
食堂での仕事なので三角巾を頭につけてエプロンもしている。
後ろから見える長い綺麗な黒髪のお下げが白い布に栄えてより黒く綺麗に見える。
なるほど、清楚なイメージの子にこの衣装はなかなか似合うものだ。
何というか空気が柔らかく感じる。田口軍曹もこれにやられたのだろうか？
「ありがとう。そこの机に置いておいてくれ」
「分かりました」
端末や書類の載っていない客用の机の上に食事を置いてもらう。
一通り置いてもらったらおばちゃんへの宣言通りプレゼントを渡さなければ。
「佳奈君。君のおかげで隊員達の士気は非常に高く保たれている。これは私からのほんの気持ちだ。是非お母様と一緒に楽しんで欲しい。誕生日おめでとう」
ほんの少しの笑顔で、出来るだけ真面目な顔で手渡す。笑顔を見せるのは次の田口軍曹の仕事だ。
「ありがとうございます！　私もお母さんもワインは好きなので嬉しいです」
ふぅ、とりあえずは及第点のようだ。さて、舞台は整えたぞ田口軍曹。

後は君が主役だ。
佳奈さんが部屋から出て行くのを見送って行動に移る。
さて、では尾行開始だ。自分で言うのも何なのだが趣味が悪い。
宮野大将が聞いたら大爆笑されそうだ。
こっそり後ろをついていくと田口軍曹が花束を持って現れた。
「こ、ここ、こんばんは！　佳奈さん」
あちゃー……緊張しすぎて舌が回ってないぞ軍曹。
「こんばんは、田口さん。そういえば今夜は食堂に来なかったですね。身体の調子でも悪いんですか？」
おぉ、ちゃんと名前を覚えてもらっているし、食堂に来ているかどうかまでチェックしてもらっている上、身体の心配までしてくれている。なかなか良い子じゃないか。しかも脈もありそうだ。
「え、えぇ。実は候補生達の仕事が残っていまして、食事はまだなのですよ」
田口軍曹は早口で言い切ってから大きく息を吸い込んだ。
どうやら決意を決めて、ここで渡すつもりのようだ。
「あの佳奈さん。誕生日おめでとうございます。つまらないものかもしれませんが、これをどうぞ」
おっと……満面の笑みじゃ無くとても固まっている顔だ……。
ただ、その顔と花束のギャップが面白かったのか佳奈はクスクスと笑い始めた。笑い方も意外と上品だな。おばちゃんの娘とは思えない。……これはおばちゃんに失礼か。
「何というか済みません。やっぱり変ですよね。この私が花束って」
軍曹が見るからにしょんぼりしている。あきらめるな軍曹！
「いえ、今年もらったプレゼントの中では一番嬉しいかな？　小物やアクセサリーも嫌いじゃ無いですけど、お花が大好きなんですよ私。お部屋に飾りますね」
おぉ！　よかったな軍曹！
気付いたら拳を握ってガッツポーズをとっていた。落ち着け私よ。
「確か、お食事はまだなんですよね？　みんなと一緒で良ければ今

から食事はいかがですか？　ワインもありますし」
　田口軍曹が眼をぱちくりさせている。何が起きているか多分脳が処理しきれていない状態だ。
「えっと？　私と佳奈さんが食事ですか？」
「はい。あ、まだお仕事が残ってますか？」
「いえ、大丈夫です。是非ご一緒させてください！」
　やたら大きな声で良い返事をした。おめでとう軍曹！
　心の中で拍手を送っていたら、軍曹がこちらに気付いたようで頭を軽く下げてきた。
　む、尾行がバレてしまった。こんだけ上手く行ったんだ。感謝されど文句は言われないだろう。
　この時はまだ佳奈さんの「みんな」という言葉の意味がご両親のことだと私は思っていた。
　無事に作戦が成功したと思い、私も執務室に戻り遅い夕食をとることにした。
　机の上の料理を見ると、どうやら焼き魚定食のようだ。若い連中にあまり人気が無いのか少し余りやすいようで、最後に頼むと大体これになっている。焼き魚も美味しいと思うのだが。
　今日は時間が遅く、お腹が空いていることもあり、いつも以上においしく感じられる。空腹だけでなく、田口軍曹の幸福っぷりを分けてもらえたのが良い調味料だったのではないだろうか。
　食事が済んだので食堂に食器を返すついでに軽く様子を見てくるとしようと考えた。
　しかし、食堂には私の想像していた楽しそうな光景とは全く別の楽しい光景がひろがっていた。
「何だこの人数は？」
　そう、田口軍曹が佳奈さんとおばちゃんやシェフのおっさんと仲良くやっているかと思いきや、物凄い人数が食堂に集まっている。
　目測ざっと３０人。一体何があったと言うのだ？　食器を返却口にあるシンクに置いて、近くの人に声をかけた。

「おい、君。これは何の騒ぎだ？」
「お？　なんだ？　って坂本大佐！？　失礼しました。大佐もおばちゃんに呼ばれて来たのですか？」
一体何の話だ？　あらゆる想定が頭の中で浮かんでは消え浮かんでは消えた。私が考え込んでいると逆に不思議そうな顔をしてきた。
「あれ？　坂本大佐も佳奈さんの誕生日祝いに来いと言われたのでは？」
背中に冷や汗を感じる……しまった。そういうことか。
作戦のためとは言え、仕事で忙しいと伝えたからこの情報は手に入らなかったのか。
「実は先程まで仕事をしていたのでな。なるほど、実にめでたい話だ」
「おつかれさまです坂本大佐。このままご一緒にいかがですか？」
「いや、少し疲れているのでな。失礼させていただくよ」
まずいな。私の作戦ミスだ。田口軍曹に謝らなければ。
人混みの中から田口軍曹を探すために周りを回ってみると、田口軍曹のトレードマークであるショートモヒカンが発見出来た。
肩をトントンと軽く叩き、こちらに気付かせて耳打ちをした。
「すまないな。私の作戦ミスだ。まさかこんなことになるとは想定していなかった」
私の謝罪に対して田口軍曹は首を横に振ってくれた。
「いえ、どうかお気になさらないで下さい。当初の目的は達成出来ましたし、ここに着くまでの間は実に夢のようでした。作戦名通りのドリーム・シアターです。これで大佐殿を非難してしまっては、何か罰か当たりそうですよ」
田口軍曹は満面の笑みで答えてくれた。どうやら、本当に満足しているらしい。
辺りをもう一度見渡す。佳奈さんの近くにいる男達は口々に口説き文句を言っているようだ。それに対して佳奈さんはニコニコと当たり障りの無いお礼で返している。

私は再度軍曹に視線を戻し肩に手をおいた。
「田口軍曹。君の戦場は数多くの強敵が待ちかまえているようだ。負けるなよ」
「了解しました。私は誰にも負けません」
それで良い。がんばれ田口軍曹。今日はとりあえず、みんなで楽しんで来いと伝えて食堂を後にした。
一応今夜は多忙という設定なのだ。作戦がバレてしまっては田口軍曹に甚大な被害が出る。
参加出来ないのは残念だが、彼の名誉のためだ。仕方ないだろ？
佐官用の個室に戻る中、作戦終了の合図を自分のために出す。
「作戦コード：ドリーム・シアター。ミッションコンプリート」
それが何だかおかしくて、にやついた顔で頭をかきながら帰っていた。部屋につくまで誰ともすれ違わなくて本当に良かったと思う。
この時は、にやけた顔をいつもの真面目な顔にするのが、簡単に出来そうになかったのだ。

個室に戻って時計を確認すると既に9時を過ぎていた。
少し遅いと思ったが、とある人物にテレビ電話をかける。
数秒の呼び出しの後に着信が取られたようだ。柔らかく澄んだ声が聞こえる。
「龍ちゃん、今日も1日おつかさま。晩御飯はしっかり食べた？」
ショートカットの黒い髪で、毛先が少し跳ねている。にこやかな顔の女性がモニターに現れる。
パイロット時代にオペレーターとして共に戦った戦友であり、今は大切な恋人である澄川早苗だ。
ゴースト部隊が解散する際に、バラバラに別れるのなら気持ちを伝えておこうと決意し、告白したら上手くいってしまった。ただ、その話はまた今度だ。
自分も同じチームから恋人を作ってしまったという理由で、今日も他人にあまり強く注意が出来なかった。まだまだ上官として未熟

だ。
ただそんな自己嫌悪のような感情も、１日の終わりに彼女の声が聞こえて、顔が見られただけでホッと出来る。
「あぁ、大丈夫。君も変わりないか？」
「うん、元気だよ。さっきまで仕事してたの？　何か声が堅いよ？」
彼女は耳が良いからか、小さい頃から声の調子や音にとても敏感だそうだ。
その特性を活かして、今では中央司令部の情報解析班についている。
その彼女から、声の調子と表情から相手の感情を読み取れる技術を学んだおかげで、彼女にはまだ遠く及ばないが、私にも少し真似が出来るようにはなった。
「さっきまで、とある作戦指揮をとっていたからな」
真面目な顔をしながら答えた。とても大事な作戦には違いない。
「へー、でも何か随分楽しそうな作戦だったみたいだね。どんなことしたの？」
さすがだ。顔は真面目でも、やはり声で面白いことだったと分かるか。
先程起こった田口軍曹の一連の話を伝える。
花束とメッセージカードを持ってウロウロしていたこと、その緊張ぶり、協力を申し出たら涙を流したこと、うまくいったと思ったら落とし穴があったこと。
それに丁寧に「うん」「おー」「それでそれで？」と相槌を打ってくれる。話していてとても楽しい。
「とまぁ、そんなことをしてたんだ」
「田口さんがんばったね。まだ分からないけど、脈はあるかもね。龍ちゃんもおつかれさま」
「ありがとう。サナの方は今日どうだった？」
「えへへ、どうだと思う？」
ちょっと声音は高め、抑揚もあり。ちょっとした笑いも含まれて

いるとすると。
「どうやら良い一日だったみたいだね？」
「うん、正解。特に大きな事故も事件もなくて、おいしいご飯も食べれて、今は龍ちゃんとお話しできてる。とても良い日だよ」
最後の一言に少し気恥ずかしくてなって、ほほをかく。顔はきっと赤くなっているだろう。
「あはは、照れてるー」
テレビ電話が当たり前になっているが、こういう表情まで分かるので良かったり悪かったりだ。
とりとめの無い話をしながら時間が過ぎていく。
どちらかが一方的におしゃべりをすることは無く、楽しい言葉のキャッチボールが続く。
楽しい時はお互いに適当な話のネタで小さく盛り上がって、どちらかが悲しい時はただ聞いてあげて、困ったときはお互いに妥協策を考えて、心が疲れたときは甘えあって、身体が疲れていたら互いの健康を気遣って早めに話を終える。
そんなバランスのとれた絶妙なコミュニケーション。
今日は二人とも楽しい時だったので、長いおしゃべり続いた。気付いたら１０時３０分だ。
次の日に響いてはお互いのためにならない。名残惜しいがそろそろ切り時だ。
「そろそろ終わろうか。そうだ。来月くらいに仕事で首都のミヤトに仕事で行く機会があるかもしれないから、そのときにご飯でも食べに行こう」
「やったー。楽しみにしてるね。早めに日時を教えてね？　予定がんばってあけちゃうからさ」
「んじゃ、おやすみ。サナ」
「おやすみ龍ちゃん」
モニターと音声が切れた。仕事に私情を挟むのは良くないが、これは早く宮野大将に仕事をしてもらわなければな。

電話が終わった後は、風呂を沸かして、ゆっくりと一日の疲れをとって、ベッドに飛び込んだ。

長い一日が今日も終わる。

断章「死の商人」

断章「死の商人」

　某国某月某日某時刻。
　地下アジトに潜伏している武装した数人の男達の下に、身なりの良いセールスマンがやってきた。
潜伏しているアジトが謎の男にかぎつけられているのだ。男達はそれぞれ武器を手に取り、常に相手の動きを止められるよう警戒をする。
　そんな中でセールスマンは後ろから自動小銃をつきつけられてはいるが、余裕の笑みを浮かべている。
男達のリーダーであるヒゲをたくわえた中年の男がセールスマンの額に拳銃をつきつけ、殺気を含んだ声で何の用かと問う。
　セールスマンはニッコリと笑いながらカバンの中から書類を手渡した。
「商売に参りました。これを買いませんか？　あなた達にとっては必要不可欠な物でございましょう？」
　書類を手に取った男性は驚きのあまり書類を手から落としてしまった。
　罠かどうかを確認するために、声に殺気を込め続ける。
「貴様正気か？　目的はなんだ？」
「もちろん大真面目でございます。目的はあなた方と同じで、国のためでございます」
　一点の動揺もない落ち着いた返事だった。
「対価に何を要求する？　金は無いぞ」
「書類の続きをご覧ください」
　地面に落ちた書類を部下が拾い上げて手渡そうとするが、リーダーの男と同じように文面を見て、驚きのあまり固まってしまった。

リーダーの男はその手から書類をとり、続きを読んでいく。
「こんなのが対価で良いのか？　ある程度は既に予定していたことなのだが」
セールスマンの男は両手を挙げて大げさに驚いた振りをした。
「おぉ、それはありがたい。では交渉成立ということでよろしいですかな？」
「大丈夫だ。もう一つの条件も我々のスポンサーがどうにかしてくれる」
セールスマンの方が笑顔で握手を求めた。
2人の男が握手をして、交渉が成立する。
セールスマンは交渉が終わり、帰り支度を始めた。
男達に前と後ろから挟まれながら地下アジトの出口に向かう。
そして、出口の扉を開ける瞬間に身体の向きを変えて、男達に非常に楽しそうな声で贈り物があることを伝えた。
「今日はお近づきのしるしに手土産をご用意いたしました。どうかお使いください」
扉を開けると目の前に装甲車が5台用意されていた。
旧世代兵器とは言え、自動小銃と一般車両の組み合わせより遥かに良い。
唖然とする男達に品の良い一礼をしてセールスマンの男は去っていった。
装甲車に歓喜し騒いだため、セールスマンが小型のマイクを使って呟いた言葉を男達は知る由もない。
「本部へ作戦完了。これより帰投する」

第八章「ミヤト出張」

第八章「ミヤト出張」

模擬戦の日から数日後、無事に宮野大将と話した作戦が正式に受理された。

おかげで、菱田重工の技術者や開発機器類の受け入れ準備や細かい書類仕事に追われる日々を過ごすことになった。

ちなみに、書類仕事の休憩中に聞いたことだが、ガンドックの吉田と高井の勝負は、吉田の勝ちだったそうだ。高井もかなり健闘したらしいが、経験の差が出たと言ったところだろう。

そして昨日、ついに受け入れ体制が整ったので、今度はこちらから菱田重工に出向いて、最終チェックを行うことになった。

メールで済ませば良いと思われるかもしれないが、色々と事情がある。

正直に言えば、書類から逃げたかったというのが半分だが、搬送に関して少し気になることが出来たのだ。それを自分の目で確認がしたかった。

キーナ市から首都のミヤトに直行する地下リニアに乗る。一時間に一本程度の間隔で運行しており、大体２時間３０分程度で１３００ｋｍ離れた首都に着く。

スピードはとても速いのだが、揺れや騒音も制御されているので非常に快適に居眠りが出来る。おかげで、居眠りから目が覚めたらミヤト中央駅到着だ。

地下リニアの駅から地上に出ると、少しやせ気味の体型で、ヨレヨレの白衣を着たぼさぼさ頭の眼鏡をかけた男が待っていた。

何と松平が迎えに来てくれていたのだ。

今日は周りの目もないし、現役時代と同じように砕けて喋られる。

「松平じゃないか。仕事中じゃないのか？」

「もっさんを迎えに来るのも仕事のうちだよ。他のやつにもっさんは任せられないさ」
　ちょっとおちゃらけた声だったので、言っていることは冗談だと分かったが、彼の目から気をつけろという合図が送られている。彼の冗談にあわせるか。
「で、私は君の長話につき合わされる訳だな？　また例の惚れた女の話か？」
「ちょっとー、もっさんそんな大っぴらに人の恋路について喋るのは酷くない？」
　特に周りに怪しい人間はいなかったと思うのだが、この反応はやはり何かに警戒をしている。
　普段の彼なら、ここで延々とマップスの魅力について語ってくれるはずだ。
「すまん、少しデリカシーにかけたな。では失礼する」
　車に乗り込んで電源が入った時に、松平の表情がほっとしたものに変わった。
「さすが、もっさんだね。こっちの意図がちゃんと伝わったみたいで良かった。さすが僕達の元隊長だね」
「おいおい、良いのか？　盗聴器はついてないだろうな？」
　いきなり警戒をとかれたので、少し不安になってしまった。
「大丈夫大丈夫、僕を誰だと思ってるの？　車に小型ジャマーをつけるのは当然だよ？」
　携帯端末を見ると確かに電波が入っていなかった。確かに元々狙われやすい立場にいる人間だったな。
「で、ここまでやってるということは、やはりあれか？」
「本当に周りにいるかどうかは置いておいて、警戒しろ。って宮っちが言うからさー。こっちも意外と大変だよ？」
　宮野大将が気に入っているから良いものの、軍のトップをニックネームで呼べるお前はすごい奴だよ。
「で、その宮野大将からの件についてなんだが、今第三世代フレー

ムはどうなっている？」
　とりあえず、話がそれないうちに本題に入る。
「後は服を着せたり、おめかししたりの微調整で試験可能ってとこだね。近い内に全部そっちに持ってく手はずだから、今急いでやってるよ」
　状況は把握出来た。わざわざ出向いた甲斐があったようだ。
「松平、一つ頼みがある。こちらに搬入する時に、第三世代フレームは全て第二世代型の装甲をつけてくれ」
　松平は何かに驚いて、勝手に一人で「へぇー」と納得しはじめた。
「どうした？　勝手に一人で自己完結して」
「いやね、宮っちにさ、もっさんが会いに来たら着せ替えの話をするから準備しとけ。って言われたんだよね。まさかその通りになるとは。ちなみに服を着せる段階になっても、もっさんから何も無ければ我が輩に連絡しろ。とも言われたよ」
　宮野大将も気付いたのか。先を越されたのと試されているのが少し悔しい。
「スパイに第三世代フレームがうちに運ばれるのを気付かれるとまずいからな。第二世代型マップスの搬入という形で偽装したい」
「なるほどね。任せて。すぐやっておくよ。ついでに発注書も作っておこうか」
　話が早くて助かる。これで心配事が一つ減った。
「ハリボテの方はどうなってる？」
「それはもうどっちのハリボテもバッチリだよ。僕から見ても両方本物にしか見えないからね。まぁ、そのまんま同じ装甲材使ってるから当然なんだけどさ」
　なるほど。そっちの方も順調のようだな。これで、菱田重工関連の作戦はこれで安心だ。第三世代フレームが開発されている工場につくまでは適当に雑談をしておこう。
「で、松平。さっきの冗談の続きなんだが」
　凄く楽しそうにこっちに振り向いた。危ないから前を向いておけ

と注意して冗談の続きを聞かせる。
「相変わらず、女性には興味無しと言ったところか？」
「ハハッ、もっさんは冗談がうまいねぇ。たくさんの愛する娘がいる僕だよ？　興味がない訳がないじゃないか」
おそらくこっちの意図が多少分かっているせいだろう。語尾がめちゃくちゃになっている。
「動揺して語尾がおかしくなってるぞ。いや、君に子供がいたら、親子そろって２０年後くらいにとんでもないマップスを開発しそうだと思ってな」
そんな私の考えに松平は口をとがらせて文句で返してくる。
「ひどいなーもっさん。まぁ僕のことが分かる人なら良いんだけど、そんな人は本当の意味で、ほとんどいないんだよねぇ……」
確かに松平は特殊すぎる性癖を持っている。でも、だからこそ、今の発言を聞くと悲しいと感じてしまう。
世界の軍事バランスをひっくり返すとはいかないまでも、バランスを大きく変えられてしまう頭脳の持ち主だ。その頭脳を欲しがっている人間はゴロゴロといる。しかも、大抵ろくでも無い奴らが興味を持っているのが問題だ。
昔、サナも松平は無理をしていると言っていたことがあった。最初の方は、あくまで自分の作品の自慢のようなものだったが、途中からある意味の自己防衛のために発展させた特殊性癖なのかもしれない。
以前、ＦＴＥ技術の資料が研究者から漏れたという事件もあったのだが、この妄言癖とも言えるマップスに対する接し方で、ハニートラップをはじめとする数々の情報漏洩の危機を回避しているそうだ。おかげで最近少し人間不信気味らしい。
「お前の場合は、そんなやつが現れたら大抵スパイの類なんだろうな……」
「もっさん相手だから言うけど、なんとまあ、悲しいことにそうなっちゃうんだよねぇ……」

自覚症状はどうやらあるようだ。何とかしてやりたいと思うが、解決策がすぐには思いつかない。少し情けないが、急な訪問でも、何とか時間を空けてくれたサナに今夜相談してみよう。
ただ、それでもだ。今落ち込んでいる彼は、元同僚で、戦友であり、大切な一人の友人だ。
そんな彼を元気づけるためには、多少のハッタリくらいかましても問題は無いはずだ。
「そのうち、何とかしてやる。だから、もう少し苦労をかけることになる。すまない」
松平はすてきな笑顔をしながら冗談を含めて頷いてくれた。
「ありがと。やっぱりもっさんは頼りになるね。特に僕はホモという訳じゃないんだけど、ちょっとかっこよすぎて、惚れちゃいそうだよ？」
うれしさと悲しさと何かにすがりたいような切なさが混じった複雑な声だった。そんな声でこんな冗談を言ったのだ。これはおそらく彼の精一杯の強がりだろう。
だからこそ、その強がりに応えて自信満々に笑って冗談で返そう。
「おっと、大変魅力的な誘いだが、サナに怒られるのは怖いので止めてくれ。あいつ相手に隠し事は私でも出来ないからな」
二人で吹き出して大笑いしてしまう。
工場につくまで1時間ほど笑い話が尽きることは無かった。

「今のところ、こんな感じ」
端末のモニターを見ると調整中の第三世代フレームが映っていた。
なるほど、確かにまだフレームだ。装甲やブースターなどのパーツがまだ装着されていない。偽装するにはギリギリのタイミングだった。
「なるほど。んじゃ、後は手はず通り任せれば良いんだな？」
「そうだね。任せておいてよ。んでこっちがハリボテの方」
確かにこれは第二世代型とは違って見えるな。

形としては流線型を主体にした航空機のようなフォルムだ。
「ずいぶんと航空機に似たデザインになったな」
「流線型のデザインもかっこいいかな？　って思って。試験段階だから正式に採用するかは、何とも言えないけど、他にも色々あるからキーナ基地で試して良い？」
「別にかまわないが、会議が終わるまでは外装をごまかして欲しいところだな」
「ちぇ、仕方ないか」
少し残念そうに舌打ちをされた。そんな残念だったのか。

その後は、搬入予定のパーツや武装のチェックを行って受け入れリストを書いた。もちろん第三世代用のパーツも含まれているのだが、全て第二世代型用として書いている。木を隠すなら森に隠せといったところか。
リストを見ると普通に注文したら恐ろしい額になる量だ。緊急事態の作戦だからこそ出来ることである。
「搬送方法は輸送機で間違いないな？」
「そうだね。１機には全部積めないから、５機に分散して積んで、宮っちが指定した空路を通ってそっちに運ぶよ」
バラバラに輸送機が飛び、各基地に少量の配達をしながら、最終的にキーナ空軍基地に本命を届ける作戦となっている。
「よし、これで搬入の方も何とか目処がついたな」
「そうだね。僕はまだ仕事があるけど、もっさんはこの後どうすんの？」
時計を見ると既に５時を回っていた。確か待ち合わせは６時３０分にミヤト中央駅だ。そろそろ送って貰うことにしよう。
「そろそろ帰るとするよ。まだこの時間なら中央駅行きのバスがあるだろ？　それを使うさ」
「そっか。んで、その後デート？」
予定を完全に当てられて驚いてしまった。ただ、この前宮野大将

にやれたばかりだ。動揺はしない。代わりにおちゃらけてみせる。
「お前も超能力に目覚めたのか。……なんてな。宮野大将の入れ知恵か？」
「本当に宮っちはもっさんのことを、もっさんは宮っちの事が分かってるんだねぇ……。あいつが帰り際に時計を確認したらデートだろ？　って言ってみろ。面白い反応するぞ。って言ってたからやってみたんだけど。確かに変なリアクション返された」
そこまで計算済みだったか……思わず右手で頭をかいてしまう。
「今回も宮野大将が一枚上手だったか……」
「あはは、どうやらそうみたいだね。んじゃまた今度キーナ基地でね。さっちんにもよろしく」
「あぁ、楽しみに待っている。またな」
中央駅に時間より少し早く着いてしまったので、のんびりと町の風景を観察していた。バスに乗っているときに気付いたのだが、工事用の大型トラックが良く通っている気がする。
そういえば、前にニュースで地価が高騰しているとか言っていたな。建設ラッシュでもまた来ているのだろうか？
ニュータウンにマイホームを建てよう。といった広告も流されている。景気が良くて結構なことだ。
私の給料ももう少し増えないかな？　と考えていると。
「お待たせ。ごめんね。結構待たしちゃった？」
後ろから聞き覚えのある声が聞こえた。どうやらサナも着いたようだ。振り返ると走ってきたからか、肩で息をしている。
「大丈夫。久しぶりのミヤトだから町を見ているだけで良い時間つぶしになったよ。それに約束の時間にはぴったりだ。サナの方こそ大丈夫か？　息が切れてるようにみえるが……」
私の心配に笑顔で大丈夫と返してくれる。
「近くのお店を予約してあるから、早速行こうよ」
確かに今日はあまり時間の余裕が無いし、まだ少し寒い。早めにレストランに向かう方が良いだろう。

「分かった。案内よろしく」
うん。と短く答えてサナはこちらに手を差しのばしてきた。
少し顔が熱くなるが、恥ずかしがっている場合ではないな。男の尊厳がかかっている。照れ隠しのほほをかくのを必死に抑えて、彼女の手をとった。
柔らかくて暖かい。少し心臓の鼓動が速くなるのを感じる。
田口軍曹のことが笑えないな。と内心で苦笑いをしてしまった。
「どうしたの？」
本当に宮野大将なみか、それ以上に私のことがよく分かる。
「いや、なんでもないよ。ちょっと思い出し笑いをしてしまっただけだ」
別に嘘じゃ無い。嘘をつく必要も無いが、照れくさかったのでごまかしたかっただけだ。
3分ほど歩くと彼女が予約した店に到着した。
「ここは初めて来るな。どういう店なんだ？」
「最近出来たお店だよ。何か各国の名物料理を集めてるんだって。キャッチフレーズは確か、（卓上のぷち旅行）だったかな？　面白そうでしょ？」
なるほど、面白そうだ。外の看板を見ると確かにいろいろなメニューが書いてある。久しぶりに基地の食堂以外の外食となるので、自ずと期待が高まる。
「確かにこれは何があるか楽しみだな」
扉を開けて中に入ると、いろいろな香りがした。
肉を焼く香ばしい香りや、ニンニクを炒めた香り、ハーブ類のさわやかな香りに、甘い果物やトマト等の野菜の香りもする。棚にはインテリアとして各国の変わった食材が飾られて、何ともカオスな空間になっている。確かに各国の名物料理を色々集めていると宣伝するだけはある。
店員が予約席に案内してくれて、二人が向かい合わせになる形で席に着く。

二人ともが店長のおすすめディナーを注文して雑談を始めた。
「店の中は暖かいな。こっちは3月だとまだ少し寒いんだな」
「キーナ市は年中暖かいから羨ましいよ。私もそっち勤務が良かったなー」
「中央司令部勤務ってのは十分すごいことなんだけどな。あそこはエリートしかとらない所だったはず」
もしくは、何か一芸に優れている者か。彼女の場合はそう。
「私はやっぱり耳の良さでとられたんだろうね。昔は変わった子に見られるからあんまり好きじゃ無かったんだけど」
耳の良さと勘の良さで不思議な子扱いされても仕方ないだろう。何を考えているか、隠し事があるとか、そういうのがほとんど見抜かれるのだ。普通の人にとってみれば最初は面白いと思うかもしれないが、積み重ねられると怖くなる。そのためか小さい頃は、良く人に避けられて友達が少なかったとか。
「最初に会った時は隠していたからな。部隊メンバーとのことで相談を持ちかけたら、やけに勘が良くて　まさかとは思ったけど、その通りだったと知った時は少し驚いたよ」
「いきなり大まじめな顔をして（君には人の心を読む力があるのか？）って聞いてくるんだもん。隠してるつもりだったのにびっくりしちゃった」
軽く笑いながら昔を思い出しているようだ。その声に悲しさの響きはなかったので安心する。
「今考えるとデリカシーが無かったかもな」
「ううん、おかげでこうやっていられるんだし。ありがとう」
満面の笑みに思わず照れてしまい頬をかいてしまう。
「龍ちゃんの恥ずかしくなると頬かく癖治らないね」
楽しそうに笑われてしまった。宮野大将もそうだが、私はサナにも勝てる気がしない。話がそれてしまったがサナがまた話題をもとに戻した。
「声の調子と表情で何となく分かるって言ったら、その後何度も教

えてくれ！　って頼み込んで来るんだもん。それはもう本当に驚いたよ？　小さい頃はみんな気味が悪いって言うから隠してたのに、龍ちゃんだけは、バレた後も一緒にいた間ずっと怖がらなかった。それに今もこんな私を好きでいてくれる。本当にありがと」

サナはこんなことを言ってて恥ずかしくならないのだろうか？

彼女から教えられた声の調子や表情を読みとく方法からは、特にそんな様子は感じられない……こちらが恥ずかしくて気づけないだけかもしれないけど。

「そこまで言われると、さすがに、その何だ？　……照れるな」

「いつもは気を張ってるんだから、こんな時くらいは遠慮無く照れちゃいなよー。それにそんな龍ちゃんはかわいいよ？」

ちょっとからかわれているが、悪い気はしない。同じからかいでも宮野大将からのからかいよりも遙かにかわいげがあって良いし、そして何よりも自分に向けられた分かりやすい好意だ。それを悪いと思うはずが無い。

しばし、料理が来るまでそんなお喋りを楽しんだ。

料理が来て話が一旦途切れたので、いつ切り出すか悩んでいた松平のことについて、相談にのってもらうことを決心した。せっかくの食事の時間で申し訳ないが、少し相談事に時間を貰おう。

「サナ、急ですまないが相談がある」

突然の頼みにも関わらずサナは快く受け入れてくれた。

「うん、いつくるかなー？　って待ってたよ。龍ちゃん今日は松平さんの所に行ったから、きっとそのことだよね？」

サナの言った通りだったので、頷いて正解だ。と返す。

「少し松平が人間不信気味でな。何というか彼が特殊すぎるせいなんだが」

彼女なら言いふらすことはしないので、今日の松平との話を説明する。

「そっかー。何か少し前から無理してる気がしてたんだけど、そんな事情があったんだね」

「どうにかしてやりたいとは思っているんだが、なかなか解決策が思いつかなくてね。サナの力が借りたい」
頭を下げて頼むと、サナの方が慌てて頭を上げるように言ってきた。
「もう、龍ちゃんの頼みならそこまでしなくても断らないよ？　それに松平さんのためだしね。そうだなぁ、んじゃいくつか確認しながら考えてみよっか」
本当にこの子には助けられる。
「きっとそういうスパイの人たちって段々と親密になっていくもんだよね？」
「過程はともかく、親密になって秘密を聞き出すのが基本的な手口だな」
「それじゃあ、最初の接触はどうするんだろ？」
スパイと情報源との最初の接点か。
「うーん、あいつはパーティに参加する奴じゃないしな」
「学会とかシンポジウムとかには参加してるって聞いたことあるから、それじゃないかな。それだったら、同じ研究をしているんですよ。って感じで話しかけやすくない？」
それだと確かに同じ思考を持つ人間として偽れるから、近づきやすいか。
「なるほど。確かにあってもおかしくはない。基本的に学会やシンポジウムはオープンな物が多いからな」
「でしょ？　となると、多分松平さんはそういう所で新しい出会いを求めちゃうと、その気持ちにつけ込まれるってことだね」
そう。だからこそ、彼が特殊な妄言癖を身につけてしまった。
「となるとさ、すごく簡単な答えになっちゃうんだけど、良い？」
何か思いついたのだろうか？　少し心配そうな顔をしているが大丈夫だ。今は少しでも解決策のヒントが欲しい。
「かまわない。教えてくれ」
「うんとね、私達が自分のよく知っている人を紹介すれば良いと思

うんだ」
少しぽかんとしてしまった。あぁ、なるほど。そんな簡単なことで良かったのか。
「相談して良かった。ありがとう」
思わず頭を下げてしまった。
「え？　こんなんで本当に良いの？　龍ちゃんなら思いついてる。って思ったよ」
少し驚いたように手をぱたぱた振っている。そう、こんなのできっと良いはずだ。完全に素の状態まで侵し始めた彼の特殊性癖に合わせられるかどうかは別にして、少なくとも私達の知り合いでスパイをやっている人間はいない。
というか、いたら国家の国防上大問題だ。あぁ、何でこんなことに気付かなかったのだろう。
「ちょっと気合い入れすぎて考え過ぎちゃったのかな？」
恥ずかしいことにまさにその言葉の通りだった。
私は近づいて来る人間を手当たり次第に嘘発見器で検証していくとか考えていたのだ。
「残念ながら、そうみたいだ。軍の作戦指揮官が聞いてあきれるな」
自嘲気味に笑いながら答えると、逆にはにかんだ笑顔を返された。
「大丈夫。だってちゃんと自分では分からないから私に相談したんでしょ？　指揮官だって人間だもん。分からないことはあるよ。大事なのは分からないことを、分からないまま進めるんじゃなくて、誰かに相談してでも物事を解決しようとすることだよ。ね？」
そしてはにかんだ笑顔のまま頭を撫でられる。それに対して、また頬をかく癖が出てしまった。
そんな私の様子にクスクスと笑いながら、サナが今回の相談に評価を下してくれた。
「大変よく出来ました。松平さんのためにもがんばろうね龍ちゃん」
やっぱり君と一緒にいれて良かった。2年前の私よ。良く勇気をふりしぼって告白した。

続けて出された食事も絶品で、最終電車の時刻まで楽しいお喋りの時間が続いた。
終電のために9時頃に店を出たのだが、この時間になってもトラックが走っている。随分遅くまでご苦労様だ。
「気のせいかも知れないが、大型トラックがかなり走ってないか？」
「そうだね。ここ数ヶ月本当に多いよ。市内も郊外も凄い勢いで工事してるね。場所がなさ過ぎて山も掘り出したとか。ただ、たまーに何か変な感じがするんだ。何が変なのかはよく分からないんだけど」
どういうことだろうか？　彼女は何を感じ取っているのだろう？
「ごめん。そんな心配そうな顔しないで。気のせいかも知れないし。ほら、同じトラックでも車種とか積んでるもので音変わっちゃうし、石油が動力源なのもかなり少ないけど走ってるしね。何が変なのか分かったらすぐ伝えるよ」
「分かった。何か分かったら頼むよ」
店から地下リニアの改札口までの道のりはお互い無言で歩いていった。
言葉がなくても分かることがあるというと、カッコつけすぎだが、お互いに口を閉ざしているのには理由がある。
次の日も互いに別の遠い所で、仕事がある。その仕事に支障をきたしてまで、もうちょっと一緒にいたい。と言うのは大人として良くない。
それに私も責任ある立場の人間だ。部下に示しをつけなくてはならない。
だからこそ、お喋りはしない。お喋りは確かに楽しいが、時間が過ぎるのが早過ぎる。
無言で体感時間を引き延ばして、少しでも一緒にいる感覚を楽しむのだ。
サナの方もそれを分かってくれている。本当に気の利く子だ。
ただ、それでも別れの時間はやってきて、改札口で別れの挨拶を

する。
「また、こっちに来るときは連絡する」
「うん、待ってるよ。おやすみ」
「おやすみ」
繋いだ手を離して改札口を通る。
きっと見えなくなるまで立っているんだろうなと思って、ホームに通じる階段を降りる前に振り返ってみると。
「いない……まぁ良いか」
ため息をつこうとした瞬間に柱の影からひょっこり現れて手を振ってきた。
どっきりに成功したと思っているのだろうか、楽しそうな笑顔で笑っている。
「やっぱりかなわないなぁ」
最後に素敵な悪戯をされて、私のミヤト出張は終わった。

第九章「訓練生卒業」

第九章「訓練生卒業」

翌日、菱田重工からの納品予定書の確認をとっていたら宮野大将から極秘回線を使った通信が入った。
「おう！　坂本元気にやってるか？」
「相変わらず極秘回線で発せられる挨拶じゃないてすね」
いつものことなので、最近はそこについてはあまり気にならなくなってきたが、他の所に連絡する時はどうしているのだろうかこの人は。
「細かいことは気にするな。で、ここで早速質問だ」
宮野大将が言いたいことは予想出来ているので、こちらから先に言って遮ろうとしたが、少し遅れて同じタイミングで声が被ることになってしまった。
「「松平のところには行ったか？」」「ですよね？」
私が声を被せたことに宮野大将は一瞬驚いて、笑い始めた。
「その調子だと、ちゃんとやれたみたいだな？」
「もちろんですよ。輸送品の偽装も発注書や納品書などの書類も偽造してきました」
もし、昨日行ってなかったら大変なことになっていたな。行かなかったら、どれだけどやされていたことか。
「なんだ。せっかく教育的指導でもしてやろうかと思ったのだが、うまくやりおったか」
嫌みに近いことを言ってはいるが声は嬉しそうだ。
こちらも自慢気味に精一杯の演技がかった声で攻撃をする。
「ふふ、男子三日会わざれば刮目してみよ。って所でしょうかね」
「言うようになったな。まだケツの青いひよっこ大佐め」
その反撃に冗談のカウンターを合わせる。今日こそは負けません

よ。
「ケツが青くてひよっこでも、あなたの弟子ですからね。そこらの親鳥くらいは軽く超えていますよ？」
「フハハハ、本当に言うようになったな。まっ、後はそれをちゃんと他のお偉いさんの前で言えれば一人前だ。ではそろそろ本題に入るか」
いつも通りの宮野大将との愉快な問答が終わり、本気になった声で本題に入る。
「で、今回はどんな悪いニュースを持ってきたんですか？」
わざわざ極秘回線を使っているんだ。基本的に悪いニュースのやりとりが多い。ごくまれにからかうためだけに使われることもあるんだが……さすがに国境資源会議が近い緊迫した時にそんなことをする人では無い。
「悪いニュースとは断定出来ないが、多分悪いニュースになるかもしれん」
いつもの歯切れの良さが無い。まだ確定していない情報なのだろうか。
「諜報部からの知らせだが、廃棄予定で放置されている大型艦船が行方不明になっている事件を知っているか？　1年ほど前から何度かあったが、最近増えているらしいぞ」
全く聞いたことが無い。素直にここは話を聞きだすことにする。
「いえ、初耳です。廃棄されるような艦船が行方不明になることが問題になるのですか？　資源回収が出来なくて困るという話ではないですよね？」
「もちろんだ。ちなみに廃棄艦船が行方不明になっている事件は我が国では無いぞ？　ヤポネから海を隔てて東の方にある石油産出国の数カ国だ」
そんなことになっているとは知らなかった。しかし、石油産出国となると少しきな臭くなってきた。
「なるほど。ヤポネを標的とした多くの団体が潜んでいる所ですか。

確かにそれは悪いニュースかもしれませんね」
「ただな、分からないのが無くなっているのが軍艦ではなく、大型のタンカーや旅客船なのだよ。潜入中の工作員によると、廃棄にも金がかかるから、無くなったことに対しては元所有者達も大喜びしているそうだ。だが、どうにも変だと思わないか？」
廃棄艦船を資源として各部品をばらして販売すれば、そこそこの活動資金にはなるのだが、心配しているのはそれではないだろう。
「戦闘力自体はない艦船ばかりですね。共通しているのは……先ほどからの説明だと大きいということだけですか？」
「その通りだ。小型艦船には手がつけられていないらしい。多少の札束になるとは言え、大金に手を出して小金は取らない連中という訳ではあるまい？　むしろ金目当てなら盗みやすい小型艦船の方が安全なはずだ。わざわざ大型の艦船を盗めば、それだけ目立ちやすくなる。何か臭う気がするんだが……」
なるほど。宮野大将の歯切れが悪い訳だ。事件を解くための情報が足りていない。
「確かに悪いニュースといえば悪いニュースですが、これではどうすれば良いか分からないですね。宮野大将が言うように何か裏がありそうと言えばありそうですが」
「だから言ったろ？　断定ができんとな。だからこそだ、頭の隅にしっかり置いておけ。こういう時期だ。警戒し過ぎてし過ぎることはない」
宮野大将の言う通りだ。寡兵で勝利するには相手の油断を突かなくてはならない。
少数の敵でも、全く意識してない方法で攻められると、対処までに時間がかかり、甚大な被害を受けてしまうことが十分にありえる。
まして、それが大部隊なら尚更だ。
「了解しました。情報感謝します」
「こっちでも色々調べておくが、何か思いついたらすぐに連絡しろ。こんなもんの予測は当たらない方が良いんだがな。矛盾しているか

もしれんが、我が輩や君の考えが、外れることを期待しているよ」
宮野大将の少し不安な声というのも珍しい。それだけ困惑しているのだろう。
「んじゃ、通信終了だ。またな」
「失礼します」
宮野大将との通信も終わり、書類仕事の続きを片付けることにする。午後に菱田重工からの第一便が到着するはずだ。今日は迂回路でやってきた第二世代型の試験用装備なので、オヤジさんを始め整備班は大変だろう。
時計を見ると１０時３０分を表示していた。予定を見るとこの日は候補生達の基礎戦略行動が１１時から入っている。
大層な名前がついているが、実際のところは指揮官の命令に合わせて動くことが出来るかの訓練だ。
非常に基礎的な物だが、他の基地に引き渡す卒業前に、どうしても確認しなくてはならない。
そんな基礎も出来ないのであれば、せっかく育てたパイロットが犬死にしてしまうからだ。
後退すべきに後退し、前進すべきに前進する。
指揮による前進の結果、部下が死ぬこともあるだろう。ただ、それがしっかりとした作戦ならば犬死にではない。残念ながら名誉の戦死というしかない。
しかし、作戦の流れに反して死なれてしまっては、まさしく犬死にだ。勝利のために立てられた計略全てが無意味な物となってしまう。
だからこそ、この基礎的な訓練が最後にある。
死んだ理由を彼らのせいにしないためにも。いや、死なせないためにも、パイロット候補生達の教育を担っている一人として、指揮官の一人として、今日の訓練も手を抜くことは許されない。
気合いを入れて最後の訓練を行うためにガレージに赴く。

少し早めにガレージに着くと田口軍曹が既に待っていた。互いに敬礼をして挨拶をすませる。
「田口軍曹、今日で候補生達の訓練も最後か」
「肯定です。来月の頭には異動先が決まるのですよね？」
「そうだ。今日は３月２０日か。早いものだな」
一年に及ぶパイロット訓練が終わる。訓練のある日は賑やかだったガレージも次の候補生が入ってくるまで、少し静かになりそうだ。
「寂しくなるな軍曹」
「そうですね。ですが、それよりも嬉しさの方が強いです。彼らは立派に育ってくれました」
少し鼻声になっているように聞こえた。これは後で泣き出すかもしれない。
「軍曹、私が小学校・中学校の頃、何故卒業式で教師は泣くのだろう？　と不思議に思ったことがあるの　だが、君を見ていてその疑問が解決しそうだ。君は実に良い教官だと思う」
訓練過程の終了通知がなされる時に、我慢しないで泣いても良いように、先に予防線を張っておく。
そんな私の予防線に軍曹は照れた笑いを返してくれている。
やはり少しでも命を落とす可能性のある戦場よりも、教官として活躍してもらいたいと思う。彼にはもっと多くの者を育てて欲しい。以前考えていたことを今伝えるか。
「田口軍曹。前線に出るパイロットを止めて、本格的に教官としてやっていかないか？　君にはこれからも若いパイロットを育てていって欲しい」
「ほ……本気でおっしゃっていますか？」
驚きのあまり上手く舌が回っていないし、軍曹が目を丸くしてこちらを見ている。相当驚いているようだ。
「本気だ。先ほどの言葉も含めて全て私の本心だ。引き受けてくれないか？」
田口軍曹は少し考え込むように腕を組んで下を向いてしまった。

私も田口軍曹の決断に息をのむ。
「分かりました。私でよろしければ、これから先も私の持てる全てを次の世代に伝えていきます」
「助かる。ありがとう」
お礼の意味を込めて手を握る。彼と起こした恋騒ぎの時とは逆の構図だ。
その時と心境が随分違って笑ってしまう。
「では軍曹。暫定教官最後の仕事だ。ともにがんばるとしよう」
「イエッサー」
軍曹からはいつもより気合いの入った返事が返ってきた。

訓練の時間になり、候補生達が集まってきた。田口軍曹の号令で候補生全員が気をつけの体勢から休めの体勢に変わった。
そして、私の合図で最後の訓練が始まる。
「候補生の諸君。今まで一年よく頑張ってきた。なんと今年は候補生５０人全てが脱落せずにこの最終訓練まで残っている。非常に喜ばしいことだ。ただ、最後まで気を抜くな。戦場ではちょっとした気の緩みが命取りだ」
ここで一旦話すのを止めて、大きく息を吸い込み声量を大きくする。
「諸君らが死ぬこと無く、退官する最後の日まで生き延びる力を持っていることを今日！　今ここで！　私に示せ！」
「「サー！　イエッサー！」」
私の挨拶にとても声の大きい揃った良い返事が返ってきた。どうやら心配することは無さそうだ。
「では、軍曹。後は任せたぞ。私は一足先に司令室に向かう」
「了解しました。候補生諸君それぞれの機体に乗り込み合図を待て。よし、行ってこい！」
「サー！　イエッサー！」
田口軍曹の合図により候補生達は各々の機体に向かって走ってい

った。
ガレージを後にして司令室に向かう。田口軍曹にはその間、機体の搭乗時間や準備時間などを計測してもらっている。
司令室に到着すると橘をはじめとするオペレーターの準備が完了しているようだった。こちらも最終確認だ。
「みんな準備は出来ているか？」
「肯定です。いつでもどうぞ」
目を閉じながら、大きく深呼吸をして気持ちを落ち着かせる。
クリアになった頭で、マイクを手に取り声を張り上げる。
「パイロット訓練過程、最終単位、基礎戦略訓練開始。全機出撃！」
地上にあるガレージから候補生達の機体が次々に出てきては飛翔する。
空に上がった機体が、５機１小隊制でそれぞれの小隊ごとに横並びのフォーメーションをとる。
さすがに５０機によるマップスの整列となると壮観だ。
この後みっちり１時間。ひたすら私の号令に従って候補生が分散したり、合流したり、陣形をとることが続いた。
長い時間をかけても彼らの行動精度はほとんど落ちなかった。本当に今年の新人は良いのが育った。
田口軍曹が持ってきた待機状態にいたるまでの時間も規定範囲内だった。
判定結果はもちろん合格だ。手元にある候補生達の資料に訓練過程終了の印を押す。この１年、実によく頑張ってくれた。
帰還した候補生全員をホールに呼び出して、訓練課程修了の証明書と資料を手渡し、訓練課程修了の挨拶を行う。
「諸君、１年間の訓練過程をこれにて終了する。今から君たちはマップスの正規パイロットだ。これから多くの困難が君たちを待ち受けているかも知れない」

私の頃とは違って、戦闘時に対マップス戦が多くなっている。一方的な戦闘はほとんど起こりえないだろう。だからこそ、彼らの覚悟を問う必要がある。

「その困難はこの１年間の訓練が可愛く思えてしまうことだろう。だが、忘れるな。君たちはこの国を守る力を手に入れた。君たちの力でその困難を取り除かなければ、力なき君たちの親、兄弟、友、恋人、全ての国民が君たち以上の悲しみを背負うことになる。君たちは彼らを守るためにどんな困難にも立ち向かう覚悟はあるか？」

候補生５０人が一斉に敬礼のポーズを取る

「「サー！　イエッサー！」」

気合いの入った声が部屋に響き渡る。この心構えを忘れないで欲しい。

「良い返事だ！　諸君、おめでとう」

私が拍手をし始めると、教官役であった軍曹も拍手で続いてくれた。顔を見てみると涙が頬を伝っているように見える。

指摘すると「汗です」と返されると予想できるので、あえてつっこまないでおく。

そして、予想した通り感極まって涙を流してしまった軍曹を、新人パイロット達が取り囲みだして胴上げし始めた。何とも体育会系的なノリである。

各々が憎まれ口を叩いてはいるものの、顔と声の調子は笑顔そのものだ。

終わりよければ全て良しか、のど元過ぎればなんとやら。と言ったところだろうか。

そんな野球リーグで優勝したチームのような光景を微笑ましく思いながら眺める。

胴上げが終わると軍曹は袖で涙を拭いて、おそらく彼らの前ではしたことがないであろう満面の笑みを浮かべた。

「よし、お前ら！　今夜は俺のおごりだ！　精一杯楽しむぞ！」

普段見ない顔で、普段発せられるはずの無い言葉が飛び出して、

新人達はポカンとしたが、隣にいる者と確認をとりあってざわざわすると、誰かが叫び出した。
「イヤッホゥ！　今夜は飲みまくるぞ！」
その叫びに続けて一斉に雄叫びが上がり始める。
どうやらこの盛り上がりは当分収まりそうに無い。
後は軍曹に任せて食事でもしてこよう。
これは、今夜は大変なことになりそうだな。と軍曹の無事を祈りながら、独り言を呟いてその場を後にした。

第十章「その男変態につき」（前書き）

今回は新兵器をちらっと紹介します。

第十章「その男変態につき」

第十章「その男変態につき」

最終訓練から5日後、菱田重工からの移送が全て終わった。おかげでヤポネ基地は地下ガレージと地上ガレージが全て埋まってしまっている。

そんなここ数日間の話になる。

ヤポネ基地は今やちょっとした博物館状態だ。軍事マニアがやってきたら狂喜乱舞しそうなカオス空間になっている。

しかも、移送が終わってから連日に渡り、ジャンクパーツを使ってオヤジさんと松平がノリノリで新しい物を作り始めているので余計かさばっている状態だ。

新しい試作品と搬入された物からいくつか取り上げて、どういう時に使えるか考えるために、ここ数日を反芻してみる。

まず一つ目に近接武器御用達の新オプションパーツである回収用ワイヤーだったのだが、回収以外の使い道をオヤジさんと松平が一緒に考案して、銃剣用の接続部分をワイヤーの射出装置に改造することに成功した。

いくつかの試作品を携えて試験したときは近接を得意とするパイロット達が楽しそうにブレードやダガーを射出しては引き戻して遊んでいた。中にはブーメランのように弧を描きながら飛ばして引き戻す者もいる。射程距離はざっと５０ｍ。回収速度は１秒を切るか切らないか。格闘武器の距離では破格で不意打ちにはもってこいだ。

もちろん、近接武器を銃器から外した後も、人間で言えば袖に当たる部分に新しく増設されているワイヤーが収納されている小型の箱、ワイヤーボックスと繋げれば回収機能は維持出来る。

おかげで近接時の戦術の幅が広がった。

楽しそうに近接武器を飛ばしているパイロット達の様子を見て、

調子に乗った二人は、もっと銃器に色々つけようと言い出した。
近接武器の距離延長はやったから、次は最高のゼロ距離武器だ！
とコンセプトを決めて、アイデアを得るために模擬戦のデータを見返すと、近距離時における銃器の鈍器化について討論を始めた。
その結果、何がどう転んだのかはさっぱり分からないのだが、パイルバンカー型の銃剣の試作を始めたのだ。
何故そうなったと2人に聞いたら「男のロマン」と答えられたのでそれ以上言及はしなかった。
一本目はただ杭を打ち込むだけだったのだが、これではつまらない！　と両者が呼応して、ただ単に杭を撃ち込むだけでは無く、炸裂火薬を撃ち込んだところに送り込み、装甲の内側から爆破して敵を破壊する謎の兵器が出来てしまった。
「これぞロマン！」とオヤジさんはご満悦だ。
確かに威力としては素晴らしいのだが、炸裂火薬を仕込んだ特殊杭なので、リロードが必要になり、わざわざ他の銃器の弾丸を削ってまで予備弾薬を大量に所持する必要は無いと判断する者も現れ、基地のパイロット達からは賛否両論だった。
これに対しては改善の余地有りと2人は今日も研究をしている。
逆にみんな困惑したのがハイブリッドライフル開発コード：「ブリューナク」。稲妻のような槍。開発コードの由来はその威力と弾丸の見た目からだそうだ。
以前この基地で試験した化け物ライフルだ。銃の全長はマップスより大きい6m。普段は銃身が3段階に折りたたまれて長さは3mほどだ。何とか肩のハードポイントにつけることが出来るが、大きすぎて照準を安定させるために両手を使わなくてはならない。
展開すると形は歩兵が使っていた対物ライフルのような造形をしている。
折りたたんでいるときは、1段目にグリップがあり手に持つ部分。
2段目に、やたら大きい2mくらいある拳銃のシリンダー（回転式弾倉）のような物が弾倉の上についている部分。

一体何なのかと聞いたら、粒子コンデンサーと答えられた。ちなみにコンデンサーの癖に回転する。その形と様子からリボルバーとその部分は呼ばれているそうだ。

３段目に銃身部分（バレル）が折りたたまれている。３mとちょっと長い。

一応ライフルの形をしてはいるが規格外だ。

そして、何より驚くのが外付けのジェネレーターが必要なこと。

ちなみにこの外付けジェネレーターが採用される前の試験段階では、チャージ時に他の行動が出来なくなるほどのエネルギーが持って行かれた。

その欠点を払拭するために専用の外付けのジェネレーターを開発したそうだ。

おかげである程度動くことは出来るようになったが、あくまで動けるだけだ。

接地して止まらない限り、浮遊装甲や粒子シールドを展開できるほどの余裕が無い。

どうやら専用ジェネレーターの供給量以上に粒子を必要とし、本体のジェネレーターからも粒子をとるらしい。恐ろしい燃費だ。

燃費の悪さに隠れて見落としてはいけないのが、何と専用の弾丸を使わないといけないこと。通常弾頭だと弾が特殊な処理に耐えられないそうだ。おかげで運用コストもバカみたいに高い。

味方に敵からの防御をしてもらって、長々としたチャージの末にようやく一発の弾丸が発射出来る。これだけ言うとただの欠陥兵器だ。

ただし、威力だけはどんな兵器よりも高いことは試験で試し撃ちをして見ている。

推奨火力で発射した時は試験用の装甲板が何枚も吹き飛ばされて、溶けた。その時は空中に向けて発射したので何も無かったが、水平に撃っていたらどうなっていたか想像もしたくない。事前に説明で注意しろ。と言われたときは疑問に思ったが、撃たれた結果を見て納得した。

マップスにぶつければ、おそらく浮遊装甲を展開していても吹き飛ばされる威力だ。
防ぐ方法は弾丸を浮遊装甲に当てて出来る一瞬の停滞時間に全速で射線から大きく逃げること。
ただし、そんな動きはこの武器の特徴を知らない普通のパイロットには出来ない。
弾丸が光っていて大きく見えることくらいしか、ロングレンジライフルの弾丸と見た目は大きく変わらないのに、その一瞬の輝きで防御を捨てる判断を出来る人間がいるとは思えないのだ。
当たりさえすれば、相手に防がれようが直撃しようが撃墜出来る威力である。
逆に言えば当たらなければ全く意味が無いどころか、非常に不利な状況で戦わなくてはならない。
そんな当たりさえすれば、最強の遠距離武器という非常にロマンあふれた武器になっている。
現存しているのは、このヤポネ基地に運ばれた3丁と首都にある菱田重工の工場で保管している2丁の計5丁だそうだ。サイズが大きすぎて運びきれなかったらしい。
正直言おう。使い所が本当に分からない。旧式兵器にはもちろんマップスに対しても過剰火力だ。
しかも、高速で移動できる機体を正確に直撃させる腕が必要だ。
このライフルが何を目的に採用されるのか松平に聞くと。
「一つは、まだ見ぬ新兵器に対する万が一のための保険だね」
と答えられた。以前言っていた大型兵器用ということか？
まだ実際に見たことがないので想像がしにくい。
ただ、もう一つは耳打ちで小さな声で伝えられた。
「もう一つは敵基地の破壊。何というか、えぐれるよ？」
何か恐ろしい単語を口走った。
いや、確かに施設への攻撃なら動かないから当たりやすいが、表現がおかしい。爆破とかではなく、えぐれる？

「一応あれリミッターかけてあるからね？　本気出したらそれくらいしちゃえるかも。理論上だから実際にやったことは無いんだけどね」
ニコニコしながらとんでもないことを口にしてきた。
リミッターありで今の過剰火力だと？　冗談だろ？　いや、松平は兵器に関して不思議な例えをするが、冗談をいう人間では無い。本気だ。
というかこれは攻城兵器だった訳か。ようやく納得が行った。
そして最後にもう一つと付け加えられた。
この自慢げな顔をされたら言うことは大体予想がついてしまう。
「僕の趣味。ロマン武器作ってみたかったんだよね．チャージから射撃までの発射シーケンスって最高に燃えない？」
やっぱりか。松平らしくて非常に分かりやすい理由だ。マップスが人型になった理由を思い出して苦笑いする。ただ、彼の作った物は思わぬところで役に立つことになるかもしれないので、絶対にバカにしない。
攻城兵器以外の役割で、私はこのハイブリッドライフルの使い道に悩んでいたのだが、この基地に所属するパイロット2名が何故か興味を持ってしまった。
ガンドック5の石山と、めでたく新人パイロットとなり、キーナ基地に配属が決まった元クロスボウ1の武田だ。
その破壊力とコンセプトにどうやら二人とも魅せられたらしい。2人に言わせると、この極限まで一撃にかける感じがたまらないそうだ。
実機による訓練では、専用弾ではなく、練習用のペイント弾による発射までの間隔と弾道の感覚を掴む練習をしている。
シミュレーターでは松平にデータを作って貰って、小隊メンバーを巻き込みながら、発射までの護衛などの特別訓練を始めるくらいはまっている。
シミュレーターに付き合った小隊長の犬塚に、小隊での使い勝手

を聞いたら、あそこまで緊張する武器はありません。と答えられた。
私も自分の部隊にあれを使う奴がいると考えると頼もしい反面、すごく恐ろしい。
防御力も回避能力も最低まで下がった味方を守るのは非常に骨が折れるし、何よりも撃墜されてしまうのではないか？　というプレッシャーが凄いだろう。
そして何よりもその効果範囲。チャージ方法にもよるが、ちょっと洒落にならない。下手に射線に近づくと巻き込まれる。
ただ、道具というのは使い方次第だ。常に頭の中の選択肢として残しておこう。
自分が使える。という部下が二人もいるのだ。ならそれを活用する方法を考えるのが私の仕事でもある。
ちなみに、このスナイパー二人が松平に感謝した言葉は何だったと思う？
使うと言った二人にはこのハイブリッドライフルの最後の開発理由は伝えてある。
人によっては悪口だが、ある意味最大のほめ言葉。
「「ありがとう変態！」」
その時の松平は少し泣きそうな顔で笑っていた。
「まいったなぁ……褒められてるのかなこれ？　どういたしまして？」
その声は少し嬉しそうだった。

第十一章「ハガネの指揮官」

第十一章「ハガネの指揮官」

４月２５日。特に大きな事故や事件もなく、ついに国境資源会議の前日となった。

今日は警備に向かうパイロット達に対して最終確認をするために、ブリーフィングを行う予定になっている。

今回の警備に当たって貰うのはＡＷＡＣＳのホークアイとガンドック小隊。そして新編成されたライン小隊だ。

ライン小隊は武田を隊長機とした新人が集まった小隊だ。

遠距離攻撃の技術が重要な作戦となるので、基地内にいるスナイパー全員に競技をしてもらったところ、新人の連中がかなり上位に来たので、今回は特例ながらも参加してもらうことになったのだ。

ブリーフィングルームに入ると既に全員が待機していた。

全員の出席を確認し、私は首都の俯瞰図をモニターに表示しながら説明を開始した。

「では、作戦を説明する。今回の作戦は首都ミヤトの警備、及び緊急時における護衛と遊撃だ。何もなく事が進めば、君達は上空５ｋｍで指定されたこの範囲を巡回するだけだ。まずはここまで、何か質問は？」

一旦ここで切って何事も無かった場合の質問を受け付ける。

次からが本題なので余計な質問は早々に除去しておきたいのだ。

数秒待っても手が上がらないので、特に何も無いと判断し、次の説明に移る。

「次に、緊急時の説明に移る。想定される敵は、反ヤポネのテロリスト集団だ。目的は恐らく両首相を捕らえて、様々な経済的もしくは政治的な交渉を有利に進めることだろう。最悪のケースはただ破壊を目的にすることだな。そこで、我々の仕事はテロリストの制圧

と首脳の護衛だ。特に戦闘車両やマップスといった兵器に対する対処がメインとなる。敵の目的が前者だった場合は、首脳を失った瞬間にゲームオーバーだ。必ず生かして待避ポイントまで護衛しろ」

そして、市街戦だからこその条件を説明しなくてはならない。

警備打ち合わせで決定した交戦規定だ。

「緊急時には周辺の市民の待避が済むまで戦闘行動が制限される。制限内容は、こちらからの攻撃は敵の真上からの狙撃のみ許可される。ということだ。彼我の射線に建築物があってはならない。およそ、１０分程度で市民の避難が完了すると想定されるが、その後も出来る限り、都市に被害を出さないように戦闘して欲しい。また、避難が済んでいない地区での首脳護衛は非常に難しい局面となる。確実に攻撃を防ぎ、確実に攻撃を当てて敵を撃破しろ。交戦規定について何か質問はあるか？」

犬塚と武田の両小隊長が手を挙げた。先に犬塚を指名し質問を出してもらう。

「敵部隊が空中戦をしかけて来るときはどうなるのでしょうか？」

警察庁長官と同じ事を聞かれたな。いい質問だ。

「常に敵の上に位置するよう回避と防御を優先しろ。発砲は許さないが、上方からの格闘攻撃は許可する」

海軍が引きつけてくれているとはいえ、空中戦の可能性はゼロではないのだ。これが、近接攻撃が得意なガンドック小隊を派遣する理由である。

「了解しました」

説明に納得してもらえたようなので、続いて武田の質問を出してもらった。

「想定される敵の数はどうなっていますか？」

随分と困る質問だ。正直なところ全く予想がついていない。

「残念ながら分からない。ＡＷＡＣＳがついているとは言え、いつ、どこで、どれくらいが、どのように、動かれるか分からない状態だ。よって基本的にサーチ＆デストロイとなる。こちらでも注意するが、

奇襲をはじめとする罠が張られていると常に心がけておけ」
「了解です」
今の質疑応答でまた新たに質問が出るか待ってみたが、続けての質問は来なかった。
「次に諸君の役割分担について再確認だ。ホークアイは最高高度で常に情報を収集し、全軍に送り続けてくれ。次にガンドック小隊はガンドック5による狙撃を攻撃の主軸とし、他4機で全体の援護。そして空中戦での近接攻撃を主に担当してもらう。最後にライン小隊はライン1とライン3が狙撃を担当。他3機は浮遊装甲で敵の攻撃を防いでほしい。これについて何か質問は？」
……特には無いようだ。皆自分の役割が分かっていてくれて大変ありがたい。
「武装については対マップス用の装備だ。菱田重工の松平技術顧問と整備主任が製作した武器のオプションは各自で判断しろ」
皆の反応を見ると少しだけ武田が残念そうな顔をしている。市街地でハイブリッドライフルは禁止だ。威力が強過ぎて被害を出しかねない。
「では、解散。各員オーカシス基地へ向かい。ゆっくり休んで明日に備えろ」
首都まで結構距離があるので、明日の早朝から警備をすることになるとキーナ基地からは間に合わないため、徳川大佐に派遣部隊の受け入れを申請してある。
次に彼らと直接顔を合わせるのは会議後だ。
「「イエッサー！」」
「よし、行ってこい！」
私は緊張感に満ちた隊員を見送り、一旦執務室に戻った。
執務室に戻ると、緊急という留守録が残っていた。
宮野大将から秘密回線による通信の準備をしろ。と残されている。
こちらの準備が出来たことを通常回線で知らせると、今回は何故

かサナも参加することを伝えられていた。
宮野大将とは何度か各国の事件について意見交換をしあったが、何か情報解析班の方で掴んだのだろうか？
通常回線を切るとほぼ同時に、秘密回線による通信がこちらに入って来た。
一つは宮野大将から、そしてもう一つ情報部からも来ている。これは恐らくサナだ。
「すまんな坂本。今日は楽しいお喋りは無しだ。まずいことになったぞ」
珍しく焦った声をしている。一体何があったのだろうか？
「まさか既にテロリストが現れたとかですか？」
「それに近い。澄川君説明してやれ」
「坂本大佐。以前お伝えした違和感が判明しました。土砂が積まれていたトラックの音が普段より重かったのです。恐らく何か大きい重い物を運んでいたと推測されます」
悪いことしか連想出来ない単語が並べられた。
「まさかとは思いますが、その中に何かしらの兵器が隠されていた。ということですか？」
当たって欲しくない想像ほどよく当たるようだ。宮野大将が重い口振りで肯定した。
「そう我が輩も考えている。先程の澄川君の話を聞いて、急いで郊外に設けてある埋め立て用土砂置き場の確認に向かわせたところ、監視員からある日突然山が小さくなった報告を受けたそうだ。その時はどこかの業者が勝手に持ち出したと思ったそうだが、その後持ち出し報告は来なかったらしい。現在、他の連中にも協力してもらって、潜伏先を探索している最中だが、明日までに見つけられるかは分からん。明日は荒れるぞ」
「すみません。ここ一ヶ月間、違和感のある音が聞けなかったので、てっきり私の勘違いだと思っていたのですが、逆にそれがヒントになってようやく違和感の正体が掴めたのです」

彼女が感じていた違和感の話を聞いたのは1ヶ月前だ。そうなると、かなり長い間潜伏されていることになってしまう。
つまり綿密な計画で動かれている可能性があるということだ。
「いや、澄川さんが責任を感じる必要は無い。宮野大将、こうなると例の艦船の事件も関わりがあると思いませんか？」
予め計画をテロリスト達が立てているということは、彼らの拠点にあった艦船を使って、何かを仕掛けてくる可能性がぐっと上がることになる。
「君が以前話したものか。海岸沿いに配備されている部隊が首都に向かえないようにするためのデコイ。確かに不審物を放っておいて損害を受けてしまう訳にはいかないからな。ある程度の時間稼ぎは出来るだろうが……。む？　どうした？　今通信中だ」
どうやら部屋に誰かが入ってきたらしい。声は落ち着いているので部下のようだが、どうしたのだろうか？
通信機越しに部下の報告に驚いている宮野大将の声が聞こえる。恐らく何か良くないニュースが舞い込んできている。
「宮野大将どうなされました？」
「どうしたもこうしたも、訳がわからん。行方不明の大型艦船の一部がレトリア連邦で発見されたそうだ」
東部石油産出国で失われた大型艦船が、軍事大国のレトリア連邦で確認された？　何か特殊な改造でも受けているのか？
「宮野大将、その艦船は何か改造された様子はありますか？」
「わからん。ただ、外観には変化が無いようだな。クソ、資源会議直前で次から次へと面倒ごとが増えるとは」
「お二人とも落ち着いてください。とりあえず今は、存在が明らかなテロリストの対策を考えてみてはいかがでしょうか？」
サナからの提案で突然の知らせに、飛んでいた思考が一気に引き戻される。
落ち着いて頭を整理しよう。サナの言っていた違和感とは何だった？

「澄川さん、もう一度確認を取らせてくれ。確か君の感じ取った違和感というのは土砂じゃ無い何かが、土砂として運ばれていた。ということで間違いないか？」
「はい、その通りです」
よし、となると多分そこは間違いなく何かの兵器を運んでいることになる。
「次にお二方に確認を取りますが、ここ数ヶ月の間はトラックをはじめとする大型車両や重機が多くなかったですか？」
「そうだな。言われてみれば多かった気がする」
「多かったです」
それは一日行った私も感じ取ったことでもある。そして今二人とも実感があるということはだ。
「となると、一度埋めた兵器を、事業者に紛れ込んで、物資や兵器の運搬をしているとは考えられませんか？　ここ最近、首都圏内で開発された大型施設もしくは巨大倉庫や工場というのはありませんか？」
「ふむ、そういうことか」
どうやら宮野大将に私の考えは伝わったらしい。
「建築業者や運搬業者を装って、搬入を自然に行える先がそのリストで、そこの施設に兵器やテロリストを潜伏させている。こういうことだな？」
「はい、その通りです。確か最近は建築ラッシュ。労働力が安い外国人を違法で雇う企業が現れても不思議では無いかと」
宮野大将がうなり始めた。恐らくこの考えを吟味しているところだろう。
「なるほど。当てずっぽうよりマシか。他への連絡は我が輩からしておく。艦船の方だが、これは海軍の方に再度警戒するように通達するくらいしか出来ないな。後は任せておけ」
「了解しました」
「情報解析班の方でも何か分かり次第連絡します」

この通信が切れたらすぐに派遣した2小隊に連絡を入れよう。
明日は戦闘になる可能性が非常に高くなってしまった。指揮官になって初めての実戦となるかもしれない。
正直怖い物がある。パイロットとして初めて戦場に向かった時とはまた違う怖さだ。
「では、お互い何かあれば、すぐ連絡を入れて貰うぞ。通信終了だ」
「「了解しました。失礼します」」
応答で少し声が震えてしまったかもしれない。サナの声と被ったので恐らく宮野大将には聞こえてないだろうが、まさか怖さで声が震えてしまうとは思わなかった。
サナの通信はそこで切れたのだが、宮野大将の咳払いが聞こえる。
そして、宮野大将が優しいような厳しいような声で喋り始めた。
「坂本。今のお前はあくまで指揮官だ。パイロットで小隊長じゃないからな？　自分の出来ることは限られてくる。お前は戦闘中の部下達にライフルで援護射撃や、浮遊装甲で防御するといった直接の助けをしてやることは出来ない。ただ、代わりにだ。その頭を使って上手くやれば、部隊全員を死地から生きて返してやることも出来る。お前はこの先、敵を多く撃墜するエースパイロットという英雄にはなれん。どれだけ敵を倒したかよりも、どれだけ部下を生きて帰してやれるかが私達指揮官の能力だ。それを忘れるな」
ビビッていたのがばれていたようで、発破をかけられてしまった。
思わぬ励ましに感謝して胸が熱くなるのを感じる。
「肝に銘じておきます」
「うむ、では今度こそ失礼する」
その言葉の通り、今度こそ通信が両者とも切れた。
通信が終わり、頭の中で都市部における様々な奇襲方法の想定をしながら、司令塔に向かう。
派遣した小隊に先ほどのテロリストが潜伏している情報と対策の連絡を入れるためだ。
頭の中が焦りで混乱しかけたころに、携帯端末に着信が入った。

表示を確認するとサナからだった。
「どうした？　また何か分かったのか？」
「ううん、そうじゃないんだけど、何か不安そうだったから大丈夫かな？　って」
やれやれ、私も自覚があったとは言え、宮野大将も、サナも良く気づくよなぁ……。この二人には隠し事は永遠に出来そうに無い。
「初めての実戦になるからな。正直少し怖い」
「ごめんね。私がもうちょっと早く気付いてれば、こんなギリギリで焦ることは無かったんだけど」
少ししょんぼりとした声で反省の言葉が告げられた。
確かに気付くのに時間がかかったが、自分を責めて欲しくない。
情報というのは戦いにおいて重要な要素だ。
彼女の情報が無ければ、予想外の攻撃で大変な被害を受ける可能性もあった。
今ならまだ準備が出来る。
「さっきも言ったがサナのせいじゃない。むしろ良くちゃんと気付いてくれた。少しの時間でも準備が出来るんだ。その時間で宮野大将が言ったように、頭を使って何とかするさ」
これ以上不安を増やさないように、心配させないように精一杯明るい声で話す。
「ありがとう。やっぱり龍ちゃんは優しいね」
どうしようか？　この非常事態に顔が熱くなっている。
「無理しちゃ駄目だよ？　今夜は早く寝ること。居眠りしながらの指揮は厳禁だからね？」
まったく……前と違って今の私はそんなにサボってないぞ？
緊張していた頭が一気にゆるんで、少しスッとした気がする。
「分かってるよ。夜にまたいつも通り電話してくれ。その時にまた今のを頼むよ」
心の中で続きを呟く。
……多分、緊張して眠れないからな。

そのつぶやきに気付いたかどうかは分からないが、いつものように楽しそうに笑われた。
「あはは、仕方ないなぁ。分かった。ちゃんと連絡するね」
声には出さないが、おかげで頭が落ち着いた。ありがとう。と感謝をする。
その後、派遣した部隊に明日は戦闘になると連絡を入れた。
更に、徳川大佐と毛利大佐、そして警察庁長官に通信を繋げ、お互いの連携の確認もしあい、奇襲に備えての動きを再確認した。
さすが歴戦の指揮官達だけあって落ち着いて対策を再検討していく。
基本的には打ち合わせ通りだったが、市内に歩兵を潜伏させ、市内の警備を強化することで同意した。

その後は、テロリストの捜索の続報を夜まで待ったが、一歩遅かったようで、どうやら各地の大型施設は既にもぬけの殻だったようだ。
何者かが生活した痕跡はあったのだが、テロリストは発見出来なかったそうだ。
戦闘が起きずに済めばと祈っていたが、残念ながら、潜伏しているテロリストとは当日に戦闘する事になりそうだ。
そして、その予想通り、私は第二世代型マップス開発コード：ハガネで編成された部隊の指揮官として、初めて戦うことになる。

サナから早く寝るように。と短い電話をし終えてベッドで横になりながら考え事をする。
しかし、分からない。一体どうやってテロリストは潜伏させ部隊を消した？
何かを見落としているのか。それとも、地下で見つけた生活痕が偽装で、そういった施設から目をそらせるためか……。
そんな答えの出ない考え事をしながら私は眠りに落ちた。

第十二章「国境資源会議開幕」

第十二章「国境資源会議開幕」

朝６時に目が覚めて、いつものように顔を洗い、軽い朝食をとる。

コーヒーを入れて、端末を立ち上げる。

おはようございます。と機械音声が流れ、カレンダーに記載されている今日の予定を確認する。

４月２６日

・全日……国境資源会議警備指揮

・全日……領空侵犯の警戒

「ついにこの日が来たか」

軍事大国レトリア連邦との国境資源会議の日だ。

ニュースサイトはもちろん国境資源会議がトップニュースだ。

様々な関連コラムが書かれており、ニュースサイトの閲覧ランキングの上位には多くの関連記事が載っている。

そして、いつも通りのスポーツや芸能記事も続いて並んでいる。

恐らく、今日から数日間ニュースがとあるもので一色になるだろう。

それは残念ながら、変えられそうにない。

ならばだ、せめてその色を絶望感溢れるものでなくすだけだ。

「よし、司令塔に向かうか」

コーヒーを一気に飲み干し、端末を落とす。

今日は他のニューストピックを見ている暇は無い。

コーヒーカップを洗い、乾燥棚に置いて、個室を後にした。

７時３０分に司令塔につき、オペレーター達に今回の警備に参加する基地との通信をつなげて貰った。

司令官用の机のモニターに徳川大佐と毛利大佐が映っている。

どちらも私よりも先にスタンバイしていたのか。しまったな。
「おはよう。坂本大佐。昨日はよく眠れたかね？」
毛利大佐から少しドスが効いている声がする。そして、何故か両名の表情が少し怖い。
まだ、規定の時間より早いハズなのだが、どうしたというのか？
とりあえす、落ち着いて対処だ。
「えぇ、皆様が優秀な方ばかりなので、おかげさまで。ところで、何かあったのですか？」
私の返答に対して、何故か徳川大佐はがっくりと肩と頭を落とし、毛利大佐はうんうんと笑顔で頷き始めた。
「私の勝ちだったようだな徳川大佐」
毛利大佐の勝ち？
「くっ、外したか。仕方あるまい君の勝ちだ。今度そちらに向かうよ」
何かの賭け事をしていたようだ。ただ、どういう賭け事をしていたのだろう？　と疑問がわいたので尋ねることにした。
「すみません。話が見えないのですが。何の賭けをしているのですか？」
私の疑問に徳川大佐が落としていた頭をあげて答えてくれた。
「あぁ、すまんすまん。確か君は今回が初めての実戦だろう？　緊張して眠れるか眠れないかの賭けをしていたんだよ」
あぁ、そういうことだったのかと納得すると、毛利大佐が追い討ちをかけ始めた。
「な？　言っただろ？　私の見る目はまだ衰えていない」
「いや、お前が眠れるに賭けたら、選択肢は一つしかないから仕方ないだろう」
「ならば、最初から乗らなければ良いではないか？　それに先程負けを認めたではないか」
「だから、せめてレートを下げてくれ」
ワーワーと五十近い2人が言い争いを始めてしまった。

割って入れる雰囲気では無いので、とりあえず、治まるまで待つことにした。
5分ほど言い争いをした後、2人とも何故かかなりスッキリとした表情となっていた。
一体何が起きているのか？　と疑問に思っていたら、こちらの心境に気付いたのだろう。毛利大佐が先程までのやりとりを説明してくれた。
「おっと、坂本大佐を仲間外れにしてしまったようだ。熱くなりすぎたな徳川大佐」
ハハハ。と2人が笑いあってから、また説明が続けられる。
「先程の賭けと言い争いなら気にするな。ちょっとしたジンクスだ」
今のやりとりが験担ぎだったのか、意外とプライベートでは愉快な人達なのかもしれない。
「毛利大佐。どうせなら坂本大佐にも混ざって、やってもらうというのはいかがかな？」
狐のようにつり上がった毛利大佐の目がキラリと光ったように見えた。
「よし、今度は何を賭けの対象にしようか？」
どうやら私の意志とは関係なく、巻き込まれてしまったらしい。
2人が楽しそうに悩んでいると新たな通信枠が出現した。警察庁長官だ。
咳払いと共に挨拶をされる。
「おはよう。軍の諸君。今日はよろしく頼むよ」
「「ハッ、こちらこそよろしくお願いします」」
2人の声が、さっきまでの冗談めいた口調から一気に固い声の調子に変化した。すごい対応力だと感心してしまう。いや、感心してる場合ではなかった。
私も続いて挨拶を返さねば。
「微力ながらお手伝いさせていただきます」
これで指揮者が全員揃った。これを契機に、各々が自分の部下に

指示を飛ばし、警備体制を整え始める。
「こちらビックハットよりオーカシス基地に待機中の全機へ、準備は出来てるか？」
隊長3人が代表して返事を返してくれた。
「「アフマーティブ」」
いつでも行けそうだ。彼らの表情と声からは、焦りや不安も今のところ感じられない。
「よし、合図が来るまで待機」
空軍の方は準備が完了したと他の指揮官に伝える。
後は、他の3部隊の準備が終わるまで、待つだけだ。
「陸軍、準備完了だ」
「海軍の方も問題ない」
「全部隊準備が済んだようだな」
陸、海、空軍そして、警察による作戦の始まりが警察長官から伝えられる。
「作戦コード、ケルベロス。ミッションスタート！」
参加者達の雄叫びが混ざりあって、まるで窓を激しく叩く大嵐のような音になった。
そして、その轟音とともに全ての部隊が動き始め、私の部隊も指定された空域に向かって移動を開始する。
ちなみに、今回の作戦名は警察庁長官の趣味だ。
陸、海、空という3つの軍という頭が警察という胴にくっついた三首の犬。
言うならば（首都の番犬）と言ったところか。
ただ、やたら物騒な番犬ではある。子供達からの人気は得られそうにない。
打ち合わせで作戦名を決めるときに、長官からこの案が出された時は吹き出すのを堪えるので精一杯だった。
もっと堅苦しい作戦名を言うと思っていたので、５０代中盤の男性にしてはファンタジー過ぎる。と心の中でつっこみを入れていた。

いや、外連味は大事なので悪くない作戦名だと思いますよ長官殿。
打ち合わせの時を思い出して、少し思考が変な方向に飛んでしまった。
そして、予定通りの時刻に、私の部隊が首都ミヤトに近づいているので、旋回の準備をするよう指示を出そう。
「ビックハットよりガンドックおよびライン全機、まずは指定空域の端を時計回りに回ってくれ。ホークアイは予定通り高度を上げて首都中央で旋回だ」
「「了解」」
現在の時刻は０８３０。
ここから先は１秒たりとも気が抜けない。
モニターに映し出される地図を見ながら息をのむ。
ガンドックとライン小隊が旋回行動を始めて３０分後。
敵部隊の出現は確認出来なかったので、予定通り両首脳の移動が始まった。
警察の方から送られてくる映像を見ると、道路を最大限まで使って、公用車の周りをパトカーが最低でも三重に囲んでいる。多いところは五重だ。
そして、上空ではガンドックとラインの二小隊は、公用車との距離が一定になるように旋回を続けている。
「ホークアイ、レーダーに反応はないか？」
「今の所は不審な物は映っていません。粒子反応や熱源レーダーで検知される高エネルギー体は味方機のみです」
「了解した。そのまま観察を続けてくれ」
「イエッサー」
この移動するタイミングでは無いのか？
建物内にいられるよりかはターゲットが狙いやすいし、マップスの護衛も相手から見ては近くにいないので、兵器による奇襲にはもってこいの状況なのだが……。
そんな私の心配をよそに、公用車は順調に会議場に向かっていく。

「なぁ、坂本大佐。先程の続きなんだが、今回の賭けは君が作戦中に混乱に陥って焦るかどうかにしないか？」
軍用の回線を使ってこの状況でとんでもないことを徳川大佐が言い出したので、思わず驚いてしまった。
「徳川大佐この状況で一体何を？！」
「この状況だからこそだ。もちろん君は焦らないに賭けろ。私と毛利大佐は焦るにかける。構わないだろ？」
毛利大佐もいつの間にか軍用回線を使っていて、一時的に警察長官は仲間外れになっている。
「なるほど、その話乗った。坂本大佐、私達との賭けに勝て。好きなもん食わしてやる。かわりに君が負けたら、キーナの最高級料理店を我々二人にごちそうしてもらおう」
全く、この国の将官達は真面目に見えてどこか愉快な頭をしてる。励まし方がひねくれ過ぎだ。それとも照れ屋なだけなのか？
言い争いまでジンクスになっている理由がよく分かったよ。
「分かりました。でも覚悟しといてくださいよ？　2人相手にしてるんです。私が勝ったら2人分おごってもらいますよ」
ワハハと徳川大佐が大笑いを始めた。
「おい、毛利！　上乗せ（レイズ）が来たぞ！」
「だから言っただろ？　私の目に狂いはない。坂本大佐その度胸、実に私好みだ。その上乗せ（レイズ）に乗ってやる！」
ノリノリな2人のベテラン指揮官のおかげで、俄然やる気が増してきた。
あぁ、人の士気ってのはこういうことでも上げられるのか。勉強になる。
「よし、賭けも決まったし秘密のお喋りはここまでだ。カシゴマ基地とキーナ基地のオペレーター諸君、今の話はくれぐれも内密に」
司令室にいる全員が顔を見合わせて苦笑いしている。ただ、2人のおかげで、緊張し過ぎない良い空気になったようだ。
そんな中で深呼吸をして、自分の冷静さを確かめる。

心拍正常、呼吸いつも通り、喉の渇き無し、空腹感無し……。
よし、大丈夫いける。この賭けに負けるわけにはいかない！
覚悟を胸に刻み込み、モニターを見つめ直す。
出だしは非常に順調。
長い長い一日の、長い長い３０分が終わり襲撃を受けやすい移動は無事に終わった。
４月２６日時刻０９３０。ヤポネ、レトリア両首脳、国際会議場に到着。
警察庁長官から通達が入る。
「作戦第一段階成功。とりあえず、一安心といったところか」
安心するにはまだ早いが、確かに長官にとっては部下が一番危険に晒されるシチュエーションが一つ終わったのだ、
安心するのも無理は無い。
それでも、長い一日はまだ始まったばかりだ。
気を抜くわけにはいかない。

４月２６日時刻１０００国境資源会議開幕

第十三章「動き出す策」

第十三章「動き出す策」

午前中の会議はどうやら無事に終えたらしい。
中継を見ていると今から昼休憩に入るようだ。とりあえず、今の所何事も起きていない。
この間に司令室にいるメンバーに交代で昼食と休憩をとるように指示する。
私は持ち場を離れられないので、おばちゃんと佳奈さんからオニギリの差し入れを貰っている。
「ビックハットより全機へ。今のうちに身体の方の補給をしておけ」
長期戦で空腹状態になると士気の維持が出来ないのは、兵法の基本と習った。
少し隙が出来るデメリットがあるが、士気の維持するメリットの方が強い。
「「了解」」
最近の携行糧食は宇宙食をもとに開発したパックに入っている。
技術の進歩でなかなか味も良い物になっている。
蓋を捻ってあけると、二重構造になっている外側の袋が酸素と反応して熱を発し、内側の袋に入った食事を温めるスピード調理だ。
「不味くは無いんだけど、何かこういう吸い込むタイプだと、食った気がしないんだよなぁ……」
ガンドック4が少し悩ましそうにぼやきだした。
「ゼリーやビスケットよりマシよ。なんなのあれ？　容量のくせにカロリー高すぎるわよ。ついつい食べ過ぎちゃってひどい目見たわ」
ガンドック2が釣られてお喋りを始める。
緊張した心の疲れをとるために、食事中くらいは賑やかにしてもらっても、構わないと思ったので、とりあえず私語は放置する。

「いや、俺らってカロリー取らなきゃ、やってられなくないか？
というか、お前そういうの気にしてるんだな」
「本当にデリカシー無いわねぇ……軍人やってるけど、一応女の子よ？」
「お前が女の子ねぇ……何かの冗談だろ？」
「4今のは先輩が可哀想です」
同じ女性であるガンドック3から、呆れた口調で非難の声が発せられた。
「性別的には2は女性だろう。4お前は何を言っているんだ？」
ガンドック5……それは正しいが、ちょっと勘違いをしていると思うぞ。
司令室の皆もクスクスと笑い声を押し殺しながら笑っている。
「先輩……ここにも、もう一人ダメな奴がいました……」
「5、後でお説教です」
「え、何か変なこと言いましたか？」
そんなやりとりに、隊長のガンドック1がさらりと小さく呟く。
「やれやれ、相変わらず酷い話だ」
ライン小隊の面々もガンドックの会話に驚いていた。
「いやー、ハンデがあった初回以外、模擬戦で勝てなかったから、よっぽど厳しい真面目な人たちかと思いきや、思ったよりはっちゃけてるのねぇ。私達もあれくらいやっちゃう？」
隊長のライン1が妙な提案をしだすが、ライン3の沖田がうんざりしたような声でそれを止める。
「ライン1とライン2以外にもはっちゃけだしたら、収拾つかないよ？　何で隊長と副隊長が君達2人になったんだろう。僕はガンドック1みたいな真面目な人が、隊長だと良かったよ」
「そりゃ、私の魅力じゃないの？」
とライン1の武田が答え、
「俺は人徳だな」
とライン2の伊東が答える。

２人とも違う！　と思わず通信でつっこみを入れそうになった。
武田を隊長に選んだのは模擬戦時に見せた視野の広さ、度胸の良さ、そして戦術立案から実行までの部隊指揮能力の高さから。
伊東を副隊長に入れたのは、その反射神経の良さから味方機の総合的な援護と、敵陣切り込みの際に部隊鼓舞が出来る威勢の良さ。
そして、その２人の特性から隊長機の武田と相性が良いからだ。
司令室からは見落としてしまう現場の情報を広く観察し、敵部隊の弱点部分に攻撃を集中、もしくは防御を崩すチャンスメーカーとして活躍出来る組み合わせだ。
「２人の考えは絶対に違うと思うよ……」
隊長と副隊長の滅茶苦茶な回答に頭を抱えながらライン３は溜め息をついた。
「まぁまぁ、良いじゃないの。暗いよりかは明るい方がマシよ？」
そう。攻撃向きの部隊はどんな時でもポジティブで無くてはならない。
この明るさも隊長になる資質の一つだ。彼らにはまだ冷静さが少し足りないが、この先がんばってつけてもらおう。
「何だかんだで、うちの部隊も十分はっちゃけてるよね」
ライン４がライン５と一緒に部隊の総括を始める。
「そうだな。ガンドックに負けず劣らず愉快だと思うぞ。ただ、まぁ貧乏くじはライン３に任せるけどな」
「勘弁してよもう……」
切実な声で２人の協力をあおるが残念ながら笑ってスルーされている。
私はそんな部下のやりとりを聞いて内心とてもニヤニヤしているのだが、顔には何とか出さずにいる。
良いチームじゃないか。これから先が楽しみだ。
と思っていたら、緊急通信が入った。その内容を聞いて、突然背中に冷たい水をかけられたような寒気がする。
「警察本部より全部隊へ、不審物の情報が入った。現在、部隊を向

かわしている。確認の報告が入り次第すぐ連絡を入れる」
「ついに来たか。ビックハットより全機、不審物が発見された。楽しいお喋りは一旦中止しろ」
「「了解」」
切り替えが早くて助かる。
ただ幸運なことに、この連絡からすぐ5分後に中身はただの時計であることが報告された。
「誤報か。良かった」
ここで、仕掛けられたかと思った。しかし、安心したのも束の間で、警察の方に次々と不審物の情報が入る。
「こちら警察本部。先程から通信呼び出しが止まらない。しかもほとんど、不審物だ」
安心なんかしている場合ではなかった。間違いない、敵の仕掛けが動き始めている。
「不審者は見かけられていないのですか？」
「今確認しているところだ。これは応援を近い内に頼むことになるかもしれん。軍の皆、頼むぞ」
不審物情報はほとんど首都北側の地区からだそうだ。深呼吸して頭を落ち着けさせる。
本命はどこだ？　北に意識を集中させてからの南部からの侵攻か？　それとも、それを読みの裏をかいて北が本命か、どっちだ？
残念ながら分からない。こうなればどちらでも対処出来るように動くだけだ。
「毛利大佐。提案があります」
「分かっている。南側は任せろ」
「感謝します」
毛利大佐も同じ考えに至っていたようだ。おかげでこちらの部隊を北に回せる。
「ビックハットよりガンドックおよびランス全機。旋回範囲を北側のみに絞る。こちらからガイドラインをレーダーに表示するので、

それに合わせろ」
「「了解」」
警察からの続報が次々入るが、全て誤報。
つまり中身は何でもない紙袋やスーツケースなどが置かれているだけだった。
そしてこの誤報騒ぎが2時間弱続いた後、ようやく落ち着いた。
あまりの異常事態に指揮官全員が状況の確認を取り合う。
「さて、軍の諸君。君達ならこれをどうみる？」
苦虫をつぶしたような顔で警察庁長官が尋ねてくる。
相手の思うつぼだろうが、あれだけ部隊をひっかきまわされれば、イライラしてしまうのは仕方ない。
しかも、防犯カメラからの情報は、見た目が二転三転していることから、多数のテロリストが工作している。と考えるのが自然だ。
共通しているのは、警察に連絡を入れた人達は誰かが「あれは何だ？」という声を後ろから聞いた。ということだけだそうだ。
つまり通報者は基本的にシロ。
そこまで確認をとってから、徳川大佐が考えの説明を始める。
「恐らく、目的は2つ。1つは今の長官が陥っている状況です。ひとまず、落ち着きましょう。次に我々を不審物情報に慣れさせること。また、誤報かと油断させることです」
精神的な揺さぶりか。冷静な対応をとらせない狙いは確かに考えられる。
そして、次に毛利大佐が続いた。
「そして、今パタッと止んだ。徳川大佐の考えから推測するに、恐らく次に何かを仕掛けるかと。私ならそうですね……本物をそろそろ仕掛けます。この後予定されている記者会見に合わせてね」
「場所はどうなる？」
毛利大佐の提言に場所が抜け落ちたことをしっかり気付いて質問をする。
「正直分かりません。今までの誤報は北側からが多かった。だから

本命は南側。もしくはその予測の裏をかいて北側で爆発させて、混乱を生み出し、首脳を狙いやすくする。と考えるのが普通でしょう」
「分かっているではないか。それに聞いた限りありうる話だ」
同じ考えに至ったので、毛利大佐の言いたいことが分かる。
だからこそなのだ。ありうると思ってしまうからこそ、怪しい。
「そう。誰でも思いつく偽報の使い方です。そのせいですよ。分からないのは」
「どういうことか分かりやすく頼む」
「今回テロリスト達は、1ヶ月以上前から潜伏し、今日も狙いやすい移動中ではなくわざわざ偽報まで使ってきて、こちらの混乱を誘っている。その相手が立てる計略の詰めが、こんな単純な話であるとは思えないのです」
「むぅ……だが、それではこちらも手が打てないぞ？　結局の所、現状維持しかないではないか」
毛利大佐の言う通り別の狙いがあるなら、今の北部と南部の分散旋回も死角があるため問題となる。
しかし、今の陣形を更に1小隊ずつに分散させて、奇襲に備えると、普通の手で来られてしまった時に問題が生じる可能性もある。
となると、打開するには相手の目的をもう一度考え直すべきか。
「今悩んでいるのは相手がどのような方法で我々の裏をかいてくるかということですが、テロリストの標的はほぼ間違いなくヤポネ首相でしょう。となると、どのような方法にせよ国際会議場への接近が必要です。兵器を使っての接近ならば、警察特殊部隊のマップスで対処出来るはずです。さらに、上空を旋回している海軍機と空軍機の旋回範囲を国際会議場上空５００ｍまで狭めます。遠距離からの侵攻を止めるのは遅くなりますが、近距離からの奇襲による被害はかなり抑えられるのでは？」
しばしの沈黙の後、皆が渋々と了承の言葉を口にする。
「やむを得ない……ということか」
「残念ながら、やるしかありません。部隊に指示を出しましょう」

陣形変更の決定が下されたので、すぐに指示を出す。
「ビックハットより全機へ。旋回範囲が変更になった。レーダーのガイドに従って移動しろ」
国際会議場を中心に５００ｍの円がレーダーに表示され、味方機のシグナルが円の中に入っていく。
「ホークアイ、分かっているとは思うが、今の陣形で一番の要は君だ。敵を見逃さないように注意しろ」
「了解」
現在時刻１４５０。記者会見まで残り１０分。

第十四章「パーティの合図」

第十四章「パーティの合図」

時刻１５００、国際会議場特設記者会見場。
目が眩みそうなカメラフラッシュの中、ヤポネ首相が白い歯を見せながら手を振っている。
毛利大佐が予測している襲撃タイミングだ。
しかも、人間による襲撃はこちらからは手が出せないので、ＳＰと対テロ部隊のみが頼りだ。
厳戒体制の中、首相の会見が始まる。
「皆様こんにちは。先程、国境資源会議が終了致しました。今回の会議も非常に有意義でありました。国境線に埋蔵されているＦＴＥ鉱は我が国の物であることを、正式に二国間で合意しました。正式な条約締結は国会の承認を得られ次第行います。二国間の緊張が緩和されることを切に祈ってきた国民の皆様のおかげです」
挨拶を済ませ、結果を軽く伝えると詳細を報告するため交代することになった。
「詳しい内容は外務大臣の方から説明があります」
首相が外務大臣と交代しようとしたその刹那、遂にテロリストが行動を始めた。
国際会議場南部９００ｍの地点にある複数のビル屋上から赤い光が生じ、雷鳴のような音が大気を震わせる。
飛散したビルのガレキが、道路や他の建物に突き刺さる音が鳴り響く。
そして、その轟音に発砲音をかき消された銃弾が記者会見場の机や床に風穴を開けていった。
耳をつんざくような叫び声が連鎖して会場は大混乱に陥っている。
首相を確認するとＳＰによって、無事守られたようだ。

首相の無事を確認し、送られてくる爆発現場の映像に目を向けると、屋上の屋根が吹き飛んでいた。
何故わざわざ屋上に？
と疑問に思った瞬間、警察から全軍に緊急通信が入った。
「こちら東部第１７検問所！　乗用車五台が検問を突破して中央に向けて進行している！」
大体東に５ｋｍ地点か、爆弾を屋上にしかけたのは、気付かれやすいようにするためか！
「こちら西部第３検問所！　同じく乗用車七台に突破された！」
こちらも同じく西に５ｋｍ地点。挟み撃ちにされてしまっている。
しかし、兵器を潜ませている中で乗用車はおとりだと考えるのが自然だ。
「長官！　両首脳と市民の避難はどうなっていますか？」
「市民の避難は始めている！　両首脳は公用車に無事ついたようだ。そろそろ待避ポイントに向かい始める！」
よし、警察の対応は早い。
「恐らくこの乗用車はおとりです。本命が近く出現すると思われます。予定通り検問所を全て解除して、避難指導を徹底させてください！」
ホークアイに不審車が他にも無いか確認をとってもらうと。
「こちらホークアイ、不審車のマーカーを全軍に送信した。南５ｋｍ地点からも出てきたぞ！」
レーダーを確認すると１０台の乗用車がまるでレースをしているかのような速度で進んでいた。
「発砲された者が出てきた！　警察のマップスを動かすぞ！」
おとりとは分かっているが仕方ない。市民の命には変えられないのだ。
それに乗用車を止める程度なら、こちらから発砲する必要はない。
「了解しました。伏兵には気をつけるよう伝えてください！」
「わかっとる！」

警察は会議場から５００ｍ離れたマップス２機編成の分隊をそれぞれの方向に送り始めた。
しかし、レーダーを見るとマップスの接近に気付いたテロリスト達は走行ルートを直線から、分散して　何度も折り曲がるあみだくじ方式のルートで動き始める。
こちらの数が少なくて、突破される可能性が強まったため、対抗して中央に配置してあった三機編成のマップス分隊も、それぞれの方向に出現した乗用車に向けて動き出した。
その様子を上空から見ているライン１から通信が入る。
「ビックハット。私たちはどうすれば良いの？」
「待機だ。我々は本命に備えるぞ」
「了解……」
少し悔しそうな返事だった。
目の前で戦闘が繰り広げられそうな中、見ているだけというもどかしさがあるのだろう。
しかし、今は我慢して貰わなければならない。
警察と乗用車はそれぞれ４ｋｍ地点で鬼ごっこを始めた。
市民の避難がまだ終わっていないため、こちらからは発砲がまだ出来ないのだ。
何とか蹴りや近接武器で止めるしかないので、少し手間取っているらしい。
「ホークアイより全軍へ！　南側２ｋｍ地点から大型重機だ！　地下から出てきやがったぞ！」
横幅２．５ｍ長さ５ｍ高さ１．９ｍの重機五台が地下駐車場から出現した。
やはり、乗用車はおとりで、本命がいたか。
しかし、何故大型クレーンといった重機なんだ？
私のその疑問はすぐにとけることとなる。
海軍のマップスが近づくと重機のアームから砲弾が飛び出したのだ。

動きを止めるために降下して近づいた海軍機は、相手が重機だと思って油断していたのか、粒子シールドの展開が遅れ、砲弾のエネルギー変換が間に合わず、脚部の装甲が少し凹んだ。
もう少し遅ければ脚部のブースト機能に異常が出るダメージを受けていたかもしれなかったが、落ち着いて状況の報告をいれてくれた。
さすが、毛利大佐の部隊だ。立ち直りが早い。
「重機の装甲がパージされて、中から装甲車や戦車が出てきました。近くに重機がある場合十分に気をつけてください！」
やられた。昨日探し回っても見つからない訳だ。
完全に偽装されていたらしい。
サナの言っていた駆動音の違いの原因が判明した。なるほど、積み荷の偽装だけではなく、戦闘車両を他の外装で隠すという、二つの方法で偽装されていたということか！
となると、建設ラッシュで地上や地下のそこら中に重機があるこの状況、非常にまずい。
どれが本物か偽物か分からないのだ。
「こちら陸軍の徳川だ。郊外の方にも偽装車両が出現した。現在交戦中。援護に向かうには時間がかかる。緊急事態だ。他の所からも応援を出して貰うぞ！」
「了解。他の基地に援軍を要請します」
しかし、援軍を要請するという目論見は完全に外れてしまう。
軍本部に連絡を取ろうとするのとほぼ同時に緊急通信が入る。
「ヤポネ領海付近に所属不明の大型艦船が多数出現！　各基地はこれに対処せよ」
よりにもよってこのタイミングとは出来すぎている。
やはり艦船消失の事件はテロリスト達が仕組んだ事件だったか。
「こっちは2方面指揮か、状況判断能力が落ちるかもしれん。いざという時は頼むぞ坂本大佐」
海軍である毛利大佐は不審艦船の対処まで始めなくてはならなく

なった。
完全に戦闘状態に突入した中で、大部隊の援護が期待出来ない状況になってしまった上に、ベテランの　アドバイスも期待出来ない。
条件がどんどん悪くなっていく。
少しでも改善が無いかと市民の避難状況の確認をとる。
「市民の避難状況はどうなっていますか？」
「まだ済んでおらん！　予想以上に混乱しておるせいで思ったように避難が進まない！　公用車は見ての通り北側に進み始めたところだ。警察のマップス５機が護送するから、南の戦闘車両を頼むぞ！」
事前のブリーフィング通り真上からの狙撃のみか。仕方ないがやるしかない。
「了解しました。ビックハットよりガンドックおよびライン全機。敵戦闘車両を破壊しろ。敵の足は海軍が囮になって止めてくれている。確実に上空からの狙撃を当てろ！」
「了解。ガンドックエンゲージ」
「了解。ラインエンゲージ」
スナイパーを上に、その下に残りの機体が浮遊装甲を展開する陣形を組み、高度を３ｋｍまで下げて攻撃を開始する。
「ガンドック５、狙撃を開始する。右の戦車をもらうぞ」
「ライン１、んじゃ左いくよ！」
「ライン３、では真ん中はいただきます。皆さん防御は任せます」
３機のスナイパーにより丁寧に狙って放たれた弾丸は見事に直撃を決め、一撃で戦闘車両を行動不能に陥らせた。
海軍機のパイロットが口笛でヒューという音を出し、感心する。
「やるじゃないの空軍さん。残りも決めちゃってよ」
「そのまま敵を足止めしておいてくれたら、もっとサービスし・て・あ・げ・る」
海軍機の要請にノリノリで答えるライン１がそのまま残りの２台を狙撃で撃破する。
「これで、一段落かしら？」

無事に敵を撃破してご満悦なライン1に先輩であるガンドック1が注意を促す。
「油断するなライン1。まだ終わりだと決まってはいないぞ」
「ってかさ、みんな。今回の敵さんの動きって大佐が模擬戦の時にやったのと似てると思わね？」
ガンドック4が現場の空気から状況を読み取る力をいつの間にか身につけたのか？
この前の訓練が良い教訓になったらしい。
「どういうことよ？」
「いやさ、模擬戦でやった大佐の作戦って、囮を使って相手を動かして、分断するってのが基本だったじゃん？　何か今回同じように釣られている気がするんだが、気のせい？」
「あんたの口からそんな言葉が出てくるなんて、さっきの携行食糧腐ってたんじゃない？」
ガンドック2が驚いた声でさらっと酷いことを言っている。
そんなに驚くようなことだったのか……。
しかし、ガンドック4の考えには同意せざるをえない。
恐らくまだ何かある。
「一応俺も傷つく時は傷つくんだぜ？」
昼とは立場が逆になっている。本当に仲が良いのか悪いのか……。
「こちらホークアイ。どうやらそのバカの言う通りだ。全方位から10台ずつ出現した重機か外装をパージ！　首脳の避難経路が北東のポイントブラボーに変更されました」
首脳が目的だとしたら、確かに南側に集められてしまっているので、ガンドック4が言った通りまんまと釣られてしまったことになる。
どうにかこの状況を打開しなくては！
「市民の避難はまだですか？」
「南側は終わった！　東西もほぼ終わっている。北地区商業区で人が多いせいでもう少しかかる！」

予想以上に時間がかかるな。パニックになって仕方ないとは分かっているが、もどかしい！　いや、焦るな落ち着け。
頭をかきながら一旦深呼吸をして気を落ち着かせる。
「毛利大佐。南側の敵は任せます！」
「了解。北側をしっかり片付けてくれ」
北部以外は市民の避難がほぼ終わっているため、車両も警察の方で対処が出来る。その代わりにこちらは北に集中し首脳を護衛する作戦だ。
「ビックハットより全機！　北側の敵を叩くぞ！　公用車に敵を近づけるな！」
「「了解」」
陣形を維持しながら北側の敵車両部隊に近づいていく。
「橘、公用車が待避ポイントに着くまで、後どれくらいかかる？」
「推測時間は八分です」
「全機聞こえたか？　八分間敵の足を止めるか、八分以内に敵を撃破しろ」
「旧式兵器の戦闘車両なんてちょちょいのちょいよ！　４０秒で片付けてやるわ！」
頼もしい返事だ。がんばれ。敵の撃破に関して私は応援することしか出来ない。
「北東地区より重機出現！　繰り返す、北東地区より重機出現！」
よりにもよって、近くまで来たこのタイミングか！
敵の出現により、橘から公用車の目的地変更が告げられる。
「敵部隊の出現によって、ポイント変更。北西地区のポイントＨに進路を変更しました」
確かにまだ敵が出現していないポイントだが罠の可能性が高い。
しかし、進路変更があるなら、今北にいる装甲車部隊は速やかに排除しなければならなくなった。
「北東の戦闘車両は警察の部隊に任せて、そのまま目の前の敵を撃破しろ！」

「了解。右3機を落とす。残りは任せる」
「僕は左3機を狙います」
「んじゃ、私は今回も真ん中ね。最後の一機は早い者勝ちで」
スナイパー3機が狙いをつけ始める。
ただ、今回は下でターゲットを集めてくれる味方機がいないので、対空攻撃で反撃されている。
しかし、所詮旧世代兵器の攻撃だ。油断さえしなければ容易く防御出来る。
それに、ガンドックは浮遊装甲による防御が得意だ。落とされる心配はほぼ無い。
「マップスを甘く見ないで。今時戦車で対抗は無理。5早く決めちゃってね」
「3油断するなよ？　君が落とされては意味が無い。ただ、攻撃は任せておけ」
浮遊装甲を敵に向けて防御する。普通に回避しても良いのだが、今はスナイパー3機に集中してもらうためにわざと浮遊装甲を当てに行く。
おかげでスナイパー達は一撃必中で狙撃を次々に当てていく。
「5さすが」
「ふむ、こちらの勝ちか」
ガンドック5が最初に3機を撃破し、最後の1機を破壊する。
「あー、負けちゃったか」
「いや、ライン1もガンドック5も、そこ競争するとこじゃない……」
これで、移動経路上の敵がなくなった。
「よし、そのまま車両を挟むように部隊を分散する。前方にガンドック小隊、後方にライン小隊で護衛につけ」
「「了解」」
目的ポイントまで残り5分。
敵影は今のところなし。

このまま行けば護衛ミッションは完了だ。
しかし、今回のテロリスト達は実に手強かった。
「ホークアイより、全軍へ！　ポイントＨ近辺に大型トレーラー５台を確認！」
ここに来て援軍だと！？
まさか北東に出現した部隊までおとりだと言うのか？
「不審大型トレーラーの後部が開いて……マップスです！　中からマップスが出てきました！　数は……１０！」
しかも、よりにもよって大本命のマップス部隊か。
「ビックハットよりガンドック小隊へ！　避難完了の知らせがまだ入っていない！　首脳の公用車を守るためにはやむを得ない。敵部隊を何とか上空に引き摺りあげろ！」
「了解！　ガンドック小隊フォーメーション（クロウ）！　攻撃は近接格闘のみだ！」
「ガンドック２了解。みんな気をつけてね！」
「ガンドック３了解。誰もやらせない」
「ガンドック４了解。派手にいくぜ！」
「ガンドック５了解。ついていきます」
隊員の応答に対してガンドック１が力強いかけ声を発する。
「行くぞ！」
そのかけ声に応じて、ガンドック全機が背部ブースターの出力をあげて一気に降下を始めた。
「ライン小隊はガンドック小隊が引き摺りあげきれなかった敵を抑えろ！　敵マップスを公用車に近づけさせるな！」
「了解！　みんなタイミングは私に合わせて！」
「ライン２了解。突っ込むタイミングは任せるぜ」
「ライン３了解。僕はあまり近距離戦って得意じゃないんだけどなあ！」
「ライン４了解。ライン３の分まで働いてあげるから安心して」
「ライン５了解。そういうことだ。いつもの恩返しってやつだな」

「んじゃま、ライン小隊の初仕事に撃墜記録を作って、小隊の名前に泊をつけるわよ？　レッツゴー」
タイミングをずらしながら、ガンドック小隊に続いてライン小隊も降下を始める。
ガンドック全機が最大スピードで降下しながら近接武器で敵マップスに攻撃をしかける。
衝突による激しい金属音が鳴り響き、爆発音が聞こえた。
どうやら初撃は、それぞれの機体が浮遊装甲を肩にマウントし、その面から敵に体当たりをぶつけて、近距離武器で攻撃を繰り出したようだ。
刃が長い粒子ブレードを使っているガンドック1が敵マップスの腕を一本切り落とすことに成功し、残りの隊員も粒子ダガーで装甲を切り裂いて、ダメージを与えることに成功している。
そして、追撃をいれずに即高度を上げるために脚部ブースターを最大まで出力を上げて上昇し、敵からの反撃の回避と空中戦への招待を行った。
招待に応じたのは攻撃を受けなかった5機で、射撃を行いながらガンドック小隊を追いかけて空中にあがっていった。
公用車を拿捕もしくは破壊するのには損害がある機体に任せても問題ないという判断だろう。
だが、甘い！
「ライン小隊！　敵はある程度ダメージを既に受けている。何とか空中戦に持ち込んで破壊しろ！」
「「了解」」
さすがに二度目の奇襲は準備が出来ていたためか、攻撃は全て浮遊装甲で防がれてしまった。デッドコピーだけあって性能はほぼ一緒だ。
ここからはパイロットの技量にかかっている。
ガンドック小隊と同じように即高度を上げて空中戦に持ち込もうとするが、敵はなかなか高度を上げてくれなかった。

あくまで、狙いは公用車ってことか。さて、どうする。
「陸軍より全軍へ！　こっちも敵がマップスを出してきた！　援軍はやはり出せそうに無い」
陸軍からの援護はやはり期待薄のままだ。
「もう少しで戦闘車両の片がつく。それまで持ちこたえてくれ」
海軍と警察からの援護はもう少しかかる。
「橘目的ポイントまで後何分だ？」
「残り３分です！」
高度を上げずに公用車を狙われている。ということはだ……。
「ビックハットよりライン３！　君は近距離戦闘が苦手だな？」
「は、はい！」
「公用車をマップスで直接ポイントまで運べ。その間、ライン小隊は４機で敵の動きを封じろ！」
「無茶言いますねー大佐。数が不利な状況でＶＩＰの護衛付きですか？」
ライン１の言うとおり、無茶な話だ。だが、これが一番安全に護送出来る方法だ。
「悪いが冗談を言える状況じゃ無いのでな。本気だ」
「了解。ライン小隊、ライン３を全力で守るよ！」

それぞれの小隊が遂に１対１まで分散させられてしまった。
デビュー戦にしては随分と苦労するシチュエーションだ……。
胃が少し痛くなってきた気がする。

４月２６日１５４５

第十五章「ミミックボックス」

第十五章「ミミックボックス」

ガンドック小隊が空中戦を開始し、ライン小隊が首脳護送を始めた。
ガンドック小隊の方は射撃が出来ず、動きも常に上にいるよう制限されるため、思ったように敵が攻撃出来ていない。
敵もそれに気付いてわざと距離を離してきている。首脳を守る上では効果的なのだが、やっかいであることに変わりはない。
「ガンドック1よりビックハットへ。射撃武器の使用許可はまだですか？」
「まだだ。すまないがもう少し持ちこたえてくれ」
「了解。全機落とされないように注意するぞ」
さすがにもう1時間近く経つんだ。そろそろだろ？
「こちらライン1。敵が強行突破を図ってきた！　さすがに防御だけじゃ厳しいわよ？」
やはり、そうなるか。ライン小隊の方もかなり分が悪い。
4対5で強行突破を防ぐとなると、かなり面倒だ。
それに、今は射撃が制限されていて牽制すら出来ない。
「橘、待避ポイントまでの時間は？」
「残り一分です」
「ライン小隊、一分で良い。敵を抑えろ」
「了解！　全機浮遊装甲展開と同時にカウンターの用意！」
ライン小隊は無数の弾丸を浮遊装甲で全て防ぎながら、敵部隊の格闘攻撃に備える。
「やっぱ私に来るよね。もてる女は辛いわ！」
隊長機と判断されたライン1の機体には片腕が無くなった機体と損傷が少ない敵2機が、残りの隊員に敵が一機ずつ攻撃をしかける

ために接近してきた。
「しっかり振っとけよ？　男の告白を適当にあしらうと後で痛い目見るぜ？」
「言うじゃないの！」
ライン1は左右から来た敵の粒子ソードによる斬撃を浮遊装甲で受け止め左手にダガーを、右手のロングレンジライフルに炸裂火薬仕様のパイルバンカーを装備した。
敵2機が防いでいる装甲をはじきとばし、防御ががら空きになる。
鍔迫り合いから蹴りを入れて敵マップスを吹き飛ばしたライン2が援護に入ろうと接近するが間に合いそうにない。
「くそっ、やれるかライン1？！」
「私を誰だと思ってんのよ？」
追撃を入れようと粒子ブレードを振り上げる敵2機に対して、ダガーの投擲と、パイルバンカーを敵の腕部に直撃させる。
ダガーを当てられた敵は腕からのエネルギー供給が途絶え、ブレードの刃が消えた。
もう1機のパイルバンカーを当てた方は装甲内からの爆発で、腕部がちぎれるように吹き飛んだ。
ライン1は、吹き飛ばされた浮遊装甲と飛ばしたダガーを回収して、再度機体の周りに浮遊装甲を展開しながら叫ぶ。
「ライン小隊隊長。武田京子よ！」
「決め台詞を言うならしっかり敵を片付けてからにしろ！」
ダガーを当てられた敵が左手のアサルトライフルを使って、ライン1の機体に射撃を撃ち続けて足止めを行っている。
その間に両腕の無くなった敵機が頭上を越えて公用車を運んでいるライン3に接近する。
私もしまった。と思ったその時待望の通信が入った。
「待たせたな坂本大佐。北地区避難完了だ！」
警察庁長官から規制解除の連絡が入った。
「全機射撃規制解除！　発砲を許可するがあまり町を壊すなよ！」

「待ってました！　ライン2前の奴を頼むわ。後ろに行った奴はこっから撃ち落とす。ライン4とライン5は牽制射撃で敵を突破させないで」
「簡単にいってくれるぜまったく！」
文句を言いながらブレードを構えてライン2が敵に突撃をかける。
「ライン5分かってると思うけど」
「おうよ、建物を吹っ飛ばすなって言うんだろ？」
丁寧に敵を狙いながら一発一発とレールライフルを発射する。
派手さは無いが、確実に当てることによって敵をひるませることが出来た。
「いただき！」
ライン1のかけ声と共に放たれた弾丸は見事に敵マップスの背後を捕らえた。
ブースターが爆発し、推進力とバランスを失って、その場に落ちた。
ただ、まだ脚のブースターが生きているので、まだ動ける。それを見越して、さらに脚部と腰部に3発の　弾丸を撃ち込み、行動を完全に封じる。
「こちらライン3。ポイントに到達。首脳陣は地下の専用リニアに搭乗を始めました」
よし、良くやった。これで後は敵部隊の撃退のみだ。
「こちら空軍坂本。全軍へ、首脳陣の待避を確認した」
「こちら陸軍徳川。冷や水を浴びせて悪いが、予想通り菱田重工工場および本社に歩兵が入ってきた。ただいま待機していた部隊が応戦中だ」
やはり本命はそこだったのか。
テロリスト達が首脳の拉致に成功しても失敗しても、油断か混乱で菱田重工に進入できる作戦だと考えられる。
宮野大将の予想通りだったか、やはり凄い人だ。
対処は待機していた陸軍が何とかしてくれるだろう。

おかげでこちらの部隊は、残敵の撃破に集中出来る。
「お、やるじゃないのルーキー！　こっちも負けられないっすね隊長！」
ガンドック４が情報を聞いて素直に褒めたたえた。
「あぁ、こちらも仕事を果たすぞ」
射撃規制が外れたおかげで、お得意の連係攻撃を開始する。
「ガンドック１よりガンドック全機へ、フォーメーション（ハント）」
「「了解」」
敵１機を引き離すために残り４機に攻撃を集中する。
弾幕で相手を追い込み防御態勢をとらせてから、ガンドック１による高速機動で陣形の端にいる敵に近接攻撃をしかけ、少しずつ部隊から引きはがしていく。
まさに猟犬による追い込み猟といったところだ。
「全機、まずは一機だ」
隊長の合図と共に一斉にターゲットを部隊から離れた敵機に合わせる。
浮遊装甲を展開されて、集中砲火によるダメージは少なかったが、完全に動きを止めることが出来た。
「もらった！」
そして、その動きの止まった獲物の後ろにガンドック１が回り込み、コアにブレードを突き立てて、そのまま横に滑らせてコアを切断する。
「次いくぞ！」
「「了解」」
見事な連携攻撃で敵を一機撃破する。墜落していく機体から避難するパイロットが確認出来たので、警察部隊に連絡を入れる。
「こちら空軍坂本、敵パイロットの脱出を確認した。ポイントは中央から１１時の方向に２０ｋｍ。殺害せずに逮捕して下さい」
「分かった。こちらのマップスをテロリスト逮捕に回す」

海軍機も北部地区に到達し、一気にこちらが優勢となる。
精鋭揃いの２０対８だ。負ける確率は非常に低いはず。
「ビックハットよりミヤト全軍へ。そのまま敵を撃破するぞ」
部隊の気合いを再度入れ直す。
ただ、ここで敵部隊は予想外の行動をとってきた。
「こちらライン１。敵機が後退していくわ」
「こちらガンドック１。同じく敵が撤退を始めた。方角は１１時の方向。追撃しますか？」
このタイミングで？　マップス以上の何か隠し球があるというのか？
いや、どちらにせよ徳川大佐に連絡を入れなければ。
「徳川大佐。そちらの北拠点に敵が接近しています。注意してください」
「大丈夫だ。敵車両部隊およびマップス部隊はすでに撃破した。そのまま迎え撃つ」
さすが、百戦錬磨の部隊だ。圧倒的な数で敵を制圧しきったらしい。
そうであるなら、追撃は無しだ。
「ビックハットより全機。追撃はせずに、陸軍に任せる。これで敵が全部と決まった訳ではない。油断するなよ」
「「了解」」
空軍部隊の首都待機を決定した後に、徳川大佐から軍用回線で連絡が入ってきた。
「菱田重工を襲った連中だが、報告によると東の石油国家群の連中らしい。テロリストを装っているが、どうやら元正規兵だ。こちらの部隊も重傷を負った者が出ているが、何とか撃退に成功した。偽装したマップスは北部戦線の援軍に戻すぞ」
「了解しました。頼みます」
ただのテロリスト部隊では無いと思っていたが正規兵がかなり混じり込んでいたのか。

道理で統制がとれている。その上、これまでの仕掛けの数々、優秀な指揮官が裏にいるはずだ。
やれやれ、菱田重工が守れたのは宮野大将様々といった所か。

しかし、ほっと出来たのもつかの間だった。
「ホークアイより全軍へ。首都北部８０ｋｍの山岳地帯から異常な粒子反応を確認！　なんだこれは？　でかすぎるぞ？　衛星からの映像を全軍に転送する」
山の斜面から粒子砲の青い輝きが天を貫いた。
その崩れ落ちる土砂と木々の中から何かが姿を現した。
この国では技術者の趣味により設計案が初期で廃棄された計画。
高騰する地価。
多すぎるトラック。
運ばれていた兵器と思わしき物。
東部の石油産出国家群で消えた大型艦船とレトリア連邦での再発見。
その全てが一つに繋がった。
ＦＴＥ粒子の制御技術による大火力の砲台と移動性能を手に入れた新たな軍艦。
割れた山から大型タンカーを元に改造された空飛ぶ船が姿を現したのだ。
その光景に司令室内は騒然としている。思わず私も心の底から素の言葉が漏れてきた。
「マジ？」

４月２６日時刻１６４０。

第十六章「一撃に全てをかけて」

第十六章「一撃に全てをかけて」

更に驚くべきことにテロリスト達からオープン回線で通信が入ってきた。

「我々の要求は、ＦＴＥ技術の封印と古き良き時代への回帰だ。先程の会見でも露呈したが、この国は狂っている。神から与えられた富を一切分け与えないこの国を、神に代わって断罪しよう。人々は満たされた生活をしたあの時代に戻らねばならない！」

言っていることがメチャクチャだ。理論も何もあったもんじゃない。

「おい、坂本。あれは何の冗談だ？」

徳川大佐が戸惑いながら通信を入れてきた。正直私も良く分からない。

「いやー、リアルですね。映画の撮影でしょうか？」

「ほぉ、今度息子と見に行こうか。非常に迫力ある映像が見られそうだ」

毛利大佐も私の冗談にのってくれて、三人で高笑いを始める。

「んな訳あるか！　毛利、まさか領海に現れたのもこれか？」

「落ち着け徳川大佐。不審船は全てただのガラクタだったよ」

おとぎ話の化け物はあの一点だけか。とりあえず、レーダーを再確認する。

「徳川大佐、あの化け物とマップス八機に挟撃されます。いくらこちらが二十機でも危険かもしれません」

敵の能力は未知数だ。警戒しなければならない。

「大丈夫だ。私の部下を甘く見るなよ？　それに時間をかけると市街地が危険だ」

部隊を南に南下させて、合流をはかる敵部隊のマップスを先に撃

破する作戦をとるようだ。その間に、残りの部隊を北上させて一気に叩くつもりらしい。
　万が一に備えてこちらも準備をしておこう。ガレージに通信を入れて松平を司令室に呼び寄せる。
「もっさんそんなに慌ててどうしたの？」
「良いからモニターを見ろ」
「そんな変な物が映ってるの？　……何あれ？　映画の撮影現場？」
　残念だが松平そのリアクションはもう私がやった！
「いや、それだったら実に良かったんだが、どうやら本物だ」
　それを聞いて松平の眼光が鋭くなる。
「粒子反応と発生熱量、移動速度と船体サイズ。数字が出せる物は全部見せて。後、船体の拡大写真も何枚かよろしく」
　観測データを全て展開してもらい、松平が食い入るように見つめる。
「もっさん、どうやらちょっとめんどくさそう」
　一瞬でデータの解析を済ませて評価を下す。やはり機械に関しては変態的に天才だ。
「ホークアイよりビックハットへ！　巨大タンカーと交戦を始めた陸軍機が落とされました！」
まさかマップスが落とされるとは……。思った以上に厄介だ。対策を急いで立てる必要がある。
「時間が惜しい、松平簡単に説明してくれ」
　眼鏡をくいっと直して松平が説明を始める。
「簡単に言うとＦＴＥ粒子を利用した大型兵器。防御システムはこの粒子反応と密度から考えて粒子シールドが展開出来ると思う。装甲の厚さは分からないけど、通常のタンカーの船体とは光沢が違う。恐らく浮遊装甲並の堅さの装甲があるはず。マップスは装甲を厚くし過ぎると四肢の動きに支障があったんだけど、船体だったらどれだけ厚くしても問題無いからね」
　何という物を作り上げているんだ。マップスで浮遊装甲を展開さ

れるだけでも苦労するのに、それで船体を覆っているだと？
「撃破方法はあるか？」
「接近戦によるブレード攻撃。浮遊装甲って普通ははじき飛ばす方が早いからって理由でほとんど切断まですることって無いよね？一応通常出力で十秒以上粒子をぶつけ続けると切れるよ？　普通しないけど、最大出力なら五秒。大量に弾丸を撃ち込んで傷をつけた後ならもう少し早いかもね」
「その方法だと対空砲火で蜂の巣にされないか？」
「恐らく正解、外観だけで対空用の機銃を四十基八十門確認したよ。先端に装備されている主砲と思われる粒子砲も十分危険だし、副砲も二列に八基ずつで二十四門。正直良くもまぁこんなに積んだよ」
　洒落にならない……。
　元パイロットだから分かるのだが、マップスの機動性がいくら高いといっても全て避けきれる規模じゃない。
　雨の日に傘をささずに走って帰っても濡れない。くらい無理な話だ。
「浮遊装甲を前面展開して、突撃をかけるのも危険と思うがどう思う？」
「同意だね。いくら何でも何百発と貰えばさすがに壊れる可能性がある。残念ながらとても頑丈っていうだけで、魔法の盾って訳じゃ無いんだよね」
「射撃武器による撃破は可能か？」
「対マップス用だと、ちょっと厳しいかな。艦橋の装甲は恐らくそのまんまだから、そこを狙い撃てれば何とか。後はさすがに砲台もそこまで頑丈じゃなさそうだから壊せるかも。粒子シールドの出力次第だから分からないけど……」
　やはり、難しいな。近距離はリスクがでかすぎる。遠距離はリスクが小さいが攻撃が通るか分からないか……。
「ホークアイよりビックハット！　更に悪いニュースだ。陸軍機のパイロットによると攻撃が効かないらしい。現在集中射撃で敵シー

ルドを中和しようとしているところだが、通信を聞く限り相当苦労している」
遠距離攻撃だと、やはり難しいか。ん？　何かを忘れている……あ。
「なぁ、松平。あのライフル……ブリューナクならどうだ？」
私の質問を聞いて、とても嬉しそうな顔してニコニコしだした。
「行けるよー。でも真正面から撃つとろ獲やテロリストの逮捕は出来なくなっちゃうね。言わなくても分かってると思うけど、外したら大変なことになるよ？」
分かってる。だから、万全を期すためにもう一度船体の構造を確認する。
タンカーの長さは３５０ｍ、高さは７５ｍで船体の大部分を占めている石油をためる槽に恐らく大型ジェネレーターなどの内装を積んでいるのだろう。
「なぁ、松平。半分消し炭にしても構造分かるか？」
松平は私の質問に少しの間腕を組んで悩んでから、うんと頷いた。
「多分分かるよ。というか、今考えていること以外で損害を抑えながら確保するのって無理だと思うよ」
「都合良く菱田重工の掃除も終わったと報告も来ていることだし、ちょっと倉庫から借りてくぞ？」
「まさしくこんなこともあろうかと。って話だね。菱田重工技術顧問が許可します。どうぞやっちゃってくださいな」
松平からの許可をとりつけ、ガンドック小隊とライン小隊を菱田重工の工場に向かわせた。
ハイブリッドライフル《ブリューナク》は二丁あるのだが、一丁で十分だ。
発射シーケンスの際に護衛が必要となるので、射手をライン１に任命した。
ガンドック小隊の方が浮遊装甲による防御が上手いためだ。
更に松平からの提案でライン２に第二世代用の追加大型ブースタ

ーを装備してもらい準備が完了した。
「坂本！　毛利！　あの化け物タンカーは危険だ！　浮遊装甲が破壊されるほどの攻撃をしてくるぞ！　こっちの部隊がかなり落とされた。全戦力を合流させてから、体勢を立て直して攻撃するぞ」
「敵マップスはどうなりました？」
「マップスの訓練を受けてなかったのだろう。大して苦労せず撃破して確保済みだ」
　最大の問題があっさり片付いてしまった。おかげでこちらの仕事がかなりやりやすい。
　これ以上損害が出る前に終わらせなければ。
「新兵器を使用して撃破します。既に段取りは済んでいるのでいつでも行ける状態です。海軍機は万が一に備えて首都に待機していて下さい。陸軍機も一時後退を！」
「分かった。任せるぞ。こちらは一旦撤退する」
「首都の方は警察に任せてくれたまえ」
「長官殿、海軍を忘れないでくださいよ。頼むぞ空軍諸君」
　徳川大佐、警察庁長官、毛利大佐からの許可を貰い、指示を出す。
「ビックハットよりガンドック小隊及びライン小隊。敵の大型飛行艦船を撃破するぞ！」
「「了解！」」

　高度１ｋｍで前進し、距離が１０ｋｍまで近づいた時、マップスのモニターからその巨体が映し出される。
　この巨体が高度８００ｍほどで時速２００ｋｍ／時ほどで飛んでいるのは、やはりにわかに信じがたい光景だ。
　その光景に目を奪われていたら、タンカーの側面にある装甲が八カ所開き、中からミサイルが合計八十発も発射された。
「うっわ、何これ花火大会でも始まった？」
「気が合うなライン１。私も同じ事を考えていた。全機フレア射出！」

「ちょっとーガンドック1、私の部隊まで指示しないでよー」
敵のミサイルに対抗して、フレアを射出しながらミサイルの雨をそらせながら突き進む。
距離が7kmを切り始めるとさらに敵艦船から対空砲火が始まった。
「今度は粒子砲による対空砲火が追加かよ。緑やら赤やら青やらカラフルで素敵だな！　爆発物のプレゼントまでつけやがってクリスマスかってんだ！」
「ガンドック4落ち着いて。そろそろタイミングよ。みんなも気を付けてね。十秒ごとに防御陣形の前列後列を後退して、浮遊装甲の排熱をして！」
ガンドック2が言ったようにそろそろだ。　敵がこちらの集団にかなり気を取られていて、必死に落とそうとしてきている。この状況なら奇襲が出来るはずだ。
「ビックハットよりライン1、ライン2、ショータイムだ。一撃で決めてこい！」
「まさか早速実戦で使えるとはねぇ。待ってましたよこの時を！」
「大佐は俺をスピード狂にでもするつもりですか？　説明を受けたときは意味が分からなかったですよ」
二機が奇襲のための準備に入り、残りの機体が交互に前面に出て浮遊装甲を展開しながら攻撃の雨を防いでいる。
ライン1が腰部ハードポイントに装備していたハイブリッドライフル用の円柱型外部ジェネレーターをレボルバー部分に接続する。
AIによる機械音声がこちらにも聞こえ始めた。
―ハイブリッドライフル・ブリューナク発射シーケンス開始します―
―トリガー、リボルバーコンデンサー、ガンバレル展開―
―外部ジェネレーターの接続を確認しました。エネルギー供給を開始します―
―専用弾をマガジンからガンチャンバーに装填―

―リボルバー内粒子増加を確認。回転加圧開始します―
―高密度粒子の生成を確認。ガンチャンバーに放出開始―
―専用弾のコーティングを開始。コーティングパターン《ピアース》―
―弾丸内高密度粒子装填率２５％……５０％……７５％……１００％―
―弾丸外殻コーティング完了しました。ブリューナク発射可能―
この間何と三十秒。何とか防ぎ切れたようだ。
事前に彼らが部隊を巻き込んで訓練をした甲斐があった。
「ライン１より全機へ。ブリューナクのチャージ完了！　行けるよ！」
「よし、全機作戦通りに動け」
「「了解！」」
一斉にスモークを発生させ、小隊がいる半径１００ｍほどが煙に包まれる。
そこからライン１を抱えて追加ブースターを最大出力まで上げてライン２が一気に降下する。そして残りの八機で前進して、大型艦船の注意をひきつける。
ライン２はわずか数秒で時速１０００ｋｍまで速度をあげ、更に加速していた。
「うおおお？！　さすがに速すぎるぞこれ？！」
「ちょっとライン２！　地面とキスだけは勘弁よ！　ちゃんと動いてね？」
「分かってるよ！　俺はちゃんと女の子とキスしたい。ってかまだ速度上がってるし！　八秒後に離すぞ準備しろよ」
「了解！やってやるわよ」
１００ｍの低空飛行で音速を超えているのだが、郊外で本当に良かった。新しく開拓するための山間部で人的被害を気にしなくて良かったのだ。木々は風圧で折れているものがあるが、この際仕方ない。

「後は、任せたぜ。決めてこいライン１」
タンカーの真下に潜り込むようにライン１がライン２より落とされた。
「当たれええええ！」
ライン１の叫びと共に放たれた弾丸は、轟音を響かせ青い輝きを放ちながらタンカーの船底に向けて飛翔する。
弾丸の外殻にコーティングされた粒子がらせん状に分散することにより、敵の粒子シールドを攪乱し、貫通力が殺されずに命中して激しい金属音が鳴り響く。
そして、命中の瞬間に弾丸内に圧縮された高密度粒子が解放され巨大な粒子の槍となって船に突き刺さった。
直径５０ｍ長さ１００ｍの細長い円柱に近い円錐形の青白い槍。
まさしく雷を体現したブリューナクといったところか。
船体の六分の一が消し飛び、制御が出来なくなったタンカーが墜落していく。
その後墜落したタンカーの艦橋をマップスで占拠し、めでたくテロリスト達の逮捕と半壊しているが機体サンプルがとれた。
「やれやれ、これでさすがに終わりだろ」
一番のでかぶつを撃墜したことと、首謀者が逮捕出来たので、ほぼ収束したと考えて良いだろう？　さすがに疲れたぞ。

４月２６日１８００　ミヤト動乱に関与したテロリストの制圧完了

第十七章「おかえり」

第十七章「おかえり」

４月２６日２０時００分、派遣していた部隊が帰還した。
私もガレージに出向いて隊員達を迎える。
「諸君ご苦労だった。初の実戦だったが、良く皆無事に帰ってきてくれたな」
「いやー、一日中働いたので疲れちゃいましたよ」
ライン１の武田京子が大きな伸びをしながら笑顔で答える。
気を抜きすぎだが、まぁ良いか。
「ガンドック小隊、全員無事帰還しました」
逆に犬塚剣の方は敬礼をしながら帰還報告をする。
真面目で大変よろしい。
それを見て慌てて武田が敬礼をする。
「ライン小隊、全員無事帰還しました」
隊員達がその様子を見て大笑いする。
「次からはそれを最初にするように」
「了解しました……」
顔を真っ赤にしながらうつむいている。可愛いところもあるじゃないか。
とりあえず、一度咳払いをして声の調子を整えて、私がパイロット時代に作戦から帰還したときに宮野大将がかけてくれた言葉の真似をする。
「みんな、おかえり」
私の笑顔に皆顔を見合わせて驚いている。
そんな驚かなくても良いのになぁ……。
「「ただいま」」
皆が笑顔で返してくれた。なるほど、一人も欠けずに帰ってくる

というのは良い物だなぁ。宮野大将もこういう気持ちだったのだろうか。
その後、皆で食堂に行き食事を一緒にとることになった。
田口軍曹が涙を流しながら良くやったと隊員を褒め称えている。
そのデレっぷりにライン小隊一同は面食らっているが、ガンドック小隊の方は大笑いしている。
きっと来年か再来年にはライン小隊がこの光景を見て大笑いするんだろうな。

食事を済ませ自室に戻ると宮野大将から携帯端末に連絡が入った。
プライベート用の通信か珍しい。
「おう、今日はうまくやったようだな」
「おかげさまで。ってところですよ。宮野大将の助言が無ければ恐らく痛い目見てました」
「ほぉ、随分謙虚だな。浮かれても良いんだぞ？　初勝利だろ」
「ハハ、ホッとはしてますよ。それに浮かれてたらまたお説教でしょ？」
宮野大将は私の応答にクククと笑っていた。
「よく分かったな。正解だ。次も頼むぞ坂本大佐」
あれ？　ひよっこじゃなくなった。少しは認められたのかもしれない。
「任せてください」
「そういえばだ、レトリア連邦の方で諜報部員が数名逮捕されたらしい。罪状はテロ行為の扇動だそうだ」
なるほど、一連のテロ行為は裏にレトリア連邦がいたのか。
「で、それに対してこちらはどう動くのですか？」
「ようやく会議で合意しかけてるんだ。一応、平和的に事を進めると言うことで、非難声明だけだ」
良かった。こちらから攻めに行くことは無かったか。
「となると、当分は暇出来るってことですかね」

「ハハ、あんまサボりすぎるなよ。仕事を山のようにおしつけるぞ」
「勘弁してくださいよ」
2人で笑い合って通話終了の挨拶をする。
「では、失礼します」
「おう、またな」
携帯端末をベッドの上に放り、自分も倒れ込むようにベッドに飛び込む。
あぁ……そうだ。サナに連絡しなきゃ。
「龍ちゃんおつかれさま」
「サナの方もおつかれさま」
「大変だったみたいだね。身体の方は大丈夫？」
画面を見るとまだ中央司令部のオフィスにいるようだ。
おそらく事件の事後処理で残業中の所だったんだろう。そんな中でこちらの心配をしてくれている。
少し申し訳ないので、今日は早めに切り上げた方が良さそうだ。
「胃が痛くなったこともあったけど、大丈夫だよ。メチャクチャ疲れたけどね」
サナがぽんと手を打って納得したような顔をした。
「なるほど、それでベッドで横になってたんだ。んじゃ今日はこの辺にしとこうか」
「ありがと。そういえば、今度、有給とってこっちに来ないか？ちょっとした賭けに勝って、食事を2人分おごって貰えることになった」
「へー、何があったの？」
徳川大佐と毛利大佐から挑まれた賭けの内容を説明すると、まるで学校の先生のような口振りで褒められた。
口調は演技がかっているが嬉しそうにニコニコしている。
「よく頑張りました。時間が決まったら教えてね。絶対遊びに行くからさ」
「それじゃ、おやすみ。あまり無理するなよ」

「心配しないで大丈夫だよ。後少しであがるからさ。おやすみなさい。ゆっくり休んでね」
電話が切れると意識があっと言う間に無くなって、次の日は危うく寝坊をするところだった。
最後の最後に締まらないなぁ……と苦笑いしながら執務室へと向かう。

以上の出来事が私のハガネの指揮官として最初の作戦となった日の出来事だ。
携帯端末に映し出されるニューストピックはテロ行為があった割には、明るい論調で書かれていた。
機械の英雄達という見出しで、キーナ基地の部隊が映っている。
後で、みんなのネタになるな。
「さてと、今日も平和だと良いなぁ」
太陽に向かって大きく伸びをした。

第一章「事後処理」

第一章「事後処理」

「終わったぞぉぉぉ！」

５月３日日曜の１６時、執務室の机を両拳でドンと叩き、天井をあおいで腹の底から叫んだ。

山のようにたまった報告書を遂に書き上げて、机の上に突っ伏す。

「宮野大将め……ホントに仕事を山のように押しつけてきたよ……」

一週間前に起きたヤポネ首都ミヤトにおけるテロの報告書だけでなく、他にも色々と書かされた。

今回の市街戦における戦術レポート以外にも、これからの対応策など、一部上の人間がやる物と思われる仕事までである。

おかげで、私のゴールデンウイークは明日からで他の人とは一週間ずれてしまった。

「疲れた……眠い……」

気が抜けたせいか、昔のサボり癖がよみがえってきた。

そのまま上半身を机に預けようとするが、寝てしまってはダメだと頭を横にぶんぶんと振って目を覚ます。

「コーヒー飲みに行こう」

軽い運動とカフェインで眠気を解消する作戦に出て、リフレッシュルームに向かった。　リフレッシュルームにつくと休日で人が少ない中、田口軍曹が何かの資料を見ていた。　集中しているためか、こちらには気づいていない。

コーヒーに砂糖とミルクを入れてから、一口分を飲み込み、頭を上官モードに切り替える。

「田口軍曹、何を見ているんだ？」

「あ、これは大佐殿。来週から入ってくるパイロット候補生達の資料を読んでいたのです」

報告書で忙殺されていて、忘れかけていたが、候補生が来るのはゴールデンウイークが終わる来週からだった。
「そうか。もうそんな時期か。今年もよろしく頼むぞ教官殿」
「ハッ！　ご期待に応えられるよう努力します」
以前候補生達の特性を一人一人説明してくれたが、裏ではこのように資料とにらめっこをしていたのか。
上官なのにサボりかけた自分が少し恥ずかしくなる。
これ以上邪魔をしてはならないと思い、コーヒーを飲み干し、その場を後にした。
自分も新人の資料をしっかり確認しておかねばならない。
残念なことに仕事がまた増えてしまったが、文句を言っても仕方ない。
眠気を完全に払うために、執務室に走って戻った。

気合いを入れて走ったのは良かったのだが。
「あれ？　思った以上にきついな」
久しぶりの全力疾走に身体がついていけず、息がすぐに苦しくなる。
「最近書類仕事ばっかりだったからな……」
ちょっとした身体の衰えに衝撃を受けるが、そんなことよりも。と頭を切り替えて仕事に戻る。
今夜は徳川・毛利両大佐から賭けの賞金が手に入る予定なのだ。
残業で行けなくなってしまっては、格好がつかない。
それにわざわざミヤトからサナも呼んである。
遅れたら格好がつかないで済む問題ではなくなってしまう。
気合いを入れ直してパソコンに向かい、資料の確認をする。
受け入れ人数８０人。何と去年の１．５倍だ。
「パイロットが増えてるとはいえ、いくつまで増えたら頭打ちになるのやら」
思わず苦笑いをしてしまった。

資料を斜め読みで一通り見終えたところでファイルを閉じ、17時になるまで、初日の挨拶を適当に考えながら時間を潰した。

5月3日17時。私の短いゴールデンウイークが始まる。

第二章「賭けの結果」

第二章「賭けの結果」

仕事を終わらせて、制服から着替える。
今日は先日一緒に戦った徳川大佐と毛利大佐が相手なので、念のため落ち着いた格好の衣装で行くことにしたのだ。
黒のストライプの入った白いYシャツとスラックスをはいて鏡の前に立ってみる。
「何だか変に緊張してきたな」
同じ階級とは言え相手は大先輩である。
前後不覚で失礼なことがあっては大変だ。
念のため多めにアルコール分解薬を持って行こう。
更に事前に酔いにくくする飲料も服用して、車でキーナ市街地に向かった。

まずは、地下リニアのあるキーナ駅にサナを迎えにいく。それから待ち合わせの店だ。
車を停めて、改札口で待っていると、薄手の黒い上着を羽織って、肩の出ている花柄があしらわれた白いワンピースを着たサナがやってきた。
制服以外の服装を見るのが久しぶりというのもあって、少しドキッとしてしまう。
ちょっと幼い感じがかわいい。
「お待たせ。ん？　何驚いてるの？」
相変わらずよく人の顔を見ていると感心してしながらも、理由を口にするのが少し気恥ずかしくて頬をかいてしまう。
私の癖をよく知っている彼女はこの反応を見て、嬉しそうに笑いながら私の頭を撫でてきた。

残念ながら余計恥ずかしい思いをしてしまうことになった。
「そういえば、なんか格好が硬いけど、どしたの？」
「一応同じ階級とはいえ大ベテラン相手だから念のため。ね」
なるほど。と手をうって納得してもらえた。
「変かな？」
「ううん、制服とはちょっと違う真面目さがあってかっこいいよ」
首をちょっと傾けて上目使いで見上げながら言われたので、思わず一瞬頭がフリーズしかけた。
当初持っていた緊張とは別のドキドキが襲ってくる。
「ところで、今日はどこに行くの？」
実はびっくりさせようと思って、まだ行き先を教えていなかったのだ。
さすがにこういったことは超能力者ではないので、サナでも予測できない。
「着いてからのお楽しみでいかがでしょうか？　お嬢様」
サナの質問で我に返り、緊張を紛らわすために、遊びの意図も込めてちょっと執事っぽく答えてみた。
気取った口調で答えた私の言葉を聞いて、ニッコリと微笑まれる。
「お願いしますね。私の執事様」
おそらく、私の意図は見抜かれているだろうけど、ちゃんと驚くかな？
ちょっとワクワクする。

車で両大佐と待ち合わせている場所につくと、何と2人とも既に待っていた。
いきなり謝罪からとは、失敗した。
「こんばんは。すみませんお待たせしてしまって」
「お、来たか坂本君。時間前だから気にしてはいないが。何だヤケに堅苦しい格好だな」
徳川大佐と毛利大佐はポロシャツに半ズボンだ。しかも、観光客

向けのおみやげ用に売られている椰子の木柄を着ている。
確かにキーナ市は5月で十分暖く、観光客としてならその格好は間違ってはいないのだが、面食らってしまった。
「ほほぅ、坂本君は私服姿も真面目なのか、若い内は遊びを覚えたまえ」
いきなりダメ出しの連続で少し困ってしまう。
「いやー、聞いた場所が聞いた場所だったので。ついついかっこつけようとしてしまって」
あなた達が相手だからですとは言えず、頭をかきながら嘘の言い訳をしてしまった。
これ以上のダメ出しをもらわないように話題を変えてしまおう。
「紹介します。今日ご一緒させていただく、澄川早苗です」
私の紹介で、サナがぺこりと頭を下げて挨拶をする。
「はじめまして。澄川早苗です。坂本君がお世話になったみたいで、今日はよろしくお願いします」
「おぉ、なかなか出来たお嬢さんではないか。坂本君のこれか」
徳川大佐が決め顔で小指を立てている。
まぁ、誰でも分かりますよね。
「はい。その通りです」
「やはりか。予想通りだったな徳川よ」
2人が笑い合っていた。どうやら今回は賭けではなかったようだが誰をつれてくるか予想しあったらしい。
「私達も1人では無く家族連れなのでな。後で紹介させて貰うとしよう。既に中で待っているよ」
困った。緊張の種が増えた……。隣にサナがいてくれて本当に良かった。
お店はキーナ市の浜辺から伸びた木造の橋の先にあるコテージレストランだ。
1団体につき1コテージがあてがわれ、注文が入るとオープンに

なっているウッドデッキに小型の運搬用ボートが料理を自動で運んでくる。
ちょっとしたレジャー感もあり家族連れからカップルまで大人気で、サナもびっくりしてくれた。
「雑誌で見てから、いつか行きたいと思ってたんだよね！　やった」
弾んだ声で両大佐にお礼を伝えると、２人とも笑顔でどういたしまして。と返した。

予約してある部屋に入ると既にご家族の方達が待っていた。
その中のただ１人を除いてきっと両大佐の家族だろう。
その１人は見覚えがある眼鏡をかけた痩せ気味の初老の紳士。
「えー……っと。宮野さん？」
「おう！　よく来たな坂本！　宮野さんとはまた久しい響きだ。今日はそれでいけ。お、澄川も一緒か」
この声、この砕けた感じ。間違いなく本人だ。
「何でいるんですか？！」
「驚かそうと思って」
ちろっと舌を出しながら、全く悪びれずに理由を告げられる。
お酒が入ってないのに頭が痛くなりそうだ。
「伏兵や奇襲に対する心構えが足りないようだな坂本」
どや顔でそんなことを言われても困る。
サナの方にアイコンタクトをとり、知ってた？　と合図を飛ばすと首を横に振られた。
「まぁまぁまぁ、宮野さん。今日は一応彼が主賓なので、からかうのはこの辺にしておきましょう」
徳川大佐が助け船を出してくれた。
皆が席につき改めて自己紹介をする。
徳川大佐は男女１人ずつの４人家族、毛利大佐は女の子２人に男の子１人の５人家族だ。
子ども達の年は１５から１９くらい。

３０歳以降に出来た子ども達らしい。
ゴールデンウイークに家族旅行といったところだろう。

運ばれてきた飲み物が各自のテーブルに置かれて、みんなで乾杯をする。
最初のビールを飲み終えた時に、ふとあることに気が付いた。
「あの、今日まで私は仕事してたんですけど、お二方はいつからゴールデンウイークでした？」
聞くと2人とも普通の日からだった。
どうやら報告書だけで、特に休みをずらしてまで忙しくなかったとか。
「宮野さん私の休みが遅れた原因って、間違いなくあなたのせいですよね？　仕事が遅いお前が悪いって嘘じゃないですか！」
「フフフ、正解だ坂本。何、経験不足な君には早く一人前になってもらいたいからな。わざと仕事を押し付けた」
やっぱり予想通りだった。少し頭に来たのでわざと棘のある言い方で文句を言うことにした。
「で、自分はのんびり休養に来たと？」
「さて、それはどうかな？　他の目的も十分あるかもしれんぞ？　仕事で重要人物に会いに来たとか」
ニヤニヤしながらシラをきってきた。
隣のサナはその様子を見てふふっと軽く笑っている。
「宮野さんも坂本君と同じで照れ屋さんですね」
さすがサナだ。私では分からなかった何かにしっかり気づいたらしい。
が一体なんなんだ？
「コラ、澄川それ以上は言うなよ？　上官命令だ」
人差し指を立てて、大げさな動きで口の前に持ってきている。
「報告で坂本大佐のことを詳しく教えろと根ほり葉ほり聞かれたよ。賭けのことも含めてな。そうしたら、我が輩も是非参加させてもら

おうと言い出したのだ。宮野さんも今日まで仕事だったぞ。おかげで君達とスケジュールを合わせるのが難しかったよ」
毛利大佐が宮野大将の制止のそばからネタバレをする。
宮野大将は眉間にシワを寄せながら毛利大佐を一睨みするが、
「宮野さん、海軍は指揮系統が別なのであしからず」
肩をすくめながら、あっさりと回避してしまった。
それを聞いて宮野大将は笑い出し拍手をしながら、やるじゃないかと毛利大佐を称える。
そして、手元にあった3杯目のビールをかなりのペースで飲み干した。
みるみるうちに顔が赤くなっていく。
「愛弟子の初勝利だからな。祝わない訳にはいかぬだろう」
隠す必要がなくなったためか、酔っ払い始めたためか、直球で理由を投げつけてきた。
やれやれ、この人は難しい人だなぁ。
とにもかくにも弟子として礼は返そう。
「ありがとうございます。ビールおつぎしますよ」
「澄川や他の女性の方が良いが仕方ない。ほれ」
文句を言いながらもグラスをこっちに差し出して来た。
「良い師匠ではないか。なぁ坂本君」
「この人が師匠だと苦労が多いですよ？　徳川さんも一緒に弟子入りいしてみませんか？」
「ハハ、私は遠慮しておくよ。後進も育てなければならない立場なのでね」
残念ながら振られてしまった。
お酒も入り、美味しい料理を楽しんでいると毛利大佐が私の提案を逆にした冗談を言い始める。
「そうだ坂本君、私の弟子にならないか？　君なら大歓迎だ」
「おい、毛利。お前はいつから狐から猫に変わったんだ？　坂本はお前にはやらん！」

「フフ、宮野さん。これは泥棒ではなくハンティングですよ。隙あらばというやつです」
「お！　良いアイデアだ。だったら私もその狩りに名乗りをあげるぞ」
「貴様等にあいつの師匠はつとまらんよ。あいつは私の弟子だからな？　油断すると痛い目見るぞ」
3人ともノリノリで本人の意志とは無関係に話を進めていく。
能力を高く買ってくれるのは嬉しいが、年配の男性が1人の男性を取り合うというのがシュールな光景だと思って苦笑いしてしまう。
男達がこんなやりとりをしてる一方で、女性陣も子ども達も既に互いに面識があるらしく、勝手知った様子でおしゃべりをしながら、笑い声をあげている。
サナの方も夫人達と仲良くなったようで色々話しているのが聞こえる。
その話題の中に旦那を尻の下にしく方法とかが聞こえて来て、少し寒気がしたのは内緒だ。
ただでさえ勝ち目が無いのに、そんな技まで身につけられたらどうしようもなくなる気がする。
普段部下達の上に立っている3人のおじさま達の家庭内地位が何となく想像出来て、思わず顔が引きつった。
「坂本さん。早苗さんを泣かせることがあってはなりませんよ？」
下らない想像をしていたので、突然の徳川夫人からの忠告に驚くが、そんなことをする訳がない。
「そんなことはしないですよ」
自信満々に胸を張って宣言をする。
「坂本さんがダメなら、いつでも家に来なさい。あなたなら大歓迎です」
無いと言ったそばから酷いことを言わないでください。
こんな感じで徳川夫人はちょっと気が強そうな方だ。徳川大佐は頭あがるのだろうか？

「あらあら、カシゴマも良いところだからいつでも遊びに来てね」
毛利夫人は対照的にゆるめではあるが、毛利大佐を上手く丸め込んで動かしていそうな雰囲気がする。
両夫人に随分と好かれたようで、サナの方も遊びに行くと約束をしている。
そんな楽しそうな様子を見てホッとするのも束の間。
おじさま3人からお酒を次々注がれた私は分解薬を飲む暇もなく、気絶した。
気絶する直前、遠のく意識の中で、サナに薬のことを伝える。
「サナ……鞄の中に……薬が……」
「へ？　龍ちゃん？　わっ！？　ちょっと大丈……？！」
最後に認識出来たのは慌てたサナの声と驚いた顔だった。

第三章「新たなる胎動（前編）」

「う……うーん」
瞼を閉じたまま、寝ぼけた頭で現状確認を行う。
私は一体どうしたんだろうか？
確か酒を飲みすぎて気絶というか眠ってしまったような記憶があるが、その後からの記憶が無い。
ただ頭痛や吐き気が無いので二日酔いはしていないようだ。
サナが薬を飲ませてくれたのだろうか？
背中の感覚は柔らかい。おそらくベッドの上にいる。
でも、この枕とベッドの感覚がいつもと違う気がする。
それにさっきから頭に何かの感触がある。
非常に落ち着くというか、ちょっと気持ちが良い感覚だ。
このまま二度寝したくなるが、さすがに周りの状況を確認しなければと思い目を開ける。
「あ、龍ちゃんおはよう。身体の調子はどう？」
サナはベッドに座りながら、こちらの顔を心配そうにのぞき込んできている。
「あぁ、おはようサナ。ちょっとつかれた感じはするけど、気分は悪くないよ」
「そっか。良かった。心配したんだからね」
そのまま笑顔で頭をなでられ続けた。
ん？　何でサナが部屋にいるんだ？
「これは夢か？」
「どうしたの急に？　やっぱり調子がよくない？」
「いや、朝からサナが一緒にいるって今まで無かったからさ」
でも、この頭のなでられている感覚は間違いなく現実だ。
「何だかんだで2人ともお仕事で忙しいからねー。言われてみれば、朝まで一緒にいるのは初めてかも。それにしても昨日はびっくりし

たよ」
「倒れたところまでは記憶があるんだが、あの後どうなったんだ？」
「急いでアルコール分解薬を飲ませて、一足先に運転代行で帰ったんだよ。ホテルの方は宮野さんが手配してくれたから、私も一緒に泊まっちゃった」
宮野大将が私のメンツを潰さないように気を使ってくれた結果がこれか。
今の状況がようやく理解出来た。
「ところで、そろそろ起きようと思うんだけど、撫でるのやめて貰って良い？」
もうちょっと撫でられ続けるのも悪くないが、もう時計は9時を回っていてチェックアウトしなければならないので、惜しいが仕方ない。

シャワーを浴び、身だしなみを整えてホテルからチェックアウトして、少し遅い朝食に出かけることになった。
「そう言えば、世間的には明後日にゴールデンウイークが終わるけど、ミヤトの方にはいつ帰るんだ？」
「今日の夜にでも帰るよ。明日は明後日に備えてゆっくりするつもり」
ちょっと残念だが仕事なら仕方ない。
今年のゴールデンウイークは他人と少しずれているのだ。
「そんな寂しそうな顔しないでよー。そうだ龍ちゃんがミヤトに来れば良いじゃん」
「それもそうか。なら一緒について行こうかな」
「やった。久しぶりに長く一緒にいれるね」
綺麗に並んだ白い歯を見せながら喜んでくれている。
その様子を見て私も自然とにこやかな顔になっていた。

さて、今日はどこに行こうかと2人であれこれ悩んでいると突然

電話がかかってきた。
電話は松平からで、サナに断りを入れて電話に出る。
「もっさん、出来る限り早くミヤトに来て」
余りに突然過ぎて意味が分からなかった。しかも何故か早口だ。
「松平か。用件は何だ？　プライベートで遊びの誘いなら、もう間に合ってるぞ」
「え、僕のゴールデンウイークは来週からだよ？　ようやく片付けが終わって綺麗になったところなんだけど」
この反応から考えると、残念なことに仕事の話らしい。
各種機器の搬入やら戦闘のせいで色々整備しなおさないといけない。と言っていたことを思い出して、休みが遅れていることに納得がいった。
「で、急いで私に来てほしい用件は何だ？」
「現場のアイデアが欲しいのと、テストがしたい。もっさんの方が僕より適任だからね」
「分かったよ。明日で良いか？」
本当に仕方が無いが、断るわけにもいかないので了承する。
それに何についてのアドバイスとテストも大体予想がついていたのだ。
「さすがもっさんだね。んじゃ楽しみに待ってるよ」
何やら興奮している様子で電話が切られた。
ため息をついて、サナに謝罪をする。
「すまない。ミヤトに行くのに変わりはないが、明日仕事が入った」
「今の松平さんからだよね？　ちょっと残念だけど、仕事だもん仕方ないよ」
先程までの楽しそうな笑顔が少し暗くなっている。
そんなサナの様子を見て、とあるお願いをすることにした。
「明日の仕事つきあってもらっても良いか？　サナの協力があると凄くはかどる」
一緒にいられる理由作りとしては、いささか華が無いが気にした

ら負けだ。
「え？　松平さんが良いなら、もちろん一緒に行くよ」
私の提案で笑顔に明るさが戻った。
年下なのにお姉さん振ることも多いが、意外と甘えたがりでもある。
やれやれ、ギャップというのは恐ろしい。

松平に詳しい内容を念のために再確認すると、予想した通りの物だった。
サナを連れて行くのも大歓迎らしい。
ヤポネ初の航空戦艦の歴史が始まろうとしている。
恐らくゴールデンウイーク最後の休暇になるだろう今日を目一杯楽しんでミヤトに向かった。

第三章「新たなる胎動（後編）」

次の日の朝、サナを迎えに行ってから菱田重工に向かった。
前回来たときには無かった大型の施設がある。
「おはよう！　もっさんにさっちん」
ボサボサ頭の白衣の男、松平が嬉しそうに駆けてきた。
２人で簡単に挨拶を返して早速新しい施設について聞いてみた。
「あれはこの前来たときは無かったな。ろ獲したやつが入ってるのか？」
奥行きは５００ｍもある施設だ。あの改造タンカーが入っていてもおかしくはない。と考えていたのだが、松平からの答えは私の想像を越えていた。どうやら私は彼を甘く見ていたらしい。
「あぁ、あれならバラしたよ。構造把握とパーツの精度を見たかったからね。いやー、実に楽しかった！」
私はてっきり「いやー、見てよ。かっこよくなったでしょ？」と言って、大改造したものが来ると思っていたので混乱してしまった。
「となると、まさかテストしてほしいってのは」
「もちろん僕の子だよ？」
さも当然のように答えられた。
興奮気味だったのはこれが原因だったのか。新しいプラモデルでも組み立てるような感覚で作ったに違いない。変態め。
「やっぱり凄いですね松平さん」
サナも驚きを隠せていなかった。

艦船用の施設に通されると巨大な長細いモーターボートのような船が建造されていた。
「随分と細いな」
「これはまだ素体。この後に色々つけていくってことで、まだシンプルなんだよ」

「ということは、マップスと同じで、用途によってカスタマイズ出来るということか」
私の答えに満足そうに頷く。
「その通り。そこでもっさんのアドバイスが欲しいのよ。率直に聞くね。何が欲しい？」
突然過ぎる質問に思わず苦笑いをする。
素体を眺めながら、過去の戦闘を思い出しながら考えてみる。
「マップスのメンテナンス用ガレージ。後は２中隊ほど収容出来るスペース。発進用のカタパルトデッキ」
「なるほど、マップス運用艦の基本的な装備だね。大体僕の想定していたのと同じだ。すぐ取りかかるよ」
「後は高性能な各種レーダーがいるんじゃないかな？」
サナからも意見が出る。さすが元オペレーター。情報処理関係に気が回っている。
「任せといてさっちん。それはもうＡＷＡＣＳに負けないくらいの積んじゃう」
松平のやつノリノリだなぁ。踊り出すんじゃないだろうか。
「そういえば、移動速度はどんなもんだ？」
「最大船速は時速５００ｋｍってとこかな。これだけの図体を音速で動かそうとするとジェネレータがいくらあっても足りないよ。というか空に飛ばすだけで凄い粒子食うんだよ。現状で大型粒子発生ジェネレーター４個も積んでて、どんだけお腹空かせてるの？　て感じ」
「大型コンデンサーと追加ブースターなんかどうだ？」
「あー、なるほど。後で計算してみるよ。っとそれで思い出したんだけど、こんなのどう？」
松平がそう言いながら見せてくれたのは、ただの箱にブースターが付けられた物にしか見えない物だった。
「船底に搭載して、超加速で敵地に飛ばす揚陸艇みたいなものだよ。中にマップス５機まで入るんだ。射出の初速は時速２０００ｋｍで

射程は３００ｋｍってところ。到着までの時間は理論上７から８分だよ」
あまりのとんでも仕様に思わず笑ってしまった。
「君の作る物は相変わらずぶっ飛んでるな」
「面白いでしょー。ちなみにマップスのジェネレーターからエネルギーを送ればもっと速度も出るし距離も伸びるよ。帰りもこれでバッチリ。あえて使い捨てにして大型の弾丸としても扱えます！」
説明を終えたなのか、胸を張りながら荒い鼻息をムフーと出している。
相変わらず機械関連は楽しんでるな。と感心する。
後は任せても勝手に色々つけてくれるだろうと思えたので、話題を変えることにする。
どんな道具でも考えれば使いようがある。
「そういえばテストは何をすれば良い？」
「んじゃ、それも早速始めようか。とりあえずシミュレーションルームに案内するよー」

部屋に入ると艦橋内を真似した配置で各種機器が置かれていた。
「さてと、もっさんはそこの指揮官用の座席に、さっちんはそっちの火器管制オペレーター用の座席へどうぞ。今からテストするのは少人数での運用システム試験だよ。僕は艦内オペレーターを担当ね」
指揮官用の座席は周りより少し高いところにあり、室内がよく見渡せるようになっていた。
座席の前には透明な３５インチのガラス板が３つある。手元にも２０インチのガラス板が左右に３枚ずつ６枚設置されていた。
「んじゃ始めるよー。シミュレーション開始。まずはもっさんのモニターからね」
ガラス板に船体情報やレーダーと地図、味方の状況など様々なデータが表示され始めた。
試しに触ってみると各種画面が拡大されて表示されたり動かした

りすることが出来る。
「もっさんなら多分出来るかな？　専用の帽子をかぶって貰って良い？」
手元にあった指揮官用の帽子をかぶると頭の裏に何か当たった感触がした。
「地図に視点を合わせて、集中しながら手を開いてみて」
言われた通りにやってみたら地図が拡大され、手のひらを開けていく度に地図の倍率が上がって広域が表示された。
「逆に握りしめてみて」
握り拳を作ると今度は反対に地図の倍率が下がって詳細な拡大図になった。
どうやら私の動きと連動しているらしい。
「さすが、ゴースト適合者だけあって脳波コントロールは良い反応だねぇ。どんどん試してみて。基本は視点と手と指の動きだよ。慣れたら指の動き無しでもいけるはず」
通信先の選択も、地図の拡大縮小も出来るようにになっていた上に、画面間の情報移動も動かしたい方向に腕を動かすだけで済んだ。
自分の欲しい情報がほぼノータイムで手に入る。
「何というかまた無茶なシステムを組み立てたな。これも適合者少ないんじゃないか？」
「だから、もっさんを呼んだんだよー。ちなみに、使いこなせば戦闘に必要な全項目を使えるようにシステムを作りました！　まっ現実的には色々と問題があると思うから、ちゃんと人配置してよ」
えっへんと胸を張りながら説明を終える。
相変わらずサラッととんでもないことを言う奴だ。
「んじゃ次さっちん！」
「はい！　がんばります」
サナがオペレーターとして返事を返したのを見て、パイロット時代を懐かしく思い出してしまった。
「今から敵と味方をレーダーに表示するよ」

「了解です。敵味方信号確認しました」
「んで、手元にある端末でＬＩＬＳ（リルス）《ｌｏｃｋ　ｉｎｆｏｒｍａｔｉｏｎ　ｌｉｎｋ　ｓｙｓｔｅｍ》を起動させて」
「ＬＩＬＳ起動確認。へぇー、敵味方のロックオン情報が視覚化されるんだ」
指揮官用のモニターにも情報が追加された。
敵からのロックオン情報は赤色の線で、味方からのロックオン情報は青色の線で表示されている。
表示も小隊ごとや機体ごとに変換することも出来ている。
今まではターゲットマーカーが出るだけだったのが、随分と分かりやすくなったもんだ。
「さっちん、続けて援護射撃用のＡＣＦＣＳ設定に入って」
ＡＣＦＣＳ《ａｄｖａｎｃｅｄ　ｃｏｖｅｒｉｎｇ　ｆｉｒｅ　ｃｏｎｔｒｏｌ　ｓｙｓｔｅｍ》を追加起動すると、味方部隊がロックしていない敵を次々にロックオンし始めた。
更に射線の計算も同時に行われて誤射の危険性がある味方が点滅する。
「これで、私は味方機に回避するよう指示をすれば良いんですね？」
「さすがさっちん。飲み込みが早いよ。今のは牽制用のなんだけど、援護射撃のパターン変更はもっさんが指示出してね。ロックパターンを選択すればオートで動いてくれるよ」
なるほど。パターンの変更が私の仕事か。
どこの味方を守ってどこの敵を倒すか判断しろってことだな。
「サナ、援護射撃を集中に変更」
「了解。攻撃パターン集中」
今度は味方機がロックした敵にロックオンマーカーが出現した。
「なるほど。で、ロックオン対象の調整は適宜出来るんだな？」
「もちろん。タッチもしくはもっさんなら視点と人差し指でいけるよ。んじゃそのまま仮想ターゲットの撃破よろしく！」
「了解。サポート頼むぞサナ！」

「任せて龍ちゃん！」
彼我の戦力は２０対２０。さて、この艦船一隻でどこまで有利に運べるか。
「牽制射撃で敵を味方から引き離す。ＬＩＬＳによる識別で味方機から攻撃されていない敵を優先的に攻撃する」
「了解。牽制モードで攻撃を開始します」
味方がロックしていない敵の動きを止め、味方機を下げながら、残りの敵を主砲の射線に誘導する。
そして、射線上に８機をおびき出すことが出来た。
「主砲発射用意」
「了解。主砲チャージ開始します」
艦首につけられた大型粒子砲を起動させ発射準備に入る。
「射線情報を全機に伝達。……散開確認射線に味方機ありません」
「主砲発射！」
敵３機を巻き込み撃墜する。
「続けて味方機と連携して、分散した敵を叩く。指定したターゲットマーカーを味方部隊に転送」
「了解。指定ターゲットに攻撃を開始します」
散開した内の２機にマップスによる射撃と、艦船による砲撃を集中させて敵の足を止める。
そして裏から回り込むように連続発射したミサイルが背面から直撃し、バランスを崩した敵に弾丸が雨のように降り注ぎ撃破する。
「このまま残りも落とすぞ。中隊ごとにターゲット情報を送信」
「了解。２中隊にターゲットマーカーを送信。ＬＩＬＳでロック情報の変化確認しました」
無事シミュレーションが終了した。結果はもちろん勝ちだ。
「おつかれさまー。さすがもっさんとさっちんだね。息ぴったりだったよ」
「サナのおかげだ。さすがに１人だったら無理だったよ。ありがと

う」
サナの頭の上に手をのせて感謝の意味も込めて優しく撫でると、サナは顔を赤くしてうつむいてしまった。
いつもと立場が逆転していて、ちょっと嬉しい。
「ありがと。でもちょっと疲れちゃった。後、松平さんがいる前でちょっと恥ずかしいよ」
「大丈夫か？　松平休憩室は近くにあるか？」
手を頭から離すと、「あっ」と小さく残念そうな声が聞こえたが、ここは我慢だ。
「んじゃ、どうせならご飯に行こうか。お礼の意味も込めて今日は僕が出すよ」
「ありがとう松平。店もおまかせで良いのか？」
「僕のチョイスで良ければ」
「ありがとうございます。どんなお店か楽しみです」
やれやれ休みの日だっていうのに午前から疲れた。

第四章「新しい風（前編）」

結局私のゴールデンウイークは菱田重工のテストでほとんど潰れてしまった。
おかげで、大体のテストが終わってすぐに建造が始まるようで、納入が早まりそうだと言われた。
ただ、今日は連休最後の日曜日。明日からまた仕事で結局ろくに休めなかったな。
今はサナと一緒に夕食を食べるという連休最後のイベントを済ませて、ソファーで休憩中だ。
「大型連休のはずなのに、何だかとっても疲れた……」
がっくりとうなだれながら、目の前にいるサナについ愚痴を言ってしまった。
「おつかれさま。結局ほとんどお仕事だったもんね」
私を労いながら頭を軽く撫でつつ話を続ける。
「でもね、こうやって一緒に作ったご飯食べたり、空いた時間に映画見に行ったりで私はとっても楽しかったよ。ミヤトに来てくれてありがと」
相変わらず臆面もなく恥ずかしいことを言われたので、下げた頭をあげられなくなった。こんな調子だと一生頭上がりそうに無いなぁ……。
「また、しばらく会えなくなるね」
楽しそうな声から少し物悲しそうな声に変わった。
顔が見えないので表情が分からないが、多分ちょっと残念そうな顔をしているはずだ。キーナに帰る前に安心させてあげないといけないだろ。
そう思って私の頭を撫でている手を握って、逆に頭を撫で返す。
一瞬驚かれたが、撫で始めるとそのまま私に頭を預けてきた。甘い髪の匂いがしてこちらも心臓が鼓動を速めているが、落ち着けと

自分に言い聞かせて冷静さを保つ。
「次の長期休暇もまた一緒にいるから安心してくれ。電話もちゃんとする」
「うん、ごめんね何か気を使わせちゃって」
「気にするな。あの基地で生活していて、唯一気が抜ける時間だからな。こちらがありがとうだ」
地下リニアの時間が来るまで、頭を撫で続けて甘えて貰った。
普段こちらが甘えているので、せめてもの感謝だ。
「んじゃ行ってくるよ」
「行ってらっしゃい。身体には気をつけてね」

翌日の朝、気持ちを入れ替えて、新しく入ってきたパイロット候補生達の入隊式に参加する。
「ようこそキーナ空軍基地へ。諸君は今日から１０ヶ月間、人型兵器マップスのパイロット候補生だ。辛い訓練が待ち受けているが、1人も諦めることなく、全員が訓練課程を修めることを願っている。以上だ」
特に気がきいた挨拶を思いつけなかったので、何の面白みもなく普通に済ませてしまった。
田口軍曹の方をちらっと見ると、既に眉間にシワを寄せて教官モードの強面になっている。
あの顔の様子を見ると明日からキーナ基地名物、田口軍曹怒りの咆哮と愛と怒りの鉄拳が蘇るようだ。今年も騒がしくなるに違いない。
スタッフ紹介に移り、医療チームやメカニックが挨拶を済ませていく。最後に教官である田口軍曹に挨拶が回ってきた。
なぜか何度も咳払いをしながら、鋭い眼光で会場の奥を睨んでいる。
「挨拶の前に……おい！　そこの後ろから3列目の右から5番目のお前！　名前は小早川だな？」

小早川と呼ばれた小柄な男性は田口軍曹の怒鳴り声に驚き、ビクッと大きく震えた。
「居眠りをするなシャキッとしろ！　姿勢を乱すな！」
身体が振動するような怒鳴り声が発せられた。思わず私までビックリして体内が一瞬冷えた感覚がする。
この大声がきっとどんな言葉で説明よりも、分かりやすい田口軍曹の紹介だ。
マイク越しだと迫力が5倍増しだな。耳鳴りまでしそうだ。
その後は普通に挨拶が行われ、田口軍曹の怒鳴り声以外は特に大きな問題も無く入隊式は終わった。
ただ、その怒鳴りが原因だったのだろう。退室時も候補生達は私語を一切せずに出て行った。
候補生たちが出て行った後、スタッフ達が「今年もやるなー」とか「いつ田口軍曹はデレるんだろうな？」といった感じで、田口軍曹の怒鳴り声について笑いながらあれこれ言っていた。
私もつられて本人についつい話しかけてしまっていた。
「やれやれ、まさか入隊式でいきなり怒鳴るとは思わなかったよ」
「本日から教官ですからね。しっかり手綱を握ってやらないといけません」
正式に教官となってから初めての候補生だからか、私以上に気合いが入っているようだ。さすが鬼軍曹。
「手綱を引きすぎて窒息死させないようにな」
「分かってますよ。任せてください」
田口軍曹はドンと胸を叩いて自信満々な笑みを作っている。
その格好がいつも以上に様になっていて、とってもかっこよかった。

第四章「新しい風（中編）」

執務室に戻って書類整理をしていると、守衛から連絡が入ってきた。
どうやら松平がやってきたそうだ。
確か彼は遅めのゴールデンウイークだったはずでは？
待たせても仕方ないので中に入ってきて貰うことにした。
「やあ、もっさん昨日ぶり」
「あぁ、まさか土日まで巻き込まれるとは思ってなかったよ」
「まぁまぁ、かわりにこうやって来たんだから良いでしょ？」
かわりにというのは置いておいて、何故松平がやってきたのかは興味がわいた。
「そういえば、休みに何しに来たんだ？」
「遊びにきたよ」
思わず大きなため息をついてしまう。
「おい、私は仕事中なんだが……」
「へ？　あぁ、大丈夫大丈夫。他人にとっては仕事してるようにしか見えないから」
あぁ、なるほど。マップス関連でやってきた訳か。またオヤジさんと何か作るのかもしれないな。
「で、今度は何するんだ？」
「第三世代型のプログラムテスト。ちょっとした改良を加えてみたんだよ」
「へぇー、んじゃオヤジさんの方に君が行くと連絡しておくよ」
内線で連絡をとるために通信機に手をかけると思いがけない一言を言われた。
「もっさんも来てね」
書類があるんだが……いや、仕方ない話だけでも聞いておこう。
「何故私が？」

「この基地でもっさんが一番安定してるからね。データ取りしやすいんだよ。後は初めて第三世代型を乗る人が3名ほど欲しい」
「あー、なるほど。メンバーについてリクエストはあるか？」
「んー、個人的にはイッシーと武ちん希望。後はハガネのテストパイロットだったタグぽんが良いね」
相変わらず分かるような分からないようなニックネームをつけられたので、一瞬誰のことか混乱する。
「一応確認するが、ガンドックの石山、ラインの武田、そして教官の田口軍曹で良いんだな？」
「そうそう。よろしくー。僕は早速調整に行ってくるよ。準備が出来たら呼ぶから待っててね」
くるっと踵を返し、軽い足取りで部屋から出て行ってしまった。
「今日の書類片づくかな……」
1日の大半を潰された艦船の各種テストを思い出し、頭が重くなった。

1時間後松平から連絡が入ったので、再度指名された3人に連絡を入れてガレージに集まった。
「皆様、ご協力ありがとうございます」
松平が深々と様になった礼をしている。そういえば一応企業勤めのサラリーマンなんだよな。
意外とこういう外の場ではしっかりやっているのか。
「っと堅苦しい挨拶はこんなもんで、本題に入るね」
訂正しよう。サラリーマンとして大丈夫なのかこいつ……。
頭の固いお偉いさんと会わせたら大変なことになるんじゃなかろうか。
そんな私の懸念をよそに松平は説明を続けていく。
「今日組み込んだプログラムはより機体の反応性を高めるための物なんだけど、人によって使い勝手が良かったり悪かったりなんだよ。ってことでそのテストに付き合ってくださいな」

松平が説明しながら、オヤジさんが集まったメンバーにヘルメットが手渡す。
「簡単に言えば、そのヘルメットで脳の状態を観察して、ダイレクトに機体を動かすってことだね」
初代マップスのゴーストと戦艦の操作を思い出す話だ。
やはりそれで私も呼ばれたのか。
「まっ、百聞は一見にしかずってことで、よろしく」
用意されたテスト機にそれぞれが搭乗していく。
球状の空間の真ん中に座席が設置してあり、モニターが壁にそって360度展開されている。
久しぶりのコックピット席に緊張しているのか、少し手に汗がにじむ。
「みんな乗ったみたいだね。んじゃ、機体を起動させてー」
起動させるとモニターにガレージの風景が映し出され、機体の情報が次々に表示されていった。
「次にコントロールパネルで操縦モードの設定を開いて」
言われた通りに座席正面にあるパネルの操作を行う。初期設定を行ってくださいと案内がAIから通知された。
「そのまま案内にしたがって設定を行って。特に難しいことはしないからさ」
〈brain reaction control system（BRCS）設定開始。搭乗者の氏名と階級を登録してください〉
「坂本龍。階級大佐」
〈坂本龍大佐の登録を確認しました。次に脳波と機体制御の親和性を検定します〉
右手をあげるイメージを始めとする色々な動きをイメージさせられた。
そういえば、8年前に行った適性検査もこんな感じだったな。
〈親和性95%、BRCS稼働率最大で設定。システム稼働率はコントロールパネルにて変更可能です〉

どうやら無事に設定が終わったらしい。
「おー、さすがはもっさん９５％かやるねぇ。イッシーは３５％。武ちんは５０％。タグポンは４０％か」
「アハハ！　タグポンって、おなか痛い。あの鬼軍曹がタグポンだって！　みんなに聞かせてやりたいわ」
何かを叩く音がするほど、武田が大笑いしている。
全機同時に通信を入れていたせいで、松平がつけたニックネームがただ漏れになっていたのが原因のようだ。
「やめておけ武田。……しかし、タグポンか……っく、ハハハ」
そう言う石山も笑いが殺せていない。彼でも笑うんだな。
小山が聞いたら怒られそうなことを考えてしまった。
「おい、武田、石山。それ以上笑って見ろ。特別に候補生達の訓練に参加させてやる」
さすが教官モードの田口軍曹。低くしゃがれた声による脅し文句の迫力がすごい。
ちなみに私のもっさんというニックネームは既に松平を紹介した時に知られている。
もちろん、基地内で使ったら特別減給だと注意済みだ。
「落ち着け軍曹。それと、石山と武田は謝罪しておけ」
「何かお取り込み中の所悪いけど、次の説明良いかな？」
誰のせいだまったく。
とりあえず、３人が松平の一言で早々に落ち着いたので、説明をしてもらうことになった。
「説明するより体験した方が早いかなー。んじゃ、外の訓練フィールドに出てね」
「「了解」」

第四章「新しい風（後編）」

模擬戦用の訓練フィールドに到着すると松平から攻撃の指示が入った。

「もっさんイッシーに向けてロックオンして射撃してみて。んでイッシーは回避しようと動いてみてね」

言われた通りにロックオンをして射撃を行うと攻撃を行った瞬間に左方向に滑るような回避行動をとられた。正確に言うとこちらが構えた瞬間から動いていたのだが。

「今のは一体？」

避けた本人も混乱している。てっきりこちらの構えを見て避けたのだと思ったんだが。

「今のがＢＲＣＳを使った回避行動だよ。今は左に避けようと左手の操縦幹動かそうとしたでしょ」

「その通りです。簡単に言えばパイロットの動きを先読みするということですか？」

なるほど。機体の反応性が格段に上がる訳だ。回避行動における認識、操作、行動の操作部分を削ったのか。

「さすがイッシー頭が良いねぇ。適性が低いともうちょいタイムラグがあるけど、３０％もあれば普通に対応出来るようにはなってるよ」

そうなると次に疑問となるのが私のような適合者はどうなるかだ。

「で、私の場合は緊急時だけでなく通常時の操作で出来るってことか？　ゴーストと同じような感覚で動かせてしまったんだが」

「そそ、その点はゴーストと似てるねぇ。あれは主にバランスとるのがメインで行動の制御はサブだったけど。今回はそんな細かいことじゃなくて機体の動きがメインだからね。思った通りの動きをしてくれるよ」

便利になったもんだなぁ……。気が早いが第四世代が出たらどう

なるんだろうか。
技術の進歩にしみじみとしていると、松平からとんでもないことを言われた。
「ってことで、戦闘訓練でデータを取りたいので、よろしく！　チーム分けはそうだなー……もっさん対全員で」
「おい、待て！　私には2年のブランクがあるんだぞ？　ハンデとしてはおかしくないか？」
「良いじゃん。ちょっと荒いリハビリだよ」
勘弁してほしい。いくらなんでも条件が不利過ぎる。
松平を無視してチーム分けをしようとすると。
「大佐殿、手合せ願います！」
「特殊部隊ゴーストの実力。この手で確かめたいです」
「大佐の良いとこ見てみたい！」
ダメだ。3人ともノリノリだ。腹をくくってやるしかないか。
「分かった……仕方ない。3人まとめて相手をしよう。ただ言っておくが2年のブランク持ちに負けたら分かってるだろうな？」
3人の顔に緊張が走り、息をのんでいる。
「特別訓練メニューを出してやる。楽しみにしておけ」
「話がまとまったようで何より。んじゃ距離を離してー」

高度1km相対距離約1．5km地点まで離して対峙する。レーダーを見ながら敵の情報の確認をAIに指示する。
《敵機マップス3機。該当機種データ無し。武装構成よりファイター1機。スナイパー2機と推定。ターゲットをそれぞれα・β・γと設定します》
敵の編成に対して自機の武装は近中距離仕様だ。ファイター相手にすると強力な援護射撃が、スナイパーを先に落とそうとすると挟み撃ちか。やれやれ困ったもんだ。普通は一時撤退して味方と合流するレベルなのだが……。
「ターゲットαを最優先ターゲットに設定。ロックアラートはβお

よびγからのみ」
《了解。ターゲット・ロックアラート設定完了しました》
深呼吸をして頭を研ぎ澄ませていく。
「ふぅ……こちら坂本準備完了だ！」
「オッケー。両者準備完了ってことで、模擬戦開始―！」

松平の合図とともに田口軍曹が突撃してきた。
「行きますよ大佐殿！」
アサルトライフルが正確にこちらを捉えながら発射されるが、急加速からの急制動。さらに急上昇と急降下を組み合わせて自由自在に空を駆けて回避する。
「この動きやすさ。ゴーストとハガネ以上だな。大体動きの癖も掴めてきた」
「やりますね大佐殿。でもこちらは3人です」
近づいてきた田口軍曹が一旦距離を取り始めろと、ロックアラートが鳴り出した。
狙撃が来るか！　浮遊装甲をβγ方向に展開。
装甲に銃弾が当たる音が鳴り響く。どうやら防げたようだ。
「ちょっと何今の？　動きが速すぎてどうしようもなかったからロックオン使ったのにあの装甲展開スピードは反則よ」
「うちの隊長より速いか」
「足を止めて攻撃を当てる。2人とも援護射撃を頼むぞ」
今度は一旦離れていた田口軍曹がブレードを抜いて再度接近してきた。
「そう簡単に当たってはやらんぞ軍曹！」
こちらもアサルトライフルを発射するが、構えて発射した瞬間に横に急加速で回避されてしまう。
これが実戦におけるＢＲＣＳによる回避か。
「なるほど。これはなかなか厄介だな」
「すごいでしょー。これが今度から組み込もうとする反射回避だよ」

「……何だ今のは？」
軍曹も困惑気味だ
動きに舌を巻いていると遠距離からの狙撃が相次いで飛んできた。
田口機がこちらに近づいてきている中、足を止めて防ぐか。回避しながら突っ込んで狙撃の誤射を軍曹にぶつけるか。
さっきの避けられた様子から、この回避能力は恐らく攻撃認識があって初めて成り立つもの。となると、後ろから来る味方の攻撃なら反応出来ないはずだ。突っ込むか。
「田口軍曹、まだまだだな。私に近づくことすら出来んか」
わざと挑発をしてこちらに突っ込むのを止めないように挑発する。バレルロールをしながら狙撃を回避し、田口機を近くまで引き付ける。
「大佐殿、落とさせてもらいます！」
ロックアラートはしっかり鳴っている。田口機もかなり近い、タイミングはここか。
「よく言った！　私を落としてみろ！」
急制動から一気に田口機に向けてこちらも加速する。
田口機のブレードによる突きを回転しながら下降で回避し、後ろに回ってワザと射線に背を晒す。
「もらったよ！」
「やめろ武田！　軍曹回避を！」
射線に乗るように田口機の背面に蹴りを入れながら急上昇する。体勢を崩された田口機にロングレンジライフルの弾が直撃するが、想定してたダメージより何故か少ない。
「おい、松平。なんかやたら設定が頑丈じゃないか？」
「あー、近接機はとっても堅くなりました」
そういえばカタログスペックは凄かったな。
現行機以上のスペックに加え熟練パイロットが搭乗してながら、特殊システムを使われるとは、めんどくさいことこの上ない。
射撃で落とすとすると時間がかかりそうだ。ただでさえ数が不利

な状況なので、早いところ落としておきたい。少々リスクはあるがブレードで速攻をかけるか。
　ブースターの出力を上げて再接近する。今度は射線上に田口機を盾となるよう位置を取り直して攻撃をする。
「悪いな落ちてもらうぞ軍曹」
　袈裟切りをしかけると強力なバックブーストで距離を一気に取られた。どうやら近接攻撃も簡単に当てられないようだ。
「さすが、大佐殿！　ですが、このシステムに慣れてきました。そう簡単にやられませんよ」
「本当に厄介なシステムだな！」
　追撃を入れようとこちらもブースターの出力を上げ急接近してもう一度袈裟切りをしかけると、田口機は浮遊装甲を展開し私のブレード防いでいだ。しかも、それだけではなく装甲間からブレードを差し込んで反撃に出た。
　浮遊装甲に隙間が出来た瞬間に距離を取って回避出来たが、狙撃が続けて放たれる。回避しながら反撃の隙を伺うが、なかなか攻撃が激しくて近づきにくい。
「やるじゃないか3人とも」
「大佐がそれ言う？　シミュレーションならさっきまでに2、3回は落としてますよ！」
「さすが大佐殿。先ほどは確実に入ったと思ったのですが」
「さっきのは良かったぞ軍曹。危うく落とされる所だった」
　ＢＲＣＳを搭載していないハガネだったら確実に落とされていた。機体の性能に助けられたな。
「直撃コースをこうも簡単にあしらわれるとは……」
「買い被りすぎだ石山。ここまで動けるのは機体のおかげだ。では軍曹今度こそいただくぞ！」
　少し卑怯だが、会話によって油断したのか弾幕が薄くなったので、その隙に軍曹にもう一度攻撃をしかけるために突っ込んだ。
「油断するなよ軍曹！」

「っ！？」
「大佐卑怯だー！」
今度こそ貰ったと思いきや、やはりＢＲＣＳによる反射のおかげか高速で後方に下がる回避行動をとられた。そこに連続して射撃を撃ち込み続ける。
私の追撃に対して、反射の直線的で急激な動きではなく一般的な円軌道による回避行動をとられた。
「ん？　まさかな」
一旦射撃を止めて、もう一度射撃を１発放ってみる。
私の弾丸に対して田口機は左にスライドして回避した。そのまま射撃を続けてるとやはり普通の回避行動をとり、反射による急加速的な動きは見られなかった。
「なぁ、松平。ＢＲＣＳの反射回避って、もしかすると制限かかってるのか？」
「あー、もっさん気づいちゃった？」
「やっぱりそうだったか」
「適性が低いと仕方ないよー」
間違いない。ＢＲＣＳによる反射は一度脳が危険を感じて緊急回避に成功した後で、相手の攻撃に集中しだすと、連続で使用出来ない仕様らしい。
それなら、連続で攻撃を叩き込むことが出来れば崩せるかもしれない。やってみるか。
アサルトライフルを撃ちながらブースターの出力を大幅に上げて急加速する。ブレードで袈裟切りをしかけるが、浮遊装甲を展開され斬撃を防がれる。
こちらはそれに対して、アサルトライフルとブレードを即座に交換し、二刀流で浮遊装甲を弾いた。
《βγの射線からαが外れました》
２機で挟むつもりだな。悪くない戦術だ。
浮遊装甲を両肩にマウントして、多少の被弾を覚悟しながら致命

傷を防ぐ準備をする。
こうなると田口軍曹を他2機が後ろに回り込むより前に落とさなければまずい。
「落ちて貰うぞ軍曹！」
「させませんよ！」
田口機は先程と同じ手で、既にブレードによるカウンターの体勢に入っていた。
私は機体を後方に宙返りさせて攻撃圏内から一旦退避して、再突撃をしかける。
初撃は恐らくＢＲＣＳが作動して後退するはずだ。なので、初撃は捨てる。勝負は2撃目の追撃からだ。
左腕で予備動作の少ない突きを初撃に放つと、予想通り急後退して回避された。
「もらった！」
右腕のブレードを同時に投擲する。
田口機の右腕に直撃するが、そのまま左腕でライフルを構えて射撃体勢に入っている。
「甘いな軍曹！」
ワイヤーで右腕のブレードを回収しながら左腕のブレードを投擲し、田口機の左腕も潰して、ライフルを使用不可能にする。
がそこで、レーダーを見て回り込まれていることに気が付いた。
β方向に浮遊装甲3枚展開。間に合うか？
「さすがタグポン。よく頑張った！」
「タグポンは止めろ武田！」
田口軍曹の怒鳴り声が聞こえた瞬間に弾丸が浮遊装甲に当たった。
危なかった今のもギリギリだったな。
「今の防ぐ？！」
「こちらに任せろ」
今度はγ方向にも浮遊装甲展開し、角度を維持しながら上昇して機体を反転させる。

ファイターである田口軍曹が行動不能の今、遠距離からの防御がしやすい。
「む、これも防ぎますか。後ろにも目がついているかのようですね大佐」
「人を勝手に妖怪扱いしないで欲しいな石山。レーダーを頼りに動いているだけだ」
「うちの高井と同じことを言いますね。彼も油断さえしなければ、防御がかなりうまい方なんですが、大佐はそれ以上に当てにくい」
「ちなみに、君たちの狙撃も十二分にいやらしいぞ。この第三世代型じゃなければ本当に数回落ちている」
「お褒めに預かり光栄です」
おっと、褒めてる側から直撃コースだ。やるじゃないか。
ブースターの出力を上げて最大速度で大きく回りながら石山機に近づいていく。
攻撃の要領はさっき田口軍曹相手に掴んでいる。
まずはアサルトライフルを撃ち込み反射回避を誘導しようと試みる。
しかし、こちらの意図に反して石山はダガーとブレードを装備してこちらに接近してきた。
思い切りが良くて大変結構！　それに高速機動を相手に取り回しが悪いロングレンジライフルは使いにくいのも確かだ。その判断は間違っていない。
つばぜり合いをしながら通信を入れる。
「近接戦闘に入るタイミングも悪くないな。犬塚に叩き込まれたか？」
「その通りです。隊長相手にファイターのあしらい方を研究させてもらっています」
そういえば、以前の模擬戦でもアームズ相手に近接武器で対応していたな。
「勉強熱心だな。その実力見せてもらおうか」

お互いの得物を打ち合うが決定打が出せないでいた。
なるほど、本当によく鍛えられている。普通に切りかかるだけではらちがあかないようだ。
そう判断して、つばぜり合いから胴体に蹴りを入れて体勢を崩し、突きの構えで突進する。しかし、正面に捉えていたはずが、反射回避で左に大きく避けられ、すぐにこちらに切り返してきた。素早いカウンターだ。浮遊装甲は今全て武田機の方にマウントしてある。ここはブレードで防ぐしかない。
ブレードでダガーを防ぎ、もう一度つばぜり合いに持ち込む。相手の体勢を崩そうとするが逆にこちらの体勢が崩された。さらにロングレンジライフルの狙撃をコアに貫ってしまう。
《コアに被弾。戦闘継続に支障ありません》
くっ、今の衝撃は何だ？
「いやー、石山さんも無茶しますねぇ。後でオヤッさんに怒られますよその使い方」
「やむをえない状況だ。おかげで当てれた」
「そりゃそうなんですけどねー。ロングレンジライフルでまさか殴るとは思ってなかったですよ。下手すれば戦闘中に二度と狙撃できないですよ？」
「その時は、ほかの武器で何とかするまでだ」
なるほど一本取られたな。さすが犬塚の部下か。
「よく攻撃を当てた。だが、まだ落ちてないぞ油断するなよ」
「分かってます。武田、２機で接近戦を挑む」
「了解っと」
そういえば、本職はスナイパーながら近接武器の扱いには２人とも結構長けているんだったな。まともに相手をすると危ないかも知れないが、やるしかないか。
石山に切りかかられた攻撃を受け止めていると、武田から色っぽい声で通信が入った。
「大佐ーこっち向・い・て！」

レーダーを見るとかなり近い、ダガーを構えながら射撃された。
一旦距離を取って仕切り直しをしなければと思い上昇して体勢を立て直した。
「大佐のいけずー」
「まったく攻撃をしかける掛け声とは思えないな」
「私の魅力が通じないなんて……手ごわいわね」
残念ながら君よりも魅力的な人を知ってるのでね。と心の中でつっこみを入れてカウンターの準備をする。
２機が左右から同時に切りかかるのをブレードで受け止めると、石山、武田両者が肩の粒子砲によるゼロ距離射撃を放とうとしたが、それより先に浮遊装甲をぶつけて体勢を崩す。
「甘い！」
機体を石山機の方に向け、ブレードの投擲から突きの構えで突進の連携攻撃を放つ。やはり初撃は避けられるが。追い打ちが当たり撃墜することが出来た。
「さすが、大佐やりますね。完敗です」
いや、正直かなり苦労した。何度も言うがハガネだったら負けている。
「何というかもっさんにしか出来ない対反射回避の必勝パターンになってるねぇ……、普通は操縦の際に生じる動きで出来るちょっとしたタイムラグがほぼ無いもんなぁ。さすがというかなんというか」
「これ以外で倒す方法を考えるのが今後の課題だな。というか松平も出来るだろ？」
「そりゃー僕の子ですからね。出来るに決まってるよー」
「やっぱりか。だったら松平も久しぶりに一緒に乗れば良いのに」
おっと私語をしている場合ではなかった。まだ武田が残っている。
「さて、ギブアップするか？」
「大佐は冗談がお好きなようですね。もちろん最後までやりますよ」
「特別訓練を回避してみせろ。君ならやれるさ」
「まったく嫌味を言うのもお好きなんですか？　女の子にモテない

ですよ！」
　とこっちを動揺させるためであろう言葉を投げかけながら武田機が接近してくる。
　こちらも迎えうつ構えを取っていたらダガーが投擲された。この後のカウンターを用意する意図も込めて浮遊装甲で防ぐと、金属音と共に展開していた装甲が吹き飛ばされた。
「何度も見てますからね！　同じ手は食いませんよ」
どうやら肩に浮遊装甲をマウントさせタックルを入れてきたらしい。おかげで体勢が完全に崩された。
「これで丸裸ですよ大佐！」
　ライフルと粒子砲による一斉射撃が放たれる。
「っ！？」
　直撃すると思ったら瞬間機体が勝手に動いていた。機体のバランスはメチャクチャだったが強引に右に大きく動かされたらしい。おかげでかすり傷で済んだ。
　なるほど、これが反射回避か。感覚としては「危ない」と思ったから避けたんじゃなく、避けてから「危なかった」と認識するような感じになるのか。
「なんですか今の動き。反則臭くないですか？！」
「これがさっきまで君たちが使っていた主なシステムなんだが……」
「え？　んじゃもしかして今までのって単純に操縦してたんですか？」
「いや、イメージコントロールだ。考えに合わせて機体が動いてくれる」
「卑怯だー！　やっぱこの人卑怯だ！」
　距離が離されたので、アサルトライフルで応戦を始めるとちょっとした違和感が生じる。
　反射回避の感覚がすごく短い。少なくとも先ほどの2人は一度攻撃が途切れて、落ち着いたら再稼働という感じだったのが、攻撃を回避している最中にちらほらと反射回避がとられているように見え

た。
「松平。もしかして、適合率５０％以上から反射回避の制限が外れるのか？」
「正解。よく見てるねー。５０％未満だと過剰に動き回る機体に振り回されるんだけど、５０％以上からは適宜発動するようになってるよ」
「最初に言ってくれ……」
「ネタバレしたら面白くないでしょ？」
やっぱりそうか。さすが松平。兵器を人型にする理由がカッコいいで済ます男だ。
それにしても、そうなると今までの２人以上に厄介だな。
とりあえず、先ほどまでの連携が通用するか試してみるか。
武田機の上に位置をとり、わざとライフルを外して、高度を下げるように誘導する。高度３００ｍ。ここくらいならやれるはずだ。
一気に加速し、体当たりで地面にまで落とす。武田の射撃で多少の被弾はするがこの際関係ない。
「地面に落ちれば避けられまい！」
もちろん２次元的な動きで回避出来るのだが、はったりをきかせて動揺を与えようとする。
ブレードの横切りで右から襲いかかると左に大きく動かれた。続けてブレードを投擲して追撃するがそれも上昇して避けられた。
せっかく地面に降ろしたのに逃げられてたまるか！
さらにもう一本のブレードも投擲するが大きく回避される。
「君も十分卑怯くさい動きをしているぞ。先程立てた戦術があっさり崩された」
こうなると、死角からの攻撃や意表をついた攻撃で危険と認識させる前に当てないといけないのか。さて、どうする？
対処方法を考えていると、武田機がロングレンジライフルにダガーを取り付け突っ込んできた。
「はぁ……はぁ……正直機体が敏感過ぎて疲れます。ってことで、

これでお終いにしたいですね！」
　それに対して、自機を隠すように浮遊装甲６枚すべてを正面に展開し突進を受け止め、陰から真上に飛び出し武田の機体を掴んだ。
「捕まえたぞ。これで逃げられないはずだ」
「機体が勝手に！　うわっ」
反射回避で左右に引きずられながらも、ブレードをコアに突き立てて撃墜判定をもぎとる。
「ふぅ……私の勝ちだ」
緊張がとけて思わず長い息を吐いた。
「良いデータがとれたよ。みんなガレージに戻ってきてねー」
「了解」
　第三世代のテストは辛うじて大佐としてのメンツを保つことに成功した。
　ただ、ほっとする訳ではなく、胸は不思議と高鳴っていた。多分この空を自由に動き回れる感覚が久しぶりで楽しかったからだろうか。

第五章「反省会」

「いやーみんなおつかれ」
機体から降りるとオヤジさんと松平が出迎えてくれた。
「で、使ってみてどうだった？」
「これは新兵に使わせるには難しいですね。専用の訓練が必要になると思います。恐らくハガネに乗っていた者も慣れるまで戸惑います」
さすが教官だ。早速どう教え込むかを考えているに違いない。
「ホントよ。目が回りかけたわ。でも、おかげでしぶとく避けれたし慣れれば良いかも……うぅ気持ち悪い……」
「ありゃ、武ちん大丈夫？」
「ちょっとそこで休んでくる」
どうやら酔ったらしい。機体に振り回されているような動きだったから仕方ないか。
自分の意志より遥かに激しい動きで視界が回されれば気持ち悪くもなる。
「イッシーとタグポンは大丈夫だったかい？」
「平気です。武田のように常時振り回されなかったので」
「私も同じくだ。一瞬ハッとするがそれ以降はコントロールが自分に戻ったのでな」
「うーん、そうなると、もうちょい制限をかけた方が良いのかなぁ」
さっそく反省会が始まってしまった。放っておくといつまでも続きそうだったので、自分が抜け出すために時間を指摘して食事に誘おうと考えた。
「そろそろ、昼休憩の時間だ。食事の後で良いんじゃないか？」
「ん？　僕は構わないよ。んじゃ早く行こうか」
「私もいきます……」
「何か死にそうな声してるけど、武ちん大丈夫？」

「ご飯食べたら治ります……肩貸して……」
いや、治るどころか大変なことになりそうなんだが……。ただ、行きたいというのなら止める訳にもいかないか。栄養補給は大事だ。
食堂に向かっている最中、武田に肩を貸しながら歩いている松平から、突然とある質問を投げかけられた。
「ところで、もっさん。来月だか再来月の条約締結式ってどうなったんだっけ？」
丁度今日その連絡が入っていたのだが、テストに引っ張り出されたせいで斜め読みしかしていなかった。
「テロ騒ぎがあったせいで、再来月だ。場所はレトリア連邦最南端の都市でやるそうだ」
松平しかいなかったら言っていたが、隊員がいる前なので、警備に参加しなくて済むから気が楽だと言うのは止めておいた。
「へぇー。再来月か」
「何かあるのか？」
松平が何かを考える素振りを見せたので、ついつい突っ込んで聞いてしまった。
「その時期までに色々と間に合った方が良いかなーってさ。例の船とかさ」
間に合った方が確かに助かるが、使うような事態は起きて欲しくないな。
「ん？　例の船って……うー……私が吹っ飛ばした奴？」
「ちょっと違うかなー。武ちんのおかげといえばおかげなんだけどね」
「そうなんだ。何かよく分かんないけど、またカッコいいのをお願いね」
「任せといてー」
松平の最後の言葉はかなり上機嫌だった。
そっちの方がかっこいいでしょ？　で開発を推し進める男にその

応援は効果抜群のようだ。しかし、いつの間にか仲良くなっているが、話の内容が割と物騒なのは職業病だな。やれやれ。

食事を済ませると、確かに武田は元気になった。さてと、三人ともまともに話が出来るようになったところで、特別訓練の指示を出すか。

「忘れてはいないと思うが、私が勝ったので君達三人には特別訓練を受けて貰う」

私の発言に対して、三人とも顔が強ばってしまった。いや、そんな無茶苦茶な要求はしないぞ。

「松平に協力して、データ取りを手伝ってやれ」

「実験部隊がいるのにですか？」

石山が実に的確な質問をする。本来なら今日のテストも実験部隊が行うものだが、開発者から特別に指摘されたので例外中の例外だ。

「そうだ。ハガネに乗って第三世代型の特徴を色々学んでこい。実験部隊には私から連絡を入れておく」

「え？　ハガネに乗るの？　あ、乗るんですか？」

「武田、明日からもう一度候補生と一緒に上官の敬い方を教えよう」

「や……やだなぁ田口教官殿。ちょっと言い間違えただけじゃないですか」

武田は引きつった笑いを浮かべながら椅子ごと少し後ずさりをした。

やれやれ、実際そんなに気にしてはいないんだが、真面目だな田口軍曹は。ちなみに、目の前に軍のトップをニックネームで呼ぶ奴がいるぞ。

私は咳払いをして続きを話す合図をすると二人とも静かに戻った。

「今日実際に戦ってみて分かったと思うが、撃墜するのが相当難しい機体だ。万が一に備えて、対策を早めに手に入れておきたい」

これがもし第三国に漏れたら《サビ》が生産された時以上に問題になる。その時のためにも準備しておいて損はない。

「田口軍曹も、指導の合間に頼む」
「ハッ、了解しました」
候補生の指導で大変だろうが、彼が参加すればより教育者としての能力が上がるため、出来る限り参加してほしいのだ。こちらからもスケジュールを調整するよう手配しておこう。
「僕もサポートするから、ハガネでも頑張れば何とかなるよ」
「んじゃ明日からまっちゃんが帰るまで模擬戦してれば良いんだ」
「助かるよ。ん、まっちゃん？　僕？」
「そうだよ。一方的にあだ名をつけられたからつけかえしてみた。変態よりマシでしょ？」
そう言えば、ブリューナクを紹介した時は変態だったな。それに比べれば確かにマシだ。
「武田、松平さんは目上の方だぞ。失礼ではないのか？」
「いやー、イッシーも気にしないで、好きに呼んで良いよ」
「そうですか。ただ、やはり目上の方をあだ名で呼ぶのは気が引けるので松平さんと呼ばせて貰います」
松平は石山の言葉に対して嬉しそうに笑顔で頷いていた。仲良くなってくれたようで良かった。
松平も上機嫌だし、そろそろ抜け出して書類仕事を片付けよう。
「ってことで、そろそろさっきの模擬戦の反省会がしたいんだけど、もっさんも良いかな？」
逃げる前に切り出された。しまった！
「フフフ、今日も逃がさないよもっさん」
松平が悪そうな笑顔で両手の指をぐにゃぐにゃ動かしながらこちらに迫ってくる。
ここで、逃げると後が面倒になるので、大人しく言うことを聞くか。
ゴールデンウイークにこれをやられた時は菱田重工の工場内で壮絶な鬼ごっこをさせられた。何故かいつの間にか先回りをされていたのだ。ひょろく見えて意外とすばしっこい。

「せめて、書類仕事をしながら参加で良いか？」
「それくらいなら、問題ないよ」
その後はオヤジさんも呼んで模擬戦の様子を録画した映像を見ながら、午後のほとんどを反省会に費やされてしまった。その結果、試して貰いたい連携がいくつか生まれたので有意義な結果だった。
「今日はみんなで飲みに行こうよ！」
松平がとても元気良く遊びに行く提案をする。かなり集中して頭を使っている様子だったのにどこからそんな活力が出てくるんだ。
「お前はホント元気だな。今日月曜日だぞ？　明日も朝からみんな色々仕事があるのだが」
「えー、堅いこと言わないで行こうよ。せっかく遊びに来たのにつれないなぁ……僕とは遊びだったのかい？」
「誤解を招くような発言をするな！　まぁ彼らが良いなら私は構わないが」
集まった４人の方に顔を向けて確認をとると、みんなが期待で顔を明るくさせていた。
「言うまでも無く行くそうだ。良かったな松平」
「いやー、やっぱこっちは楽しいねぇ」

間話

とある居酒屋に六人で向かい、飲み会が始まる。
「そういえば、元ゴースト隊に縁のあるメンバーが三人もいるのか。よく会うせいかあまり懐かしさは無いけどな」
「僕とオヤジさんは良く連絡取り合ってるしね」
オヤジさんは口に焼き鳥を頬張りながら、うむ。と頷いて同意する。
「あれ？　まっちゃんもゴースト隊だったの？」
「言ってなかったっけ？　そうだよ。五番機やってたんだ」
「ならさ、今度模擬戦やろうよー」
「良いよー。負けないからね」
周りが盛り上がっている間に一旦トイレに立ち、ついでにサナにメールを送る。電話すると言った約束を早速破ってしまいそうだ。機嫌を損ねなきゃ良いけど。
トイレから戻るとゴースト隊にいたころの話をオヤジさんと松平が始めていたのが聞こえた。
「んで、その時のもっさんがさ、宮っちに怒鳴られて戦術レポート大量に出されてさ、レポート書きながら寝てるんだよ。訓練中も寝不足で機体がフラフラしてるしハラハラしたよ」
なっ！？　何を言ってるんだあいつは？
背中に寒気が走るが冷静を装って席に戻る。
「何か盛り上がってたな何の話だ？」
よく見ると何故か軍曹が涙を流している。まさか、私の信頼が地に落ちたのか？
「大佐殿がそこまで苦労していたとは……初めてお会いしたときにこんな若造が大佐なんて。と嫉妬した自分が恥ずかしい」
上手いこと勘違いされたようだ。良かった。
それにしても泣き上戸だったのか田口軍曹？　佳奈さんの誕生日

の時はそんなこと無かったんだが、あの時はそこまで酔ってなかったのだろうか？
「てか、大佐。それ単にサボってただけなんじゃ？」
武田が正解を口にしてしまった。さて、どうごまかそうか。
「何、休憩時間に昼寝くらいさぼりではない。効率的に仕事をするための充電だ」
「え？　もっさんあれ休憩時間だっけ？」
松平頼むから余計なことを言わないでくれ。心の中は焦っているが何とかまだ演技を続ける。
「あぁ、間違い無く休憩時間だ。なぁ、おやっさん」
「いや、ワシは知らんぞ？　基本ガレージにいたからな」
顔がにやついている。この状況をどうやら楽しんでいるようだ。頼みの綱が切れた。こうなれば、アイコンタクトで訴えるしかない。
咳払いをしながら松平と目線を合わせて、基地の隊員に視線を動かす。
「そうだったねー。いやー、うっかりしてたよ」
理解してくれたようで何より。危なかった。ボロが出ない内に早く話題を変えてしまおう。
「状況が大分変わったんだ。私達の昔話をしても仕方ないだろ？」
「んじゃ、今の話で、大佐って彼女いるの？」
武田め……話を変えすぎだろう。いくら酔っているとは言え唐突過ぎるぞ。いや、二十歳前後の飲み会での話題なんてそんなものだったか。
「トップシークレットだ」
「この子だよ」
言ったそばから松平が写真を見せた。ゴースト隊とサポートメンバーが召集されて、初めてとった写真だ。
懐かしいな。自分の顔が随分若く見える。ってそれどころじゃない。
「へぇー、ちょっと堅い表情ですけど、笑えば可愛い人っぽい」

その通りだ。良く分かってるじゃないか。いや、そうじゃなくて。
「ちなみに、これがつい最近三人でとった写真」
「へー！　随分と印象変わるなぁ。やっぱり可愛い人だ！　やるなぁ大佐」
田口と石山も松平の端末を覗き込み、オヤジさんはついにバレたかと苦笑いしている。
さて、気づかれなければ良いのだが。
「同じ所属だったんですか？」
「その通りだ。だから、あまり公言したくないんだよ。色々と面倒な話だからな。言いふらさないでくれ」
一応部隊が解散した後からだったので問題はほぼ無いと思うが、他の者に示しがつかないので念のため。
「んじゃ、まっちゃんはどうなの？」
「僕には愛すべき娘たちがいるからねぇ」
「えー、まっちゃん結婚して子持ちなの？」
「いや、今日私達が三人目の娘に乗ったからな。こいつは独身だ」
私の言葉に対して、武田は少し考える素振りをしてから、ハッと顔をあげた。
「へ？　あ、もしかして娘ってマップスのこと？」
「正解だ。生みの親だから愛着があるんだろう」
その言葉を武田が聞いた途端松平に向かって正座し、深々と頭を下げた。
「お父さん！　娘さんにはいつもお世話になっております！」
「こちらこそ、愛娘がいつもお世話になっています」
完全に酔ってるのか不思議な行動をし始めた二人に驚く。ま、まぁ楽しそうだから別に良いか。
「うちにお父さんをください！」
「いやいや、何か色々と間違ってるよ武ちん！？」
二人が勝手に盛り上がり始めたので、男四人で話を続ける。
「で、田口君。君の方はどうなっている？」

「特に何も」
「そうか。ゴールデンウイークにデートか」
カマかけだが、酔っていて判断力が落ちている今なら引っかかるか？
「大佐、まさかまた後ろから見てたんですか？」
二度目だ。良く引っかかるな。また次もやってみたくなる。宮野大将にもこんな感じで見られたのだろうか？
「フフ、部下の動向を知るのも上官の役目だ」
軍曹は一体いつからつけられていたのか考え出したのか、悩ましそうな顔をして唸っている。
「で、石山はどうだ？」
「あまりそういうのには縁が無くて。隊長と副隊長からは良く周りを見ろと言われ、高井からはお前はバカだと言われますが、失礼な話だと思いませんか？」
鈍感な奴だと裏で愚痴られてそうだな。あまり上官として褒められたことでは無いが、少し手を貸してやるか。
「たまに吉田と小山に怒られるだろ？」
「よく分かりましたね。何でかは分からないですが、、、大佐は分かるんですか？」
周りから見れば一目瞭然だと思うのだが。恐らく小山に止められて、周りのメンバーも何故かは伝えてないのだろう。
「怒られる内容はもっと女の子の気持ちを考えろ。とかデリカシーが無いだろ？」
「先程の田口教官ではないですが、何故大佐はそこまで我々の事情に詳しいんでしょうか」
石山が不思議そうに首を傾げた。
多分事情を知ってる人間だったら誰でも分かるぞ。
「上官だからな。というのは冗談で状況から推測して当てずっぽうに言ったのが当たっただけだ。で、君が怒られる理由なんだが、正解は私の口からは言えない」

「残念です」
石山は頭を少し垂らしながら肩を落とした。余程正解を知りたかったのだろう。
「かわりにヒントを教えよう。怒っている時の理由だけを考えるのではなく、感情を表した時や変化した時の理由を考えてみろ。細かい変化を見逃さなければ、答えが出るかもしれんぞ」
「助言に感謝します。考えてみます」
石山は少し煮え切らない表情で頷いて納得してくれた。
後はうまくやってくれ。これ以上は扇動になってしまうからな。
「だーかーらー、それじゃかわいくないじゃん！」
「いやいや、これがカッコいいんだよ！」
「んじゃ、今度はかわいいの作ってよー」
隣でまだ二人は騒いでいた。ある程度事情を知っているオヤジさんはその様子を見て、目を細めている。
そんな様子を見ていると、ポケットの中に入れていた携帯にメールの着信が入った。
〈楽しんでる？私もそっちに行きたいなぁ。なんてね。松平さんによろしくね。〉
これが終わったら後でちゃんと電話しておこう。
「そういえば大将。澄川は元気でやってるか？」
「元気ですよ。そう言えば、オヤジさんとは長いこと会ってないのか」
「彼女がオジサマと呼ぶ響きは綺麗だったな……うちの生意気な娘とは大違いだ」
オヤジさんは深い溜め息をつきビールを一気に飲み干した。
「そう言いながら、彼氏を連れて来でもしたら怒鳴りそうだな」
「当たり前だ！　娘は誰にもやらん！」
「やっぱりか。当分娘さんとは喧嘩が続きそうだなオヤジさん」
「坊主どうにかしろ！」
「人の家庭内の事情まで首突っ込めるかぁ！」

楽しい時間はあっという間に過ぎていきお開きとなり、　私はみんなの分の支払いを済ませ二次会には参加せず帰路についた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4762z/

鋼鉄の指揮官（ハガネノシキカン）

2012年1月14日15時54分発行